

京都府遺跡調査報告集

第170冊

1. 長岡宮跡第514次(7ANBNI-11地区)・殿長遺跡
2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・
井ノ内遺跡・今里遺跡
3. 一般国道24号城陽 I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡
下水主遺跡第6・8次

2017

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1 一般国道 24 号城陽 I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡

下水主遺跡



(1) 下水主遺跡第 8 次 L 2・M 2 区全景(南から)



(2) 下水主遺跡第 8 次 L 2 区氾濫流路 N R 42・60 全景(南から)

下水主遺跡



(1) 下水主遺跡第 8 次 O 1 区全景(北から)



(2) 下水主遺跡第 8 次 O 2 区全景(北東から)

序

京都府は、丹後、丹波、山城の各地域がそれぞれに、個性豊かな歴史と文化に彩られています。埋蔵文化財は、これら地域の歴史や文化の成り立ちを理解するうえで重要な手がかりを現代に生きる私たちに与えてくれます。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年の設立以来、36年間にわたって発掘調査を実施し、府内各地域の歴史を解明してまいりました。

これらの調査成果をもとに、地域の歴史を広く府民の皆様方にお伝えするよう努めることが責務だと考えております。

本書は、平成26・27年に国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業に伴う下水主遺跡、および、平成28年に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した長岡京跡・井ノ内遺跡・今里遺跡、長岡宮跡・殿長遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また、地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所、京都府建設交通部をはじめ、城陽市教育委員会、長岡京市教育委員会、向日市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの皆様へ厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

1. 長岡宮跡第514次(7ANBN1-11地区)・殿長遺跡
2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・井ノ内遺跡・今里遺跡
3. 一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡
下水主遺跡第6・8次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1.	長岡宮跡第514次・ 殿長遺跡	京都府向日市寺戸町北垣 内	平成28年6月28日～ 平成28年7月14日 平成28年12月19日～ 平成28年12月21日	京都府乙調土木事 務所	引原茂治
2.	長岡京跡右京第 1138次・井ノ内遺 跡・今里遺跡	京都府長岡京市今里	平成28年8月23日～ 平成28年10月14日	京都府乙調土木事 務所	増田孝彦
3.	下水主遺跡 第6・8次	京都府城陽市寺田今橋・ 南川瀬	平成26年11月17日～ 平成27年3月6日 平成27年4月24日～ 平成27年10月9日	西日本高速道路株 式会社関西支社新 名神京都事務所	石井清司 筒井崇史 竹村亮仁 渡邊拓也 橋本 稔 田原業月

3. 上記3事業3遺跡とも本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業につ
いては、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。
4. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第VI座標系によっており、方位は座標の
北をさす。
5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標
準土色帖」を使用した。
6. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。
7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影と現場写真の一部は、調査課企画調整
係主査田中彰が行った。

本文目次

1. 長岡宮跡第514次(7ANBNI-11地区)・殿長遺跡発掘調査報告	1
2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・井ノ内遺跡・今里遺跡発掘調査報告	7
3. 一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡	
平成26・27年度発掘調査報告	19
付編 平成27年度一般国道24号線城陽IC関係遺跡(下水主遺跡)年代測定	89

挿図目次

1. 長岡宮跡第514次(7ANBNI-11地区)・殿長遺跡

第1図 調査地位位置図	1
第2図 調査トレンチ配置図	2
第3図 1～5トレンチ平面図・土層断面図	3
第4図 出土遺物実測図	5

2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・井ノ内遺跡・今里遺跡

第1図 調査地位位置図	7
第2図 調査トレンチ配置図	8
第3図 1トレンチ検出遺構配置図	9
第4図 掘立柱建物1実測図	10
第5図 井戸SE31実測図	10
第6図 2トレンチ検出遺構配置図	11
第7図 3～6トレンチ検出遺構配置図	12
第8図 出土遺物実測図	14
第9図 長岡京跡右京第952次調査と右京第1138次調査配置図	16

3. 一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡

第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図	21
第2図 調査地区配置図	24
第3図 水主神社東遺跡・下水主遺跡全体地区剖図	25
第4図 小地区剖概念図	26

第5図	下水主遺跡第6・8次調査遺構配置図	28
第6図	M1区遺構配置図	32
第7図	M1区北壁土層断面図	33
第8図	M1区島畑79・81平面図・遺構断面図	35
第9図	M1区島畑80平面図・遺構断面図	36
第10図	M1区溝状遺構SD06土層断面図	37
第11図	M1区ピットSP40・41・43、土坑SK42実測図	38
第12図	M1区溝SD37平面図・土層断面図	39
第13図	M1区出土遺物実測図	40
第14図	L2区遺構配置図	42
第15図	L2区東壁土層断面図1	43
第16図	L2区東壁土層断面図2	44
第17図	L2区島畑69平面図	46
第18図	L2区島畑71平面図	48
第19図	L2区島畑72平面図・土層断面図	49
第20図	L2区下層遺構平面図	52
第21図	L2区氾濫流路NR60ほか土層断面図1	53
第22図	L2区氾濫流路NR60ほか土層断面図2	55
第23図	L2区出土遺物実測図	57
第24図	M2区遺構配置図	58
第25図	M2区東壁土層断面図	59
第26図	M2区島畑80平面図・遺構断面図	61
第27図	M2区島畑80土層断面図	62
第28図	M2区島畑90平面図・遺構断面図	63
第29図	M2区島畑73平面図・遺構断面図	64
第30図	M2区下層遺構平面図・ピットSP79実測図	66
第31図	M2区土坑SK51実測図	67
第32図	M2区土坑SK68実測図	68
第33図	M2区土坑SK69実測図	69
第34図	M2区土坑SK75実測図	70
第35図	M2区出土遺物実測図1	71
第36図	M2区出土遺物実測図2	73
第37図	M2区出土遺物実測図3	74
第38図	M2区出土遺物実測図4	75
第39図	O地区遺構配置図	77

第40図	O地区北壁土層断面図	78
第41図	O地区島畑91・92・94平面図	80
第42図	O地区島畑93・95平面図	81
第43図	O地区島畑91～93、S D01・02土層断面図	82
第44図	O地区下層遺構配置図	83
第45図	O地区土坑S K57実測図	84
第46図	O地区出土遺物実測図1	85
第47図	O地区出土遺物実測図2	86

付表目次

1. 長岡宮跡第514次(7ANBN1-11地区)・殿長遺跡		
付表	出土遺物観察表	6
2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・井ノ内遺跡・今里遺跡		
付表	出土遺物観察表	17
3. 一般国道24号城陽I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡		
付表1	出土土器観察表	93
付表2	石器・石製品一覧	98
付表3	鉄器一覧	98

図版目次

巻頭図版1 一般国道24号城陽I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡 下水主遺跡	
(1) 下水主遺跡第8次L2・M2区全景(南から)	
(2) 下水主遺跡第8次L2区氾濫流路NR42・60全景(南から)	
巻頭図版2 一般国道24号城陽I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡 下水主遺跡	
(1) 下水主遺跡第8次O1区全景(北から)	
(2) 下水主遺跡第8次O2区全景(北東から)	
1. 長岡宮跡第514次(7ANBN1-11地区)・殿長遺跡	
図版第1	(1) 調査前全景(南東から)

- (2) 1 トレンチ全景(西から)
- (3) 2 トレンチ全景(西から)
- 図版第2 (1) 3 トレンチ全景(南から)
- (2) 4 トレンチ全景(南から)
- 図版第3 (1) 3 トレンチ瓦器出土状況(東から)
- (2) 4 トレンチ井戸 S E 401(西から)
- (3) 5 トレンチ全景(北から)
- 図版第4 出土遺物

2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・井ノ内遺跡・今里遺跡

- 図版第1 (1) 調査前の状況(東から)
- (2) 1 トレンチ全景(東から)
- 図版第2 (1) 1 トレンチ全景(西から)
- (2) 1 トレンチ井戸 S E 31(南から)
- 図版第3 (1) 2 トレンチ全景(東から)
- (2) 3 トレンチ全景(西から)
- 図版第4 (1) 4 トレンチ全景(東から)
- (2) 4 トレンチ掘立柱建物2(南から)
- 図版第5 (1) 5 トレンチ全景(北から)
- (2) 6 トレンチ全景(西から)
- 図版第6 (1) 出土遺物1
- (2) 出土遺物2

3. 一般国道24号城陽 I C 関連寺田地区改良事業関係遺跡

下水主遺跡第6・8次

- 図版第1 (1) M1区全景(南から)
- (2) M1区全景(北から)
- (3) M1区調査区北壁土層断面(南から)
- 図版第2 (1) M1区島畑81全景(北から)
- (2) M1区溝状遺構 S D04全景(北から)
- (3) M1区島畑79全景(北から)
- 図版第3 (1) M1区島畑80全景(北から)
- (2) M1区島畑全景(南から)
- (3) M1区島畑80(溝 S D50検出後)全景(南から)
- 図版第4 (1) M1区島畑80上面検出素掘り溝 S D27土層断面(南から)

- (2) M1区島畑80上面検出溝 S D50土層断面(南から)
 (3) M1区溝状遺構 S D04内検出素掘り溝 S D16・18土層断面(南から)
- 図版第5 (1) M1区溝状遺構 S D06・溝 S D48土層断面(東から)
 (2) M1区溝状遺構 S D06・溝 S D48全景(東から)
 (3) M1区溝状遺構 S D04内検出素掘り溝 S D25・26土層断面(南から)
- 図版第6 (1) M1区柱穴 S P40遺物出土状況(南から)
 (2) M1区柱穴 S P40完掘状況(南から)
 (3) M1区ビット S P43完掘状況(南から)
- 図版第7 (1) M1区ビット S P41柱根掘削状況(南から)
 (2) M1区ビット S P41完掘状況(南から)
 (3) M1区土坑 S K42完掘状況(南から)
- 図版第8 (1) M1区溝 S D37遺物出土状況(北東から)
 (2) M1区溝 S D37遺物出土状況(部分、北東から)
 (3) M1区溝 S D37全景(北東から)
- 図版第9 (1) L2・M2区全景(南から)
 (2) L2・M2区全景(真上から、上が北)
 (3) L2・M2区全景(北から)
- 図版第10 (1) L2区島畑71全景(南から)
 (2) L2区島畑71全景(北から)
 (3) L2区島畑71全景(北東から)
- 図版第11 (1) L2区島畑69全景(北から)
 (2) L2区島畑全景(南から)
 (3) L2区島畑69全景(北東から)
- 図版第12 (1) L2区島畑69上面素掘り溝 S D50鋤痕跡検出状況(南から)
 (2) L2区島畑72全景(南から)
 (3) L2区島畑72全景(北東から)
- 図版第13 (1) L2区島畑72全景(北から)
 (2) L2区溝状遺構 S D43土層断面(北から)
 (3) L2区全景(北から)
- 図版第14 (1) L2区風倒木痕完掘状況(南から)
 (2) L2区氾濫流路 N R38検出状況(南西から)
 (3) L2区氾濫流路 N R38完掘状況(南西から)
- 図版第15 (1) L2区氾濫流路 N R60全景(北から)
 (2) L2区氾濫流路 N R60全景(南から)
 (3) L2・M2区下層遺構面全景(西から)

- 図版第16 (1) L 2 区氾濫流路 N R 42・60 全景(北から)
 (2) L 2 区氾濫流路 N R 42・60 全景(南から)
 (3) L 2 区氾濫流路 N R 42 全景(南西から)
- 図版第17 (1) L 2 区氾濫流路 N R 60 土層断面(南西から)
 (2) L 2 区氾濫流路 N R 60 土層断面(北半部、南西から)
 (3) L 2 区氾濫流路 N R 60 土層断面(南半部、南西から)
- 図版第18 (1) L 2 区氾濫流路 N R 42・60 全景(南から)
 (2) L 2 区氾濫流路 N R 38 全景(南から)
 (3) L 2 区氾濫流路 N R 42 土層断面(西から)
- 図版第19 (1) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土状況(北西から)
 (2) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土状況(南西から)
 (3) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土状況(南西から)
- 図版第20 (1) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土状況(南東から)
 (2) L 2 区氾濫流路 N R 60 木材出土状況(南西から)
 (3) L 2 区氾濫流路 N R 60 木材出土状況(北西から)
- 図版第21 (1) M 2 区西調査区全景(北から)
 (2) M 2 区西調査区全景(南から)
 (3) M 2 区島畑80 上層面全景(北から)
- 図版第22 (1) M 2 区素掘り溝 S D 70 全景(北から)
 (2) M 2 区素掘り溝 S D 52・67 全景(北から)
 (3) M 2 区島畑80 北壁土層断面(南から)
- 図版第23 (1) M 2 区島畑80 下層面全景(南から)
 (2) M 2 区島畑80 下層面全景(北から)
 (3) M 2 区素掘り溝 S D 71～73 土層断面(北から)
- 図版第24 (1) M 2 区島畑80 中央断ち割り状況(北西から)
 (2) M 2 区島畑80 中央断ち割り東半部土層断面(北から)
 (3) M 2 区島畑80 中央断ち割り西半部土層断面(北から)
- 図版第25 (1) M 2 区島畑90 全景(北から)
 (2) M 2 区島畑90 全景(南東から)
 (3) M 2 区島畑90 全景(南から)
- 図版第26 (1) M 2 区島畑73 全景(東から)
 (2) M 2 区島畑全景(北西から)
 (3) M 2 区東調査区下層遺構面全景(北から)
- 図版第27 (1) M 2 区土坑 S K 51 遺物出土状況(最上層、東から)
 (2) M 2 区土坑 S K 51 遺物出土状況(上層、南から)

- (3) M2区土坑SK51遺物出土状況(中層、南から)
- 図版第28 (1) M2区土坑SK51遺物出土状況(中層、西から)
 (2) M2区土坑SK51遺物出土状況(下層、南から)
 (3) M2区土坑SK51完掘状況(南から)
- 図版第29 (1) M2区ピットSP75遺物出土状況(北から)
 (2) M2区ピットSP75完掘状況(北から)
 (3) M2区ピットSK79全景(東から)
- 図版第30 (1) M2区土坑SK68・69全景(南から)
 (2) M2区土坑SK68・69全景(北から)
 (3) M2区土坑SK68・69完掘後全景(北から)
- 図版第31 (1) M2区土坑SK68遺物出土状況(上層、西から)
 (2) M2区土坑SK68土層断面(南半、西から)
 (3) M2区土坑SK68土層断面(西半、南から)
- 図版第32 (1) M2区土坑SK68遺物出土状況(下層、西から)
 (2) M2区土坑SK68下層遺物出土状況(西から)
 (3) M2区土坑SK68完掘後全景(西から)
- 図版第33 (1) M2区土坑SK69遺物出土状況(上層、南から)
 (2) M2区土坑SK69遺物出土状況(上層、西から)
 (3) M2区土坑SK69土層断面(南から)
- 図版第34 (1) M2区土坑SK69遺物出土状況(下層、東から)
 (2) M2区土坑SK69全景(北から)
 (3) M2区土坑SK69完掘後全景(南東から)
- 図版第35 (1) O1区全景(南東から)
 (2) O1区全景(北東から)
 (3) O1区南壁土層断面(北から)
- 図版第36 (1) O1区島畑94・溝状遺構SN01全景(南西から)
 (2) O1区島畑91全景(近世面、北から)
 (3) O1区島畑92全景(近世面、北から)
- 図版第37 (1) O1区島畑検出状況(北西から)
 (2) O1区島畑検出状況(東から)
 (3) O1区島畑検出状況(北半部、南西から)
- 図版第38 (1) O1区島畑91全景(南から)
 (2) O1区溝状遺構SD03全景(北から)
 (3) O1区島畑93全景(北から)
- 図版第39 (1) O1区島畑92全景(南から)

- (2) O 1 区溝状遺構 S D 04 全景(北から)
 (3) O 1 区溝状遺構 S D 02 全景(南から)
- 図版第40 (1) O 1 区島畑95 全景(南から)
 (2) O 1 区島畑95 全景(北から)
 (3) O 1 区溝状遺構 S D 05 全景(北から)
- 図版第41 (1) O 2 区島畑検出状況(南東から)
 (2) O 2 区島畑検出状況(東から)
 (3) O 2 区島畑検出状況(北西から)
- 図版第42 (1) O 2 区北壁(東半部)土層断面(南から)
 (2) O 2 区北壁(中央部)土層断面(南から)
 (3) O 2 区北壁(西半部)土層断面(南から)
- 図版第43 (1) O 2 区島畑91 全景(北から)
 (2) O 2 区溝状遺構 S D 02 全景(北から)
 (3) O 2 区島畑92 全景(北から)
- 図版第44 (1) O 2 区溝状遺構 S D 03 全景(南から)
 (2) O 2 区島畑93 全景(南から)
 (3) O 2 区溝状遺構 S D 04 全景(南から)
- 図版第45 (1) O 2 区島畑95 全景(南から)
 (2) O 2 区溝状遺構 S D 04 石鏃出土状況(南から)
 (3) O 2 区土坑 S K 57 石鏃出土状況(西から)
- 図版第46 出土遺物 1 (M 2 区出土)
- 図版第47 (1) 出土遺物 2 (M 1 区出土)
 (2) 出土遺物 3 (L 2 区出土)
- 図版第48 (1) 出土遺物 4 (M 2 区出土)
 (2) 出土遺物 5 (M 2 区土坑 S K 51 出土)
- 図版第49 (1) 出土遺物 6 (M 2 区土坑 S K 68 出土)
 (2) 出土遺物 7 (M 2 区土坑 S K 68 出土)
- 図版第50 (1) 出土遺物 8 (M 2 区土坑 S K 69 出土)
 (2) 出土遺物 9 (M 2 区土坑 S K 69 出土)
- 図版第51 (1) 出土遺物 10 (O 地区出土)
 (2) 出土遺物 11 (O 地区出土)
- 図版第52 (1) 出土遺物 12 (L 2・M 2 区出土)
 (2) 出土遺物 13 (O 区出土)

1. 長岡宮跡第514次(7ANBNI-11地区)・ 殿長遺跡発掘調査報告

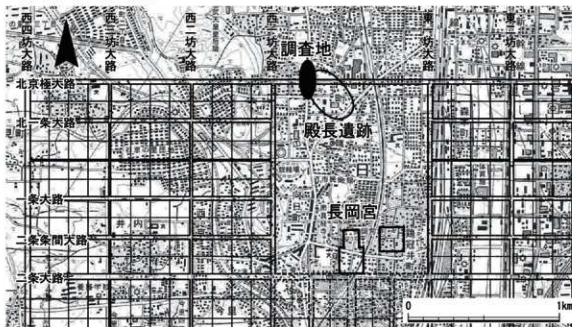
1. はじめに

今回の調査は西京高槻線防災・安全交付金(交安)業務に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。調査は、府道の両側の狭小な地点に5か所のトレンチを設定し行った。調査地付近は、民家や店舗が立ち並んでおり、それらの出入り口などに配慮しながらトレンチを設定した。なお、調査開始当初5か所の調査トレンチの内、長岡京北辺推定地にあたる2トレンチ部分は建物の撤去が行われていなかった。そのため、1・3・4・5トレンチの調査が終了した段階で、調査を一旦中断し、建物の撤去を待って再開した。

なお、調査に係る経費は、全額京都府乙調土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者	調査課長	森 正
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同	副主査 引原茂治
調査場所	京都府向日市寺戸町北垣内	
調査期間	平成28年6月28日～7月14日、12月19日～21日	
調査面積	30㎡	



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を元に作図)

2. 調査概要

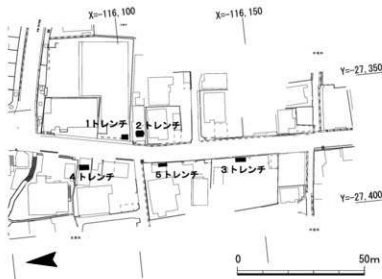
調査対象地は、現地表の標高が22～23mで、南から北に向かって下降する地形である。調査は、周辺の諸事情に配慮しながら、トレンチを設定して実施した(第2・3図)。

1 トレンチ 地表から0.6mまでは近現代の整地層(1～4層)であり、その下に耕作地に伴う床土とみられるシルト層(5・6層)が堆積する。さらに下層は河川堆積とみられる砂層や礫層(7～10層)であり、遺構は残存していなかった。遺物も、須恵器片のみである。

2 トレンチ 長岡京の北辺に想定されている部分に設定したトレンチである。地表から約1m下までは、建物に伴うコンクリート基礎や整地層(1～3層)である。その下に沼状堆積とみられるシルト層(4・5層)が堆積する。5層からは明治時代の型紙印刷染付皿などの近代遺物が出土した。地元の方から、市街地化するまでは水田であったのご教示もあり、あるいは、それまでの耕作土の可能性もある。10～12層は、それに伴う畦畔とも考えられる。その下層は河川堆積とみられるシルトと砂礫の互層であり、遺物は出土しなかった。また顕著な遺構もなかった。

3 トレンチ 地表から約1m下までは、アスファルトや近世以降の整地土である。その下層は中世の遺物を含む砂礫混じりのシルト層(8・9層)がある。このシルト層を基盤とする遺構はなかった。その下層が地山となる。遺構はこの地山面で検出した。南北方向の溝状遺構 S D 301は、トレンチ中央から北に向かって延びる。検出長は1.8m、深さ0.2mを測る。幅は西肩のみの検出であり不明である。13世紀頃の瓦器碗などが出土した。土坑 S K 302は、円形状を呈する土坑で規模は不明であるが、深さは0.4mを測る。遺物は出土していない。不明遺構 S X 303は不定形な土坑状の遺構で、深さは0.1mを測る。S D 301や S K 302に掘り込まれており、それより古いものと考えられる。12世紀頃の瓦器碗が出土した。

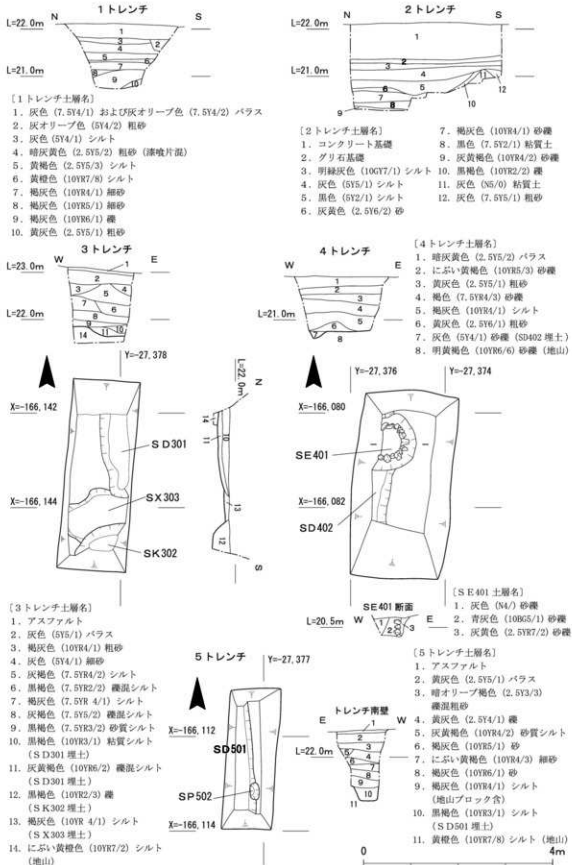
4 トレンチ 地表下1.1m前後までは近世から現代にいたる整地土である。その下層が地山となり遺構の検出面である。井戸 S E 401は内法径0.5mを測る円形の石組井戸である。掘形は直径1.2mを測る。検出した深さは0.4mである。さらに深いものとみられるが、道路予定地外を崩落



第2図 調査トレンチ配置図(1/1500)

させる危険があるため、掘削をとどめた。16世紀頃の信楽焼播鉢片が出土した。中世後期の井戸とみられる。溝状遺構 S D 402は S E 401に掘り込まれており、それ以前の遺構とみられる。南北方向に延びる溝で、検出長は2.4mである。東側部分のみの検出であり、幅は不明である。深さ0.15mを測る。遺物は出土しなかった。

5 トレンチ 地表下0.8m前



第3図 1～5トレンチ平面図・土層断面図(1/80)

後までは、近世から現代に至るアスファルトや整地土(1～6層)とみられる。その下層は、緩やかに傾斜する水平堆積層が約0.5mにわたって堆積する。遺物が出土しなかったので時期は不明である。その下が地山で、遺構検出面となる。溝状遺構S D501は南北方向に延びており、検出長は2.4mである。東側部分のみの検出であり、幅は不明である。深さ0.3mを測る。出土遺物がなく時期は不明である。ピットS P502は過半をS D501によって削平されており、それより古い遺構とみられる。遺物は出土しなかった。

3. 出土遺物

今回の調査では、主に中世の遺物が出土した(第4図・図版第4)。調査地は狭小であり出土遺物は、量的には少ないが、3トレンチからの出土が比較的多い。2トレンチの出土遺物は、型紙印刷染付皿などの近代遺物のみであり報告は略す。なお、遺物の法量などの詳細は、出土遺物観察表を参照していただきたい。出土した遺物は整理箱3箱である。

1トレンチ 1は須恵器甕で、内面に同心円タタキ、外面に格子タタキがみられる。古代以前のものともみられる。

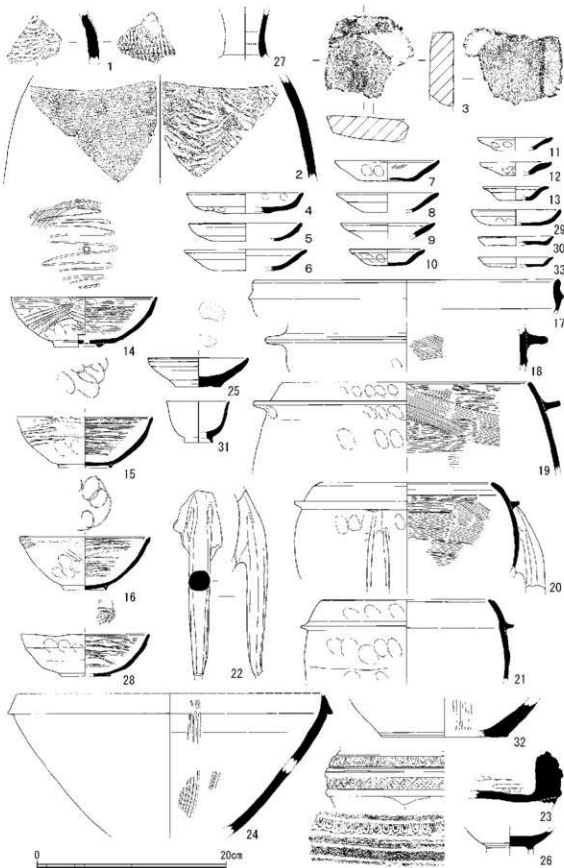
3トレンチ 2は須恵器甕で、中世のものか。3は平瓦で、下面に縄タタキがみられる。古代の瓦と考えられる。溝S D301の埋土から出土した。4～13は土師器皿である。底部から口縁部が緩やかに屈曲して立ち上がるもの(4・5)、口縁部が屈曲して外反気味に立ち上がるもの(6～8)、その小形のもの(9～12)、底部が突出するヘソ皿(13)がある。4・5は13世紀頃、6～12は15世紀頃、13は14世紀頃のものともみられる。13はS D301からの出土である。14～16は瓦器碗である。14は内面に密なミガキ、外面にも底部付近までミガキを施す。12世紀頃の椀葉型とみられ、S X303出土である。15・16は内外面ともにミガキがみられるが、やや粗い。13世紀頃の大和型とみられる。S D301から出土した。17は土師器焙烙で、近世のものともみられる。18は土師器羽釜で、13世紀頃のものか。19～22は瓦質土器羽釜で、大振りのもの(19)、小振りのもの(21)、三脚付のもの(20・22)がある。13世紀頃のものである。19・21はS D301から出土した。23は瓦質土器風炉である。15世紀頃のものか。24は備前焼播鉢、25は17世紀初頭頃の肥前陶器(唐津)皿、26は18世紀の肥前磁器(伊万里)染付碗である。

4トレンチ 27は小形の須恵器壺の頸部である。S E401掘形から出土した。28は瓦器碗で、内面に粗なミガキを施すが、外面にはミガキがない。13世紀頃の大和型で、S D301出土の瓦器碗に後出するものとみられる。29・30は土師器皿で、13世紀から14世紀にかけてのものともみられる。30はS E401から出土した。31は白磁碗で、肥前磁器か。32は信楽焼播鉢で、16世紀のものともみられる。S E401から出土しており、その遺構の時期を示す遺物とみられる。

5トレンチ 33は土師器皿で、14世紀頃のものか。

4. まとめ

今回の調査では、当初に想定されていた長岡京北辺や長岡宮関係の遺構は検出しなかった。北



第4図 出土遺物実測図(1/4)

辺想定地の2トレンチおよび近接する1トレンチでは近代まで存在したと考えられる河川の堆積を検出したのみであった。1・2トレンチの南北に位置する3・4トレンチでは中世の遺構を検出している。これにより、3・4トレンチの間に河川があったとも考えられる。この河川は北京極大路の側溝が後世に河川化したとも考えられるが、出土遺物もなく想定の間を出ない。

今回の調査では、3・4・5トレンチで溝状遺構を検出している。それぞれの遺構が一体のものか否かは断片的な調査のため、確定できない。時期も、3トレンチでSD301から13世紀頃の遺物が出土しているのみで、他のトレンチの溝状遺構からは遺物が出土していない。ただ、現在の府道に沿って設定したトレンチ内で、ほぼトレンチに沿って検出している。このことから、仮に一体のものとする、13世紀頃の物集女街道の西側溝とも考えられる。また4トレンチでは、溝状遺構が16世紀頃の井戸に掘り込まれており、中世後期には、物集女街道が縮小もしくは東側に移されて、宅地となったことを示すものとも言える。この状況は、調査前の付近の状況に近いものとみられる。今回の調査で、中世の景観の一端を示す遺構を検出した可能性がある。

(引原茂治)

付表 出土遺物観察表

報告 番号	器種	器形	ト レン チ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (高台 径) (cm)	胎 土	焼成	色調	整形調整	備考
1	須恵器	壺	1	包含層	-	-	-	密	良好	灰白 N7/0	内面：同心円タタキ、外面：格子タタキ	器厚) 1.1
2	須恵器	壺	3	包含層	-	-	-	密	良好	赭灰 10YR6/1	内面：同心円タタキ、外面：カキメ	器厚) 1.0
3	瓦	平瓦	3	SD 301	-	-	-	密	良好	灰 5Y4/1	凹面：布目、凸面：縄タタキ	器厚) 2.5
4	土師器	皿	3	SD 301	12.4	2.2	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	内面：ナデ、外面：指オサエ	
5	土師器	皿	3	包含層	12.0	1.9	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：ナデ、外面：指オサエ	
6	土師器	皿	3	包含層	13.0	2.2	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/2	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
7	土師器	皿	3	包含層	11.0	2.2	-	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
8	土師器	皿	3	包含層	10.8	2.1	-	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
9	土師器	皿	3	包含層	10.0	1.6	-	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
10	土師器	皿	3	包含層	8.0	1.7	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
11	土師器	皿	3	包含層	8.0	1.4	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
12	土師器	皿	3	包含層	7.6	1.4	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
13	土師器	皿	3	包含層	7.0	1.5	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR4/8	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	ヘソ皿
14	瓦器	椀	3	S X 303	15.5	5.3	4.8	密	良好	暗灰 N3/0	内外面：ミガキ	
15	瓦器	椀	3	S D 301	14.2	5.4	5.5	密	良好	灰白 2.5Y7/1	内外面：ミガキ	
16	瓦器	椀	3	包含層	13.8	5.7	4.5	密	良好	灰 N4/0	内外面：ミガキ	
17	土師器	壺	3	包含層	32.0	(3.4)	-	密	良好	にぶい橙 7.5YR3/1	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
18	土師器	羽釜	3	包含層	-	(2.5)	-	密	良好	橙 7.5YR8/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
19	瓦質土器	羽釜	3	SD 301	26.0	(9.5)	-	密	良好	黒 N2/0	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
20	瓦質土器	羽釜	3	包含層	18.0	(11.3)	-	密	良好	黒 N2/0	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	三脚付
21	瓦質土器	羽釜	3	SD 301	17.2	(8.5)	-	密	良好	灰 N4/0	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
22	瓦質土器	羽釜	3	SD 301	-	-	-	密	良好	黒 N2/0	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	脚、脚柱) 2.2
23	瓦質土器	風炉	3	包含層	-	(5.6)	24.5	密	良好	灰白 2.5Y7/1	蓮弁文、花菱文	
24	陶器(備前)	播鉢	3	包含層	32.4	(14.9)	-	密	堅緻	にぶい赤褐 2.5YR4/3	ロクロ整形	
25	陶器(肥前)	皿	3	包含層	10.4	3.1	4.8	密	堅緻	灰黄 2.5Y6/2	ロクロ整形	唐津・砂目
26	染付細器 (肥前)	椀	3	包含層	-	(2.1)	-	密	堅緻	灰白 5GY8/1	ロクロ整形	伊万里・くらわんか
27	須恵器	壺	4	SE 401	-	(4.7)	-	密	良好	暗灰 N3/0	外面：回転ナデ	
28	瓦器	椀	4	包含層	13.5	4.5	5.0	密	良好	暗灰 N3/0	内面：ミガキ	
29	土師器	皿	4	包含層	9.4	1.7	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
30	土師器	皿	4	SE 401	8.0	1.0	-	密	良好	にぶい橙 5YR7/4	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	
31	白磁	椀	4	包含層	6.4	4.4	3.2	密	堅緻	灰白 2.5Y7/1	ロクロ整形	肥前か
32	陶器(備前)	播鉢	4	SE 401	-	(3.7)	13.0	密	堅緻	灰褐 7.5Y5/2	ロクロ整形	
33	土師器	皿	5	包含層	8.0	1.1	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面：ナデ、外面：ユビオサエ	

※ () 数字：残存高、-：該当部位なし

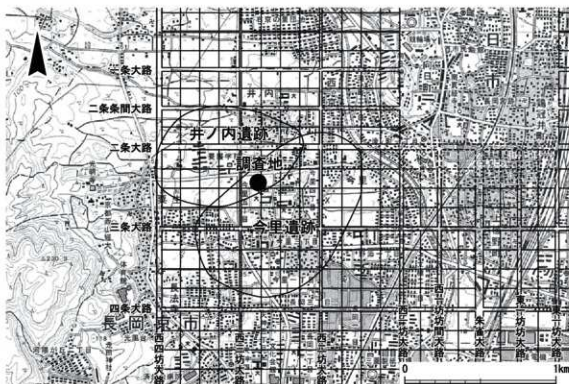
2. 長岡京跡右京第1138次(7ANIHJ-10地区)・井ノ内遺跡・今里遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、長法寺向日線防災・安全交付金業務委託に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

調査地は、西山丘陵裾から東に延びる標高378～384mの低位段丘上に立地する。縄文時代～中世までの広範囲に広がる複合遺跡である井ノ内遺跡の南端と、今里遺跡の北端にあたり、両遺跡が重なるところに位置する。長岡京の条坊復原によると右京三条三坊十・十五町にあたる。

周辺での調査状況は、西側の南北道路である府道大山崎向日線と東西道路の長法寺向日線の交差点付近で平成20年度に右京第952次調査が^(原1)実施されている。第952次調査では、弥生時代後期の溝、古墳時代中期後葉～後期末の竪穴建物4基、竪穴建物と相前後した掘立柱建物2棟、奈良時代に3～4回の建て替えがみられる掘立柱建物が検出されている。また、長岡京期の条坊に伴う溝2条、欄列、宅地区画と考えられる溝が2条、そのほか多くの溝・柱穴が検出されている。今回の調査地は、右京第952次調査地の東側に隣接した位置にあたることから、多くの遺構の検出が期待された。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を元に作図)

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会をはじめ関係各機関、地元自治会や近隣住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。
 なお、調査に係る経費は、全額京都府乙調土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査課長 森 正

現地調査担当者 調査課課長補佐兼調査第3係長 岩松 保
 同 総括主査 増田孝彦

調査場所 京都府長岡京市今里5丁目21～25

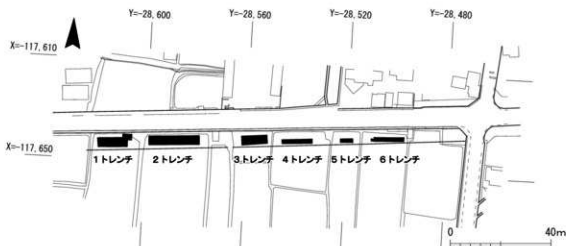
調査期間 平成28年8月23日～平成28年10月14日

調査面積 196㎡

2. 調査概要

調査対象地は一般府道長法寺向日線に沿った南側で、南北が約6m、東西130mである。西端は右京第952次調査地に隣接し、東端は低位段丘が南側に屈曲する付近にあたる。府道長法寺向日線の南側には道路に沿って農業用水路が設けられており、道路拡幅用地幅約6m挟んだ南側には、この水路より取水する水田が5筆、畑地が2筆あり、それらの田畑の出入りをするための進入路が4か所通じており、それらの通路を避ける形でトレンチを設定した。西から順に1～6トレンチとした。4～6トレンチは地形的に段丘の谷部分に相当すると判断されたため、遺構の存在は希薄であると想定し、幅の狭いトレンチとした。また、農業用水路からの漏水による滞水を避けるため、対象地内の南寄りにトレンチを設けた。なお、右京第952次調査地の2トレンチと1トレンチの間にはこの農業用水路が南北に通じているため、約5mの空白部分がある。

各トレンチの基本層序は、耕作土・床土直下が地山である明黄褐色粘質土および明褐色礫混じり粘質土となり、西から東に向けて前者の土層から後者の土層へと地山が変化しているのが認



第2図 調査トレンチ配置図(1/1500)

められた。1トレンチでのみ床土と判断される灰褐色土(灰白色土混じり)の堆積が認められた。

今回調査の1トレンチとその西に隣接する右京第952次調査の2トレンチでの遺構検出面の標高を比較すると、1トレンチでは0.5m程度低くなっていた。先述のように耕作土直下が地山であることから、水田の区画整備のため、遺構面がかなり削平されたものと想定される。実際、2トレンチより東側では遺構の残存状況は悪い。

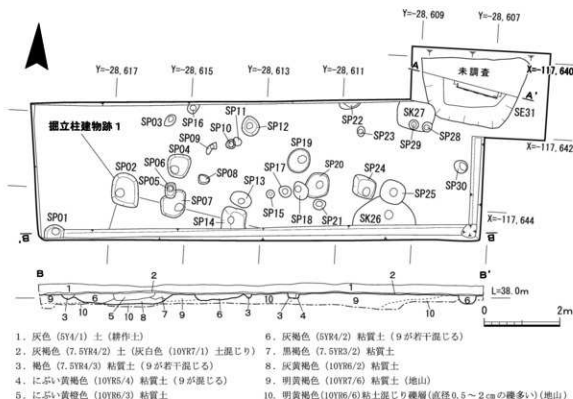
以下、調査トレンチごとに報告する。

1トレンチ(第3図・図版第1・2) 東西12m、南北3.5mのトレンチを設定した。トレンチ全体で28か所の柱穴、土坑2か所、井戸1か所を検出した。井戸はトレンチ北壁東端で東西1.4m、南北0.75mの土色の違いを認めたので、その規模を確認するため北側に約6mの拡張し、調査を実施した。

柱穴は円形・方形、大小の柱穴が認められ、柱穴内からは小片・細片化した遺物が少量出土した。建物として復原できたのは南西付近で検出した掘立柱建物1棟だけである。

掘立柱建物1(第4図) 掘立柱建物の北西隅部分と判断されるもので、東西が2間以上で、3mにわたって検出した。柱穴の配置からSP02を北西隅として南に延びるものと推定される。柱掘形は方形を呈し一辺0.6m～0.9m、深さ0.25m～0.35mを測る。柱筋の主軸はN-11°-Eである。柱間寸法は、西から1.6m、1.4mである。土師器の細片が出土した。SP07は、小柱穴のSP05・06と重複しており、SP07が先行する。

土坑SK26 東端のトレンチ南壁付近で検出した。柱穴SP25に切られる。直径1.65m、円形

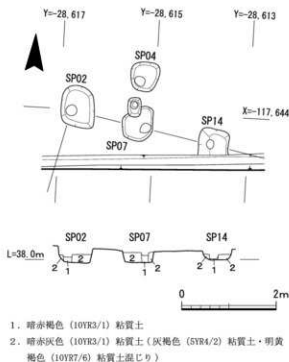


第3図 1トレンチ検出遺構配置図(1/100)

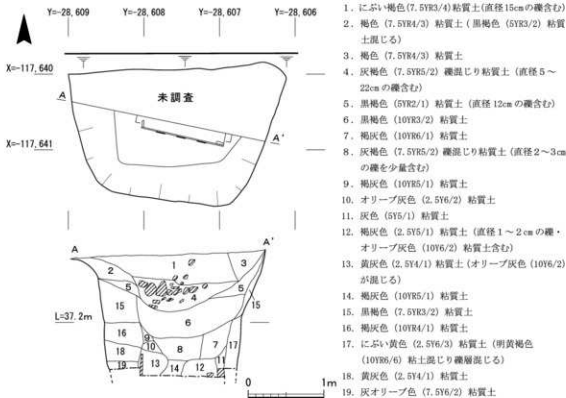
の平面形を呈し深さ0.3mを測る。土師器小片が出土した。トレンチの南壁で土層断面を観察すると、埋土は5～8層の黒褐色粘質土と灰褐色粘質土などである。

土坑SK27 トレンチ東端の北壁付近で検出した。東西1.0m、南北0.7mの長方形の平面形を呈し、深さ8cmを測る。土師器小片が出土した。井戸SE31、SP28・29と重複関係を有しており、SE31に後出し、SP28・29に先行する。

井戸SE31 (第5図・図版第2) トレンチ東端の北壁で検出した。規模等の確認のため北側に拡張を行い、井戸全体の南側1/2程度を平面的に確認した。北側は農業用水路の擁壁がありこれ以上拡張できなかったため、全体の規模は不明である。井戸南半の掘形はややいびつな方形を呈し、南辺で1.8m、東辺で2mを確認した。検出面から1.3m下で幅1.1mの方形縦板横棧留と判断される井戸枠を検出



第4図 掘立柱建物1実測図(1/80)



第5図 井戸SE31実測図(1/50)

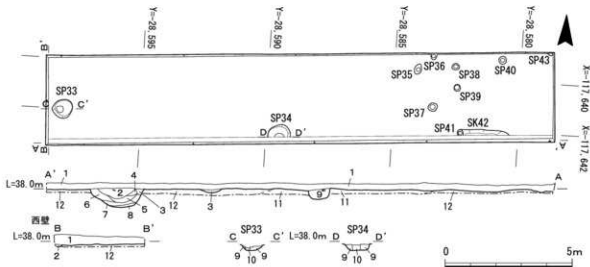
した。井戸枠は掘形の中央に設置されておらず、東に寄っていた。農業用水路からの漏水と掘削深が1.7mに達したことから、安全のため調査を断念した。井戸内の堆積は、粘質土と礫混じり粘質土の互層で、第4層には比較的大形の礫が多数混じっていた。15～19層は井戸枠構築時の裏込め土と判断され、その間に1～14層の井戸廃棄に伴い埋め戻したと判断される土層が堆積していた。井戸枠裏込め土や井戸廃棄に伴い埋め戻した土層中より須恵器、土師器、瓦の破片が出土した。長岡京期のものと判断する。

2 トレンチ(第6図、図版第3) 東西20.0m、南北3.5mのトレンチを設定した。トレンチ中央南壁際と西端において、大形の円形の柱穴各1か所(S P33・34)、トレンチの東寄りで8か所の小柱穴と南壁際で土坑1か所(S K42)を検出した。東寄りで検出した小柱穴は建物に復原できなかったが、柱穴の分布は比較的集中しており、西側には認められないことから、掘立柱建物の西辺を検出した可能性がある。これらの柱穴内からは土師器小片が出土したほか、S P43からは第8図25の須恵器杯が出土した。これらは長岡京期～平安時代初頭のものである。

S P33 直径0.8m、深さ0.22mを測る。第8図26～29・32の土師器椀・皿、黒色土器皿が出土した。平安時代前期のものである。

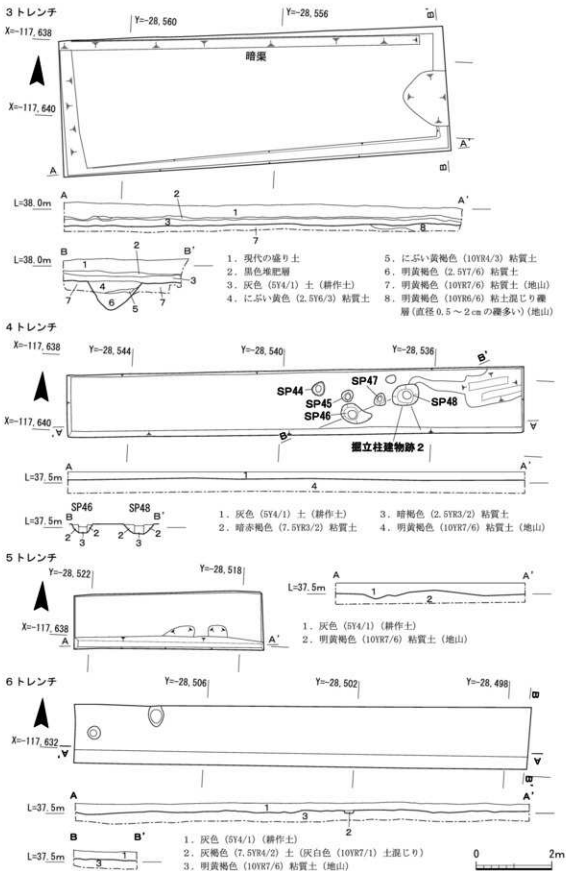
S P34 直径0.9m、深さは南壁断面で0.4mを測る。S P33と34はその規模から、1 トレンチで検出した大形の柱穴と関連するものと判断される。

土坑 S K42 方形ないし長方形の平面形が考えられる。北辺で一辺2.1m、深さ0.66mを測る。埋土は第6図の2～8層が相当する。須恵器杯(第8図23・24)のほか、土師器甕、瓦質土器三足羽釜、瓦器椀、土師器等の細片・小片が出土した。須恵器(第8図23・24)、土師器(第8図30・



1. 灰色(5Y4/1) (耕作土)
2. 灰褐色(5YR4/2) 粘質土(12が若干混じる)
3. 褐色(7.5YR4/3) 粘質土(12が若干混じる)
4. 褐色(7.5YR4/3) 礫混じりの粘質土(直径0.5～6cm)
5. 暗褐色(7.5YR3/3) 礫混じり粘質土(直径0.5～4cm)
6. にぶい黄褐色(10YR4/3) 礫混じり粘質土(直径0.5～6cm多い)
7. 暗褐色(2.5YR3/2) 礫(若干5が混じる・直径0.5～5cm礫多い)
8. 黒褐色(10YR3/2) 礫(ほとんど礫で直径1～5cm)
9. にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘質土
10. 灰褐色(7.5YR5/2) 粘質土(明黄褐色(10YR7/6)粘質土混じる)
11. 明黄褐色(10YR7/6) 粘質土(地山)
12. 明黄褐色(10YR6/6) 粘土混じり礫層(直径0.5～2cmの礫多い)(地山)

第6図 2 トレンチ検出遺構配置図(1/150)



第7図 3～6トレンチ検出遺構配置図(1/100)

31)は第2・4・5層中より出土しており、混入品と考えられることから中世の遺構と判断する。

3 トレンチ(第7図・図版第3) 東西10.0m、南北3.5mのトレンチを設定した。トレンチ北壁に沿って現代の暗渠排水と、東壁際で現代の攪乱を1か所確認しただけで、遺構は確認できなかった。また、遺物の出土はなかった。

4 トレンチ(第7図・図版第4) 東西12m、南北1.5mのトレンチを設定した。トレンチ中央より東側で現代の攪乱1か所、その西側で柱穴6か所を検出した。建物として復元できるのはSP46・48であり掘立柱建物2とした。

掘立柱建物2 SP46・48で構成される掘立柱建物で、東西1間(1.5m)を確認した。SP46・48は他のピットと比べ大きく、規模も揃っていることから、掘立柱建物と判断した。柱の掘形は円形～楕円形を呈し、SP46は長径0.82m、短径0.52m、深さ0.22m、SP48は長径0.8m、短径0.55m、深さ0.28mを測る。これらの柱穴から復元した掘立柱建物の主軸はN-25°-Wとなり、隣接地の右京第952次調査地で検出された古墳時代後期と考えられているSB03とほぼ同じ主軸となる。SP46・48からは古墳時代の須恵器杯身片が出土した(第8図33～35)。

5 トレンチ(第7図・図版第5) 東西5m、南北1.4mのトレンチを設定した。トレンチ南壁付近で攪乱2か所を確認しただけで遺構は検出できなかった。また、遺物の出土もなかった。

6 トレンチ(第7図・図版第5) 東西12m、南北1.5mのトレンチを設定した。トレンチ西寄りで柱穴2か所を検出しただけで、建物は復元できない。柱穴は径0.34m、深さ0.11mである。柱穴内からは土師器の細片が出土した。時期は特定できなかった。南壁土層断面では、中央よりやや西寄りに溝状遺構が認められるが、現代の耕作に伴う浅い溝である。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、須恵器、土師器、瓦、瓦質土器、製塩土器など、整理箱で2箱分が出土した。大半が小片で図化できないものがほとんどである。

1 トレンチ(第8図、図版6) 1～22はSE31の井戸内埋土から出土した。1～4は須恵器杯蓋である。1の貼り付けツマミは宝珠形である。天井部外面に重ね焼きの痕跡が認められる。口径15.0cm、器高2.4cmである。2～4は口縁端部が下方へ屈曲する破片で口径が15.8～16.0cm、残存高1.5～1.7cmを測る。

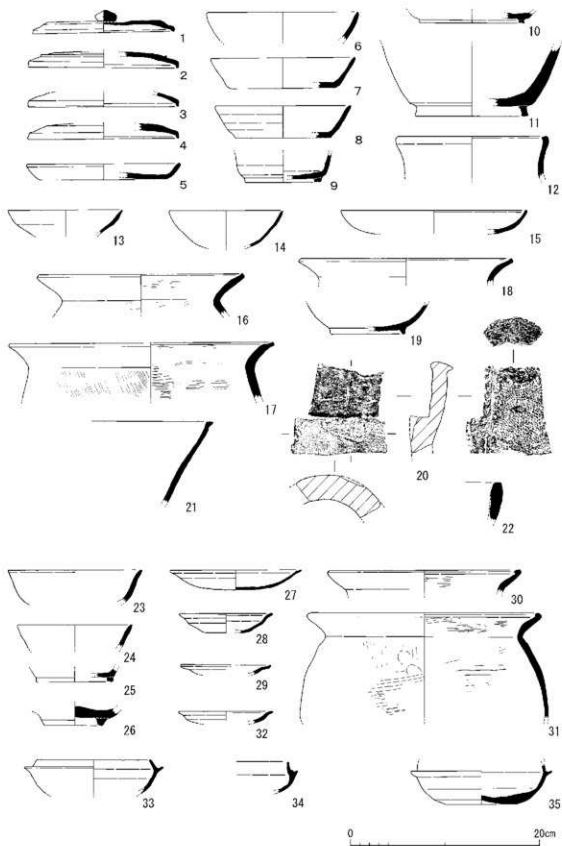
5は須恵器皿で、平らな底面に短く外反する口縁部を付けたものである。内面は回転ナデ、外底面はナデ、色調は灰白色である。口径16.2cm、器高1.7cmである。

6～8は須恵器杯Aで平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。7は口径15.2cm、器高3.2cmである。8は口径14.2cm、器高3.4cmである。

9・10は須恵器杯Bである。底部に高台を貼り付けた杯で、長岡京期～平安時代初期のものである。

11は須恵器壺底部片である。

12は須恵器甕である。口径15.8cmを測る。



第8図 出土遺物実測図(1/4)

13・14は土師器椀Aである。口径12.0cmを測る。外面はナデ調整である。

15は土師器皿Aである。底部が平底で口縁端部を丸くおさめる。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整をしている。口径は19.6cmを測る。

16～18は土師器甕Aで、口縁部が緩やかに「く」の字状に屈曲するもので、粗いハケメ調整が残る。16は口径21.4cm、17は口径27.8cmを測る。16・17の体部内外面はハケメを施す。

19は土師器杯Bで貼り付け高台を有するものである。

20は丸瓦片である。凸面はタタキ後にナデ消しがなされており、凹面は布目が残る。

21は瓦質土器鉢である。井戸検出面付近で出土した。

22は製塩土器である。上半のみ遺存している。外面と口縁部内面はナデ、内面下半は剝離している。

2トレンチ(第8図、図版第6) 23・24は須恵器杯の口縁部片である。23は口径14.0cm、24は口径12.0cmを測る。SK42から出土した。

25は須恵器杯Bである。底部に高台を張り付けたもので、焼成は硬質である。長岡京期～平安時代初期のものである。SP43から出土した。

26は土師器椀の底部片で貼り付け高台を有するものである。SP33から出土した。

27～29は土師器皿である。口縁部が外反して湾曲するもので、口縁外面・内面をナデ調整している。27は口径14.0cm、器高2.1cm、28は口径9.8cm、器高2.1cm、29は口径9.4cmを測る。10世紀代のものと考えられる。SP33から出土した。

30・31は土師器甕である。口縁部をヨコナデし、31の体部外面はハケメを施す。口縁部が「く」の字状に屈曲するもので粗いハケメ調整が残る。30は口径20.0cm、31は口径24.0cmを測る。31の体部内外面はハケメを施す。SK42から出土した。

32は黒色土器皿である。27～29と同様、口縁部が外反して湾曲するもので、内外面ともナデ調整している。土師器皿と同時期と考えられる。口径10.0cmを測る。SP33から出土した。

4トレンチ(第8図、図版6) 33～35は須恵器杯身である。33はSP46、34・35はSP48から出土した。色調は灰色で体部外面はヘラケズリを施す。33は口径12.0cmを測る。古墳時代後期のものと考えられる。35は口縁部が欠損しており口径は不明であるが、残存高4.3cmを測る。

4. まとめ

本調査では、隣接地である右京第952次調査で検出されていた弥生時代後期の遺構・遺物は検出できなかった。

古墳時代においては、右京第952次調査では、古墳時代中期後葉～後期末の堅穴建物が4基検出されており、この堅穴建物と相前後した3棟の掘立柱建物はいずれも主軸が北で西に15°～28°振れている。今回の1・4トレンチで検出した掘立柱建物1・2とも柱間寸法が短く、同様の柱間寸法を持つ建物は右京第952次調査では掘立柱建物SB04・05が検出されている。数基の柱穴で建物を復原したため、建物全体が不明であるが、北で西に振れることや古墳時代後期の遺物が

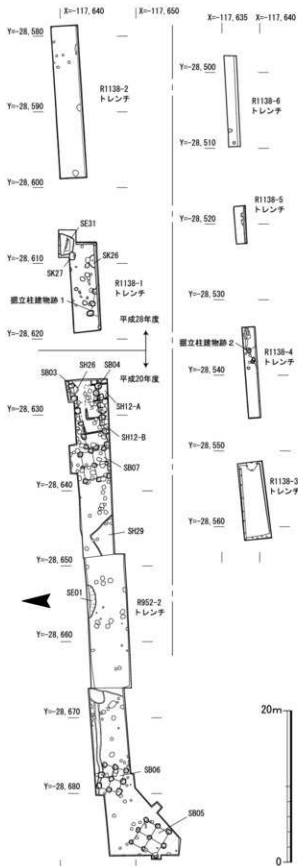
出土していることから同時期の建物と考えられ、集落域がさらに東側にまで広がることが明らかとなった。井ノ内地区に展開している井ノ内車塚古墳・稲荷塚古墳・井ノ内古墳群が築造された頃の集落の様子をうかがうことができる重要な資料となる。

長岡京期の条坊に関する遺構は検出できなかった。しかし、今回調査の井戸S E31のように深い遺構が検出されていることや、同時期の遺構・遺物が検出されていることから、西側の右京第952次調査や北西側の低位段丘上^(注2)では、水田の区画整備のため削平されたものと考えられる。

2トレンチで検出した柱穴からは、10世紀代と考えられる土師器皿が出土しており、当該時期の遺構が周辺に広がっているものと推測される。今回調査の1トレンチや、右京第952次調査で検出した時期不明とされる大型の柱穴や建物についてはこの時期のものである可能性がうかがわれる。

今回の調査では、古墳時代後期ならびに長岡京期および平安時代の土地利用の一端が明らかとなった。

(増田孝彦)



第9図 長岡京跡右京第952次調査と
右京第1138次調査配置図

- 注1 竹井治雄「長岡京跡右京第952次(7ANGYT-7地区)・井ノ内遺跡発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第137冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2010
- 注2 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第27次発掘調査概要」(「埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)」京都府教育委員会)1980
- 柴曉彦「長岡京跡右京第704次(7ANGSK-1地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第102冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2002
- 増田孝彦「長岡京跡右京第753次(7ANGHD-5地区)・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第107冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2003
- 増田孝彦「長岡京跡右京第795次(7ANGKS-6地区)・井ノ内遺跡発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第113冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005

付表 出土遺物観察表

報告番号	器種	器形	トレンチ	出土地点	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整・備考
1	須恵器	蓋	1	S E 31	15.0	2.4	-	4/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
2	須恵器	蓋	1	S E 31	(16.0)	(1.7)	-	1/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
3	須恵器	蓋	1	S E 31	(15.8)	(1.5)	-	口) 1/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
4	須恵器	蓋	1	S E 31	(15.8)	(1.6)	-	1/12	外) 灰 5Y6/1 内) 灰白 N7/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
5	須恵器	皿	1	S E 31	(16.2)	1.7	(13.2)	口) 1/12 底) 2/12	灰白 N7/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ 底部外面：ナデ
6	須恵器	杯	1	S E 31	(15.8)	(3.0)	-	1/12	外) 灰 N4/0 内) 灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
7	須恵器	杯	1	S E 31	(15.2)	3.2	(10.8)	2/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
8	須恵器	杯	1	S E 31	(14.2)	3.4	(10.0)	底) 1/12	灰白 N7/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
9	須恵器	杯	1	S E 31	(8.0)	(3.0)	-	3/12	黄灰 25Y4/1	密	堅緻	内外面：回転ナデ・高台貼付け
10	須恵器	杯	1	S E 31	-	(1.1)	(11.0)	2/12	灰 N5/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ・高台貼付け
11	須恵器	壺	1	S E 31	-	(7.5)	(12.0)	3/12	外) 蜀灰 10YR6/1 内) 灰白 10YR7/1	密	堅緻	内面：回転ナデ、ケズリ 外面：回転ナデ・高台貼付け
12	須恵器	壺	1	S E 31	(15.8)	(4.0)	-	2/12	外) 灰 7.5Y5/1 内) 灰 N5/0 断面) 明赤褐 5YR5/6	密	堅緻	内外面：回転ナデ
13	土師器	碗	1	S E 31	(12.0)	(2.6)	-	口) 2/12	浅黄緑 10YR8/4	密	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ 内外面：ナデ
14	土師器	碗	1	S E 31	(12.0)	(3.9)	-	3/12	浅黄緑 7.5YR8/4	密	やや軟	内外面：摩滅により調整不明
15	土師器	皿	1	S E 31	(19.6)	(2.5)	-	口) 1/12	橙 5YR6/8	密	やや軟	内面：ナデ 外面：ケズリ後ナデ
16	土師器	壺	1	S E 31	(21.4)	(4.4)	-	口) 1/12	淡橙 5YR8/4	密	やや軟	口縁部内面：ヨコハケ 頸部内外面：ハケ
17	土師器	壺	1	S E 31	(27.8)	(6.0)	-	口) 1/12	浅黄緑 7.5YR8/4	密	やや軟	内面：ヨコハケ 外面：ナデ、ハケ
18	土師器	壺	1	S E 31	(22.2)	(2.6)	-	口) 2/12	橙 7.5YR7/6	密	やや粗	内面：摩滅により調整不明 外面：ナデ
19	土師器	杯	1	S E 31	-	(3.6)	7.6	底) 4/12	橙 7.5YR6/6	密	良	内外面：ナデ・高台貼付け
20	丸瓦	-	1	S E 31	長さ (96)	幅 (12.0)	厚さ 2.2	1/12	灰 10Y6/1	密	堅緻	凸面：ナデ 凹面：布目瓦痕
21	瓦質土師器	鉢	1	S E 31 検出面 付近	(26.0)	(8.6)	-	1/12	灰白 N8/0	密	良	口縁部内外面：ヨコナデ 内外面：摩滅により調整不明
22	製塩土器	-	1	S E 31	/	(4.0)	-	/	外) 橙 7.5YR6/6 内) におい橙 7.5YR7/4	やや粗	良	内外面：ナデ

報告番号	器種	器形	トレンチ	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	焼成	調整・備考
23	須恵器	杯	2	S K 42	(140)	(3.5)	-	1/12	灰 N6/0	密	堅緻	内外面：ヨコナデ
24	須恵器	杯	2	S K 42	(120)	(2.5)	-	2/12	灰白 25Y8/1	密	良	内外面：摩滅により調整不明
25	須恵器	杯	2	S P 43	(80)	(1.2)	-	2/12	灰白 25Y7/1	密	良	内外面：回転ナデ 高台貼付け：ナデ
26	土師器	碗	2	S P 33	-	(2.0)	6.4	高台) 10/12	灰白 25Y8/1	密	やや軟	内外面：摩滅により調整不明・高台貼付け
27	土師器	皿	2	S P 33	(140)	2.1	-	口) 1/12 底) 12/12	灰白 10YR8/2	密	やや軟	口縁内外面：ヨコナデ 内外面：ナデ
28	土師器	皿	2	S P 33	(98)	2.1	-	口) 1/12	浅黄橙 10YR8/3	密	やや軟	口縁内外面：ヨコナデ 内面：ナデ 外面：ユビオサエ、ナデ
29	土師器	皿	2	S P 33	(94)	(1.0)	-	口) 2/12	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良	内外面：ヨコナデ
30	土師器	羹	2	S K 42	(200)	(2.5)	-	口) 1/12	浅黄 25Y7/4	密	良	内面：ハケ 外面：ヨコナデ
31	土師器	羹	2	S K 42	(240)	(11.2)	-	口) 2/12	にぶい黄橙 10YR7/4	密	良	口縁部内外面：ヨコナデ 内面：ハケ 外面：タテハケ、ヨコハケ
32	黒色土器	皿	2	S P 33	(100)	(1.3)	-	口) 1/12 全) 2/12	黄灰 25Y5/1	密	良	口縁部内外面：ヨコナデ 内外面：ナデ
33	須恵器	杯身	4	S P 46	(120)	(3.7)	-	1/12	外) 灰 5Y6/1 内) 灰 N5/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
34	須恵器	杯身	4	S P 48	(118)	(3.2)	-	1/12	外面(体部) 灰 N5/0 外面(口縁部～内面) 灰白 N7/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ
35	須恵器	杯身	4	S P 48	-	(4.3)	7.4	底) 8/12	灰 N5/0	密	堅緻	内外面：回転ナデ 底部外面：回転ハケズリ

(凡例)

- ・口径欄の記号 ()：復元径
- ・器高欄の記号 ()：残存高
- ・小数点第2位を四捨五入、第1位で表示
- ・-：該当部位なし /：測定不能

3. 一般国道24号城陽 I C 関連寺田地区改良事業 関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告

1. はじめに

この発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴って建設されている城陽 J C T ・ I C (仮称) から一般国道24号までの接続道路を整備するために国土交通省が進めている一般国道24号城陽 I C 関連寺田地区改良事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施したものである。

調査の対象となった下水主遺跡は、城陽市の南西部に位置し、木津川右岸の沖積地に立地する南北1,200m以上、東西540m以上の範囲に広がる遺跡で、平成23年度以降、新名神高速道路整備事業等に伴い、継続して発掘調査が実施されている。今回の調査地点は遺跡の北端部に当たり、平成26・27年度の2か年にわたって調査を実施した。下水主遺跡の調査としては、平成26年度が第6次調査、平成27年度が第8次調査となる。

調査にあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課の立会・試掘調査、ならびに当調査研究センターが実施した発掘調査の成果を参考にした。また、調査地区割等については、新名神高速道路整備事業に伴って発掘調査の対象となる下水主遺跡と隣接する水主神社東遺跡を包括するように設定された調査地区名・調査地区割を踏襲した。

現地調査ならびに報告書作成にあたっては、京都府教育委員会・城陽市教育委員会をはじめ、関係機関、地元自治会や住民の方々のご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。

(石井清司)

[調査体制等]

平成26年度調査：下水主遺跡第6次調査

現地調査責任者	調査課長	石井清司
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	細川康晴
	同 主 査	戸原和人
	同 調 査 員	渡邊拓也

調 査 場 所 京都府城陽市寺田今橋

調 査 期 間 平成26年11月17日～平成27年3月6日

調 査 面 積 1,220㎡

平成27年度調査：下水主遺跡第8次調査

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
調査担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保

同	総括主査	増田孝彦・石井清司
同	調査員	竹村亮仁・渡邊拓也・橋本 稔・ 田原葉月

調査場所 京都府城陽市寺田今橋・南川顔

調査期間 平成27年4月24日～平成27年10月9日

調査面積 6,000㎡

平成28年度整理作業

整理作業責任者	調査課長	森 正
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
同	総括主査	増田孝彦・石井清司

2. 位置と環境

1) 地理的環境

下水主遺跡は、城陽市の西端で、南東から北西方向に直線的に流れる木津川の右岸600mほどのところに位置し、沖積平野に立地する。城陽市域には鷲峰山(682m)の前山群の鏡谷山・高塚山・飯盛山から派生した青谷川・長谷川・大谷川が丘陵部から木津川方向に流れており、扇状地を形成している。また、もとは木津川の分流で、自然の河川としては不自然に直角に折れ曲がっている古川があり、『日本書紀』仁徳12年条に「大溝を山背の栗隈県に掘り以て、国を潤す」と云われた栗隈大溝の跡と推定されている水路がある。これら河川は、昭和16年に全水域が干拓された東西4km、南北3km、周囲16kmの巨椋池に注いでいた。

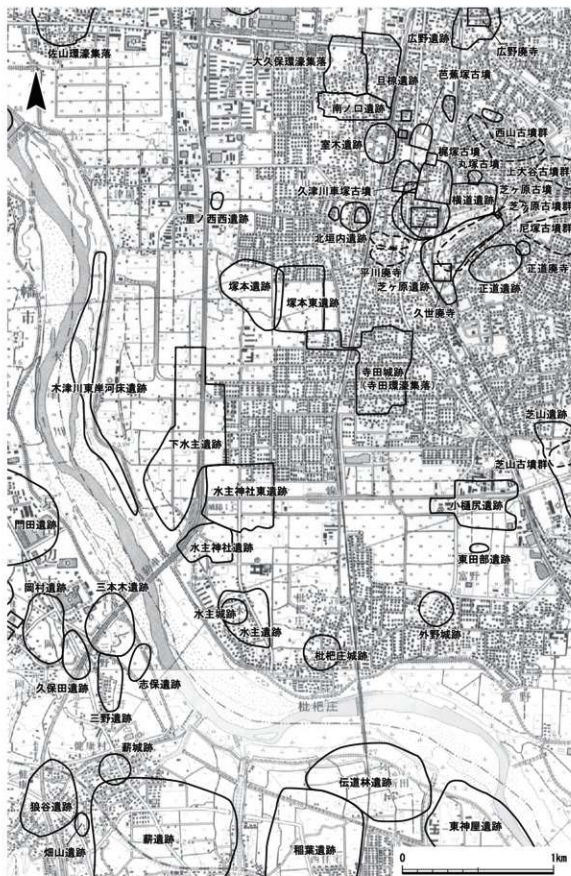
下水主遺跡が所在する城陽市寺田・水主地域は、古代以降、木津川が氾濫を繰り返していたようである。近年では明治9年、明治18年、明治22年、昭和18年と何度となく洪水被害にみまわれ、これまで下水主遺跡・水主神社東遺跡の調査でも、中世の遺構を検出するまでに洪水による土砂の堆積層を複数確認している。また、現在の地図でも木津川の破堤を推測させる地形の変換点が城陽市富野地区や八幡市上津屋地区あたりで確認できる。

2) 歴史的環境

城陽市域の中世以前の遺跡の多くは、東部の低位段丘面および扇状地に立地している。

これまでに確認されている遺跡について時代を追って概観すると、旧石器時代のササカイト片が芝ヶ原遺跡、森山遺跡などで散見されるが、明確な遺跡としては発掘調査された例はない。縄文時代には森山遺跡が知られている。森山遺跡では、中央の空閑地を囲むように円形の堅穴建物6基と埋甕が配置されている。

弥生時代前期の遺跡は、木津川市燈籠寺遺跡、京田辺市田辺遺跡などで集落あるいは墓と考えられる遺構・遺物を検出しているが、城陽市域では未だ検出例がない。中期には、甕棺・壺棺などの出土と遺物の散布が多く確認されているが、明確な堅穴建物を含む集落遺跡は確認されてい



第 1 図 調査地および周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000 宇治・田辺)

ない。ただ、下水主遺跡では、平成26年度に調査を実施したN地区で土坑を検出したほか、今回報告するM2区では土坑を確認した。したがって、M2区の近辺、下水主遺跡の北東部に弥生時代中期の集落が存在した可能性が考えられる。後期の集落跡としてはこれまでに森山遺跡・芝ヶ原遺跡・塚本遺跡で確認されており、おもに低位段丘面に集落が点在するものと思われていた。しかし、下水主遺跡の西端のF地区で新たに竪穴建物を検出しており、木津川によって形成された微高地上に集落が点在している可能性が高くなった。

古墳時代は、この地が栗隈県の中心地であるとともに、これまでの弥生時代とは違い、多くの遺跡を確認している。このことは、この地域がこの時期以降に開発が進められ、南山城地域における中心地域であったことを示していると考えられる。古墳時代初頭には竪穴建物を中心とした一般集落が、芝山遺跡・室木遺跡で確認されているほか、森山遺跡では東西45m、南北36m、溝幅4.2～4.7mを測る方形の溝が見つかっており、家族居館と考えられている。古墳としては古墳出現期の芝ヶ原古墳のほか、前期の梅ノ子塚古墳、中期の久津川古墳群と大規模な前方後円墳が点在している。一方、後期には芝ヶ原遺跡などで多くの竪穴建物を確認しているものの、中期にみられるような大型古墳はなく、古墳群としては小規模なものが点在する程度である。

飛鳥時代から奈良時代にかけては、久世廃寺・平川廃寺・広野廃寺と久世郡では3か寺が造営され、郡衙と推定される正道官衙遺跡、正方位や同方位を向く掘立柱建物を数多く検出した芝山遺跡がある。これらは、平城宮から南山城を抜け近江に通じる東山・北陸道沿いに点在している。

城陽市域の東半部が官衙・寺院・集落が濃密に分布するのに対して、西半部では遺跡の分布が疎らである。これは、下水主遺跡を含む西半部では木津川の洪水による破堤により多くの土砂が堆積した状態が発掘調査によって確認されており、こういった自然環境によるところが多いと考えられる。現在の地形・田畑の形状をみると、農地の区画制度であり、方一町(109m)を基本単位とした坪に、六町四方の里からなる条里地割を明確に留めていることがわかる。

平安時代以降、長岡京・平安京遷都とともに、城陽市域では遺跡の数が減じており、一般集落と推定される遺跡が点在する程度となる。

(石井清司)

3. 調査の経過

1) 調査に至る経緯

今回報告する一連の調査は、一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業としては、新名神高速道路整備事業に伴って建設が進められている城陽JCT・IC(仮称)から、一般国道24号までの接続道路を整備する事業である。

発掘調査の対象となる下水主遺跡は、平成25・26年度の京都府教育委員会による試掘調査や範囲確認調査等により、遺跡の範囲は平成24年度当時よりも北へ広がることが確認されており、現在の古川の北側まで及んでいる。このような遺跡の広がりを受けて、新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査では、平成26年度以降、新たに調査地点が追加されてきた。一方、本事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は当初予定されていなかったが、遺跡範囲が拡大したため、発掘調査が必要

と判断されるに至った。このため、京都府教育委員会と西日本高速道路株式会社とで調査範囲や調査期間等について継続的に協議が行われた。(筒井崇史)

2) 調査の方法と調査地区の設定

本事業に伴い発掘調査を実施した下水主遺跡は、平成23年度以降、南東側に隣接する水主神社東遺跡とともに、新名神高速道路整備事業や一般国道24号金尾交差点改良工事に伴って発掘調査が実施されている。今回の発掘調査にあたっては、既往の調査に伴う調査方法や調査地区割を踏襲することとした。

(1) 調査の方法

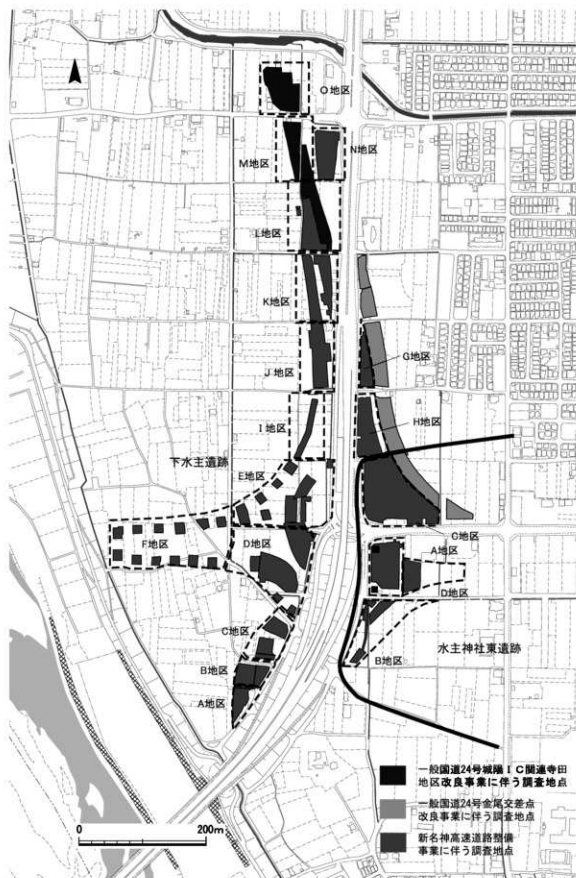
調査区の設定にあたっては、事業者側の工事計画にもとづき、京都府教育委員会と調整の上、埋蔵文化財に影響の及ぶ範囲を対象とした。調査地区名は、新名神高速道路整備事業に伴うA地区、B地区などの名称を引き続き使用した。この調査地区に対して異なる年度に調査を実施した場合などは枝番号を設けて区別した(2項参照)。また、調査の対象となる範囲には、国土標系に基づいて地区割を設定した。これも新名神高速道路整備事業で設定された地区割を使用した(3項参照)。

調査は、遺構面直上まで重機で堆積土を除去した。その後、人力により遺物包含を掘削し、遺構面の精査作業を行って遺構の検出に努めた。検出した遺構は、1/100縮尺の平面図に記録しながら、順次、掘削作業を進めた。遺構の掘削と併行して1/10縮尺ないし1/20縮尺の平面図や断面図、あるいは1/10縮尺の遺物出土状況図などの記録図面の作成を行った。また、遺構や土層断面などの記録写真の撮影を行った。遺構面全体の調査を終えると、調査区ごとに全景写真を撮影した。さらに、必要に応じて空中写真撮影と、それによる図化作業を実施した。また、下層遺構が確認された場合は、上記の作業を繰り返し行った。

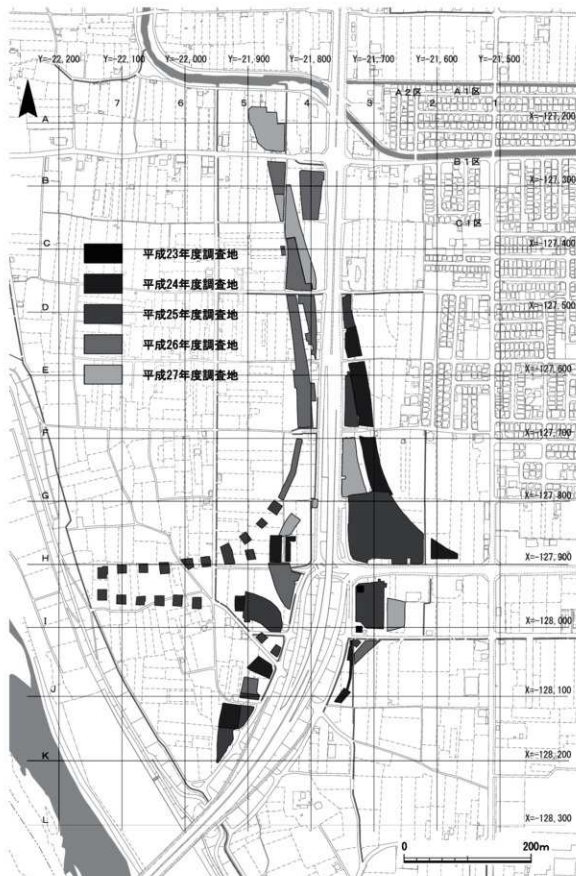
検出した遺構には原則として、各調査地区ごとに1番から通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付与した。ただし、平成27年度のL・M両地区の遺構番号は平成26年度調査からの続きの番号を付与した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、土坑：SK、溝・溝状遺構：SD、柱穴・ピット：SP、不明遺構：SXである。本報告で使用した遺構番号は原則として調査時のものであるが、調査時に番号のなかった遺構については、本報告作成時に新たに付与したものもある。ただし、鳥畑の遺構番号については、調査時の遺構番号とは別に一般国道24号金尾交差点改良工事や新名神高速道路整備事業の調査で検出した鳥畑を含めた通し番号を付与した。

(2) 調査地区の設定

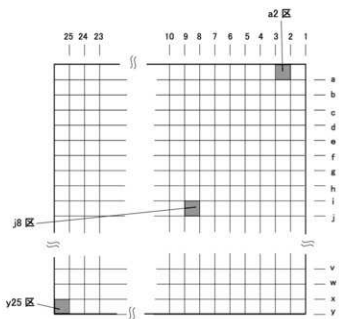
新名神高速道路整備事業に伴う調査対象地が広大であることから、調査対象地をいくつかの調査地区に分割して調査を進めることにした。この調査地区名は、工事との関係により平成25年度中に調査を実施する地点が定まるにしたがって設定した。この「調査地区」は現用の市道や復原条里の境界等で区分したもので、面的な空間を指し、A地区、B地区、……、L地区、……というように、アルファベットで呼ぶものとする。このなかに実際に調査を実施した「調査区」を設



第2図 調査地区配置図(1/6,000)



第3図 水主神社東遺跡・下水主遺跡全体地区割図(1/6,000)



第4図 小地区割概念図

まず、対象地全体に100m四方の大区画を設定した。大区画は、 $X=-127,200$ 、 $Y=-21,500$ を起点とし、その基準線を国土座標系に一致させた100m四方の方眼とした。この区画は、南北方向は北からA、B、Cとし、東西方向は東から1、2、3、……とし、両者の交点をA1、B2、……、H4などとする。大区画の地区名は100m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとする(第3図)。この大区画の一边を25等分して4m四方の方眼を設定し、小区画とした。小区画の基準線も大区画と同様に、国土座標系と一致させ、南北方向は北からa、b、c、……、yとし、東西方向は東から1、2、3、……、25とし、両者の交点をa1、b1、c3、y25などとする。小区画の地区名も4m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとする。Y軸の下2桁で表すと、1ラインは100m、25ラインは96mに当たる。また、X軸の下2桁で表すと、aラインは04m、yラインは00mに当たる(第4図)。なお、地区名は「H3-r12区」のように表記する。

(筒井崇史)

3) 調査の経過

(1) 平成26年度調査の経過

調査対象地のほぼ中央を東西方向に通じる府道内里城陽線立体交差するための橋台の建設ならびに盛り土造営の予定地のうち、府道内里城陽線の南側約1,200㎡を対象として発掘調査を実施した。対象地は一部に盛り土が行われていたものの、調査前はおもに耕作地として利用されていた。調査は、平成26年11月17日に重機によって表土と堆積土の除去から開始した。その後、人力による精査を行い、上層遺構として鳥畑等を検出した。これらの調査を進めるとともに、下層遺構として古代の柱穴やピットと弥生時代中期の溝1条を検出した。これらの図面作成や写真撮影等を行い、その成果がおおよそ明らかになると、平成27年1月27日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、調査成果について、平成27年1月28日に、おもに地元関

定し、複数の調査区がある場合はD1区、D2区、……、D6区と、アルファベットと数字の組み合わせで表すこととした。したがって、「○地区」と「○○区」は、異なるものをさす区分名称とする(第2図)。

(3) 地区割の設定

新名神高速道路整備事業等に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の調査では、上記の調査地区とは別に、検出遺構や出土遺物の位置を記録する目的で、対象地全体を覆う地区割を国土座標系(世界測地系)にもとづいて設定した。

係者を対象とした関係者説明会を実施し、22名の参加があった。その後、図面や写真等について補足して1月29日に現地の調査を終了した。その後、これらの埋め戻しを行うとともに、27年度に調査の実施を予定していたL2・M2区の表土と近世以降の堆積土の除去作業を3月6日まで行い、平成26年度における現地作業を終了した。

なお、平成26年度の発掘調査に伴う委託契約等については、本来は国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼による「一般国道24号城陽1C関連寺田地区改良事業」の一部であったが、諸般の事情により、西日本高速道路株式会社契約である新名神高速道路整備事業に組み入れて実施することとなった。このため、新名神高速道路整備事業に伴う下水主遺跡第6次調査の一部として実施したことから、別個の調査次数は与えていない。

(筒井崇史)

(2)平成27年度調査の経過

平成27年度は、約6,000㎡を対象として、M1区の南北両側に調査区を設けて実施した(南側をL2・M2区、府道を挟んで北側をO地区)。この調査については、「一般国道24号城陽1C関連寺田地区改良事業」として、下水主遺跡第8次調査として調査次数を与えた。

①L2区の調査

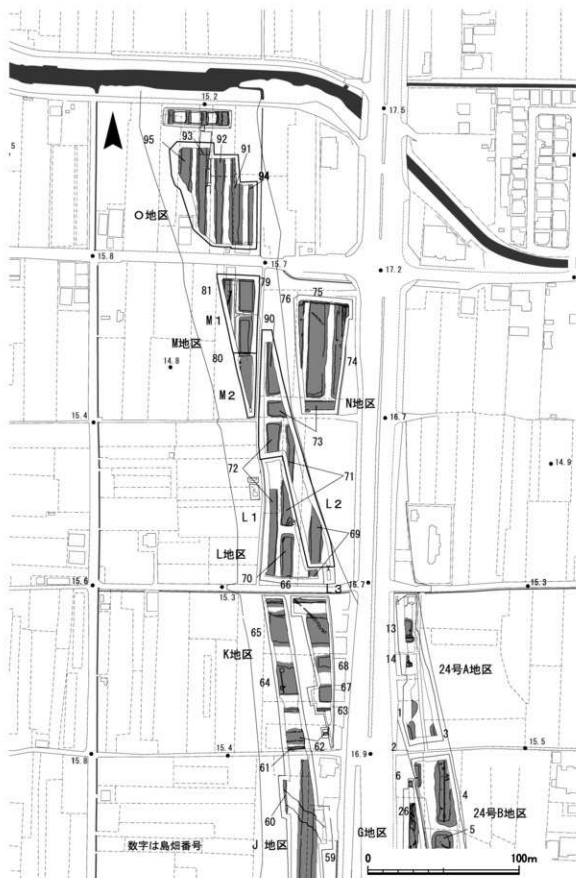
L2区は、盛り土造営の予定地を対象として調査区を設定した。対象地は平成26年度に耕作土と近世以降の堆積土を重機により除去していたため、平成27年度の調査は、平成27年4月24日に近世以前の堆積土を重機で除去する作業から開始した。重機掘削の終了後、順次人力による遺構の検出作業を進めた。その結果、L1区で確認されていた島畑69・71・72の各島畑の北半部と北端、ならびにその周囲に掘られた溝状遺構を検出した。また、L地区とM地区の境界は、城陽市域の復原条里によると、坪境の推定地点に当たることから、この地点での発掘調査を進めたところ、島畑73と島畑71の間で、東西方向の溝SD57を検出した。周辺で検出している溝状遺構とは深さが異なることから、条里の坪境に設けられた溝と判断した。

併行して作業を進めていたM2区とともに空中写真撮影を6月30日に実施した。その後、L1区の下層で検出した氾濫流路の延長部を確認するために調査を進めた。その結果、地表面から約3.5m、島畑69の上面から約0.7mで、下層遺構として縄文時代晩期の氾濫流路を検出した。L1区で検出した氾濫流路は2条であったが、L2区では、ほぼ同じ地点で3条の氾濫流路を確認することができた。L2区の下層遺構の調査に伴う空中写真撮影を9月18日に実施し、氾濫流路内の樹木や堅果類の種実の採取を9月24日に行い、放射性炭素年代測定などを行った。その後、埋め戻し作業を開始し、9月30日に埋め戻しを終了して、L2区の現地発掘調査を終了した。

(石井清司)

②M2区の調査

M2区も、盛り土造営の予定地を対象として調査区を設定した。対象地は、L2区と同様、耕作土と近世以降の堆積土を重機により除去していたため、平成27年度の調査は、L2区と合わせて、平成27年4月24日に近世以前の堆積土を重機で除去する作業から開始した。ただし、M2区



第5図 下水主遺跡第6・8次調査遺構配置図(S=1/2,500)

では調査地の中央を南北方向の農業用水路が現存しているため、これを残して重機掘削を行った。以下の記述では水路の西側を西調査区、東側を東調査区と呼称する。重機掘削の終了後、順次人力による遺構の検出作業を進めた。

調査の結果、西調査区ではM1区で検出した島畑80の南半部を確認した。水路を挟んだ東調査区では新たに南北方向の島畑90を検出した。島畑90の南側では、N地区で検出した東西方向の島畑73の西端部分を検出した。M2区の上層遺構については、L2区と合わせて6月30日に空中写真撮影を行った。

その後、島畑の検出時に土色の変化が認められた範囲を掘削したところ、弥生時代中・後期の土器が出土する土坑(S K51・68・69・75)、柱穴(S P79)などを検出した。さらに下層の遺構の有無を確認するために10cm程度掘り下げて、人力による遺構検出に努めた。その結果、詳細な時期は不明であるが、最下層遺構として、炭化物を含む土坑などを検出した。下層遺構の図化作業を行った後、L2区と合わせて9月6日に現地説明会を実施し、114名の参加を得た。9月8日には下層遺構を対象とした空中写真撮影を実施した。

その後、9月10日から調査区の埋め戻し作業を開始し、9月30日に埋め戻しを終了して、M2区の現地発掘調査を終了した。(石井清司)

③O地区の調査

O地区は、橋台建設ならびに盛り土造営予定地を対象に4月28日に調査区の設定を行い、5月7日より重機による耕作土や近世堆積土の除去を開始し、その後、人力による遺構検出を行った。調査にあたっては、重機による掘削土の置き場を確保する必要から、対象地の南半部(O1区)から発掘調査に着手した。O1区では、南北方向の島畑4基と溝状遺構4条、ならびにこれらに伴う素掘り溝を検出した。調査区南半部の島畑を完掘した状態で、7月7日に空中写真撮影を実施した。その後、下層遺構を確認するため、重機によって約20cmの掘削を行い、その後、人力による遺構検出を実施した。しかし、明確な遺構は検出できなかった。O1区の調査を終了した後、その埋め戻しと併行して、8月17日から北半部(O2区)の重機掘削を開始した。重機掘削後に人力による遺構検出を進めた結果、O1区で検出していた各島畑の北半部を検出したが、調査区内では各島畑の北端は確認できず、O地区で検出した島畑の全長は60m以上の南北に長い形状であることが明らかになった。島畑の全容を記録するため、9月8日に空中写真撮影を実施した。その後、下層遺構の有無を確認するために調査を進めたが、南半部と同様、明確な下層遺構を確認することはできなかった。調査の終了後に、調査区の埋め戻し作業を10月5日から開始し、10月9日に現地発掘調査を終了した。(石井清司)

4)報告書作成作業について

平成28年度は、平成26・27両年度に発掘調査を実施した地点の整理・報告書作成作業を実施した。本事業に伴う整理作業は、平成27年度に遺物の洗浄作業から開始した。洗浄作業の終了した遺物については遺物台帳に登録の上、注記作業・接合作業を行った。また、現地で作成した図面や写真等の整理作業を行った。遺構写真については一部焼き付けを行った。

平成28年度は、注記等が終了した遺物から報告書に掲載すべき遺物の選別を行い、これらについての実測や拓本作業を行った。実測を終えた遺物を中心に、遺物写真の撮影を行った。また、現地で作成した図面をもとに報告書に掲載すべき挿図の下図を作成し、順次トレースを実施した。前年度に焼き付けた遺構写真と、先の遺物写真と合わせて写真図版の作成を行った。なお、最終的に本報告に掲載した遺物は144点である。

(筒井崇史)

5) これまでの調査成果

一連の下水主遺跡・水主神社東遺跡の調査では、大きな成果を上げている。これらの一部についてはすでに報告書を刊行済であるが、現在も報告書の刊行に向けての整理作業中のものもある。ここでは、下水主遺跡・水主神社東遺跡のこれまでの調査の経過と成果について簡単にまとめた。

下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査は、新名神高速道路整備事業が始まる以前に発掘調査が実施されたことはなく、分布調査等により、遺物散布地として知られていた。

一連の発掘調査は、新名神高速道路整備事業に伴い、平成23年度に実施した水主神社東遺跡の調査を嚆矢とする(第1次調査)。小規模調査であったが、鳥畑の存在を確認した。

平成24年度は、水主神社東遺跡の調査(第2次調査)とともに、新たに下水主遺跡の調査にも着手した(第1次調査)。また、一般国道24号金尾交差点改良工事に伴い、下水主遺跡(第2次調査)・水主神社東遺跡(第3次調査)の調査を実施した。いずれの調査においても上層遺構として鳥畑を検出するとともに、下水主遺跡第1次調査のB地区で飛鳥時代の溝や土坑、古墳時代前期の大規模な溝などを検出した。この調査地では古墳時代前期の溝から大量の土器や木製品等が出土したため、次年度にも継続調査を行った。また、下水主遺跡第2次調査では下層遺構の調査において縄文土器が出土する層位を確認した。

平成25年度は、城陽JCT・IC(仮称)の建設工事が本格化するとともに、埋蔵文化財の調査も2万㎡を越える調査となった。新名神高速道路整備事業としては、下水主遺跡(第4次調査)・水主神社東遺跡(第5次調査)の調査を実施した。また、一般国道24号金尾交差点改良工事に伴う調査も引き続き実施した(下水主遺跡第3次調査・水主神社東遺跡第4次調査)。これらの調査でも、上層遺構として鳥畑を多数検出した。また、水主神社東遺跡第4・5次調査地では下層遺構として古代の掘立柱建物や弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の溝、縄文時代晩期の土器溜まりなどを検出した。下水主遺跡第4次調査では、A地区では飛鳥時代を中心とする多数の柱穴群や土坑などが確認されるとともに、井戸1基を検出した。これらからは遺物包含層出土のものも合わせて大量の土器が出土した。B地区では前年度に引き続き、古墳時代前期の大規模な溝の調査を進めた。F地区では、中世の井戸や土坑をはじめ、古代の掘立柱建物・井戸、弥生時代後期の竅穴建物、弥生時代中期の土坑などを検出した。F地区からA・B地区にかけては木津川に沿って形成された微高地に当たると考えられ、ほかの調査地点にくらべて、建物や井戸など居住に関わる遺構が検出され、大量の土器が出土したことから、居住空間であったと考えられる。以上のほか、

京都府教育委員会による範囲確認調査が実施され、下水主遺跡がそれまで周知されていた範囲よりも北側へ広がることが確認された(下水主遺跡第5次調査)

平成26年度も新名神高速道路整備事業として2万㎡を越える調査を実施した。水主神社東遺跡(第6次調査)・下水主遺跡(第6次調査)では引き続き上層遺構として多数の鳥畑を検出した。また、下層遺構としては、水主神社東遺跡第6次調査では、縄文時代晩期の土器が出土する谷状の地形を確認した。下水主遺跡第6次調査では、A・B地区の調査を前年度に引き続き実施した。A地区で検出した柱穴群は、建物としてのまとまりが見られず、直線状に並ぶものばかりであった。その評価は今後の検討課題である。一方、B地区の古墳時代前期の大規模な溝は、溝の斜面に大規模な護岸施設を設置していることが確認でき、溝の規模などから舟を引き入れた可能性も考えられる。J地区ではB地区と同時期かやや先行する時期の溝を確認した。埋土からは廃棄された建築部材等が出土した。L地区では大規模な縄文時代晩期の氾濫流路を検出し、大量の縄文土器が出土した。この氾濫流路は、木津川の自然堤防の破壊によって生じた洪水が地表を抉ってきたものと考えられる。N地区では小規模ながら弥生時代中期の土坑を確認し、下水主遺跡の北端部に弥生時代中期の遺構が広がる可能性が確認された。以上のほか、下水主遺跡に対する範囲確認調査ならびに本事業に伴う盛り土造営工事範囲を対象とした試掘調査が京都府教育委員会によって実施され、鳥畑を確認した(下水主遺跡第7次調査)。

平成27年度は、新名神高速道路整備事業に関わる城陽JCT・IC(仮称)建設予定地における発掘調査の実質的な最終年度となった。調査は引き続き、水主神社東遺跡(第7次調査)・下水主遺跡(第9次調査)の調査を実施した。上層遺構として鳥畑を検出した。下層遺構としては、下水主遺跡H地区で、J地区で検出した古墳時代前期の溝の延長と考えられる溝を検出し、建築部材やそれに関わると考えられる窓枠状木製品などが出土した。

(筒井崇史)

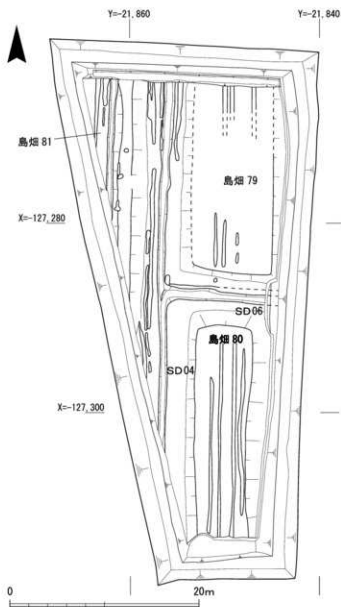
4. 平成26年度調査の成果

1) 調査区の概要と基本的な層序

平成26年度に発掘調査を実施したM1区は、一般国道24号の西側約65m、府道内里城陽線の南側に設定したもので、北辺28.8m、南辺14.0m、南北長55.4mの台形状の調査区である。調査地周辺の現地表面の標高はおおよそ15.0mである。調査面積は1,220㎡である。出土した遺物は整理箱にして3箱である。

調査の結果、上層遺構として、南北方向に延びる鳥畑3基とそれに伴う溝状遺構2条を検出した。鳥畑の上面や溝状遺構の底面では素掘り溝を多数検出した(第6図)。また、鳥畑の盛り土内から弥生土器が出土するなど、下層遺構が稠密に存在することが予想された。しかし、実際の調査では、下層遺構として古代のピット1基と弥生時代の溝1条を検出したほか、時期不明の土坑等を確認したにとどまり、結果として遺構密度は希薄であった(第6図)。

M1区の基本的な層序を北壁の土層断面で説明する。調査区の東半部には、現代の盛り土が認



第6図 M1区遺構配置図(S=1/400)

められた(1・139層)。盛り土の直下には耕作土として褐灰色極細粒砂(12層)や暗緑灰色極細粒砂(35層)が堆積する。調査区の西半部でも、耕作土として灰褐色極細粒砂(2層)が確認できる。これらの下層には、にぶい黄橙色シルト(15層)、明オリーブ灰色極細粒砂(23層)、明褐灰色シルト(27層)、にぶい黄色シルト(47層)、灰色粘土(48層)、にぶい黄橙色極細粒砂(60層)、灰黄色極細粒砂(90層)などが堆積している。これらの詳しい時期は明らかでないが、近世から近代にかけての堆積と思われる。これらの下層には、東半部で近世の鳥畑と思われる灰オリーブ色極細粒砂(74層)を確認した。74層の下層には灰オリーブ色極細粒砂(76層)、緑灰色極細粒砂(80層)、灰黄色シルト(96層)などが認められたが、細かな層序の単位が認められることから鳥畑の盛り土の可能性がある。これらを除去すると、最も初期の鳥畑を検出した(鳥畑79)。鳥畑79の基盤層は、浅黄色極細粒砂～シルト(132層)で、その上部に明緑灰色粘土(104層)、浅黄色粘土(110層)、灰黄色粘土(114層)などを盛り上げて鳥畑を形成している。これらを基盤に素掘り溝が掘削されている(100～102層など)。中央部では、48層などの下層に灰白色粘土(111層)、灰黄色粘土(113層)などを埋土とする溝状遺構SD04を検出した。西半部では23層などの下層ににぶい黄橙色シルト(30層)、オリーブ灰色極細粒砂(62層)、灰白色極細粒砂(64層)、灰白色極細粒砂(119層)、灰白色シルト(121層)など、東半部と同様、細かな層序の単位から鳥畑の盛り土の可能性が。ただし、東半部の74層ほど明瞭な鳥畑の盛り土は認められない。これらを除去すると、鳥畑81の基盤層である浅黄色極細粒砂～シルト(132層)を確認することができた。鳥畑上面の素掘り溝(100～102層)からは中世前半(12世紀代)の遺物が出土することから、鳥畑が最初に造営された時期はこの時期頃と考えられる。鳥畑の基盤層である132層は1m以上の厚さがあり、

安定した地盤を形成している(第7図)。

(筒井崇史・渡邊拓也)

2) 検出遺構

(1) 上層遺構

鳥畑79 (S X05) (第8図) 調査区の北東部で検出した(B4-q12区ほか)。南北方向の鳥畑で、規模は検出長20.4m、基部検出幅10.8m、上面幅8.6m前後、高さ0.25mを測る。鳥畑上面の標高はおよそ13.0mである。鳥畑の北半部では素掘り溝のわずかな部分しか検出できなかったが、調査区北壁の土層断面の観察の結果、素掘り溝を少なくとも3条確認した(第8図100~102層)。

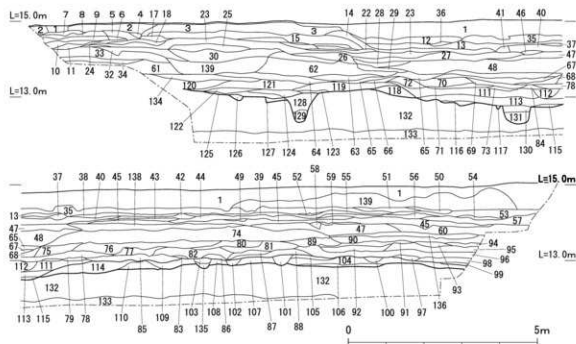
南半部では素掘り溝を4条検出した(S D20・21・23・24)。南半部で検出した素掘り溝は、いずれも南北方向のもので、検出長3.2~5.6m、幅0.2~0.4m、深さ0.1mほどである。埋土は褐灰色シルトである。なお、S D23とS D24は同一の素掘り溝であろう。

遺物は精査時や素掘り溝の掘削時に土師器や瓦器の細片が出土した。

鳥畑81 (SX01・03) (第8図) 調査区の北西部で検出した(B4-q15区ほか)。南北方向の鳥畑で、規模は検出長26.6m、基部検出幅7.1m、上面検出幅5.4m、高さ0.3mを測る。鳥畑上面の標高はおよそ13.1mである。精査時などに瓦器碗などが出土した(第13図1)。鳥畑の上面では南北方向の溝1条(S D02)と素掘り溝を4条(S D08~10・49)を検出した。

溝S D02は、検出長13.2m、幅0.6m、深さ0.7mを測る。断面は「U」字状を呈し、埋土は上層がオリーブ灰色極細粒砂(第7図128層)、下層が青灰色粘土(同129層)である。埋土から瓦器碗や土師器皿などが出土した(第13図8~11)。ほかの素掘り溝に比べ、幅が広く深いことから、鳥畑81を東西に分割する区画溝と考えられる。

素掘り溝(S D08~10・49)は 検出長1.9~7.0m、幅0.15~0.45m、深さ0.05m前後である。埋

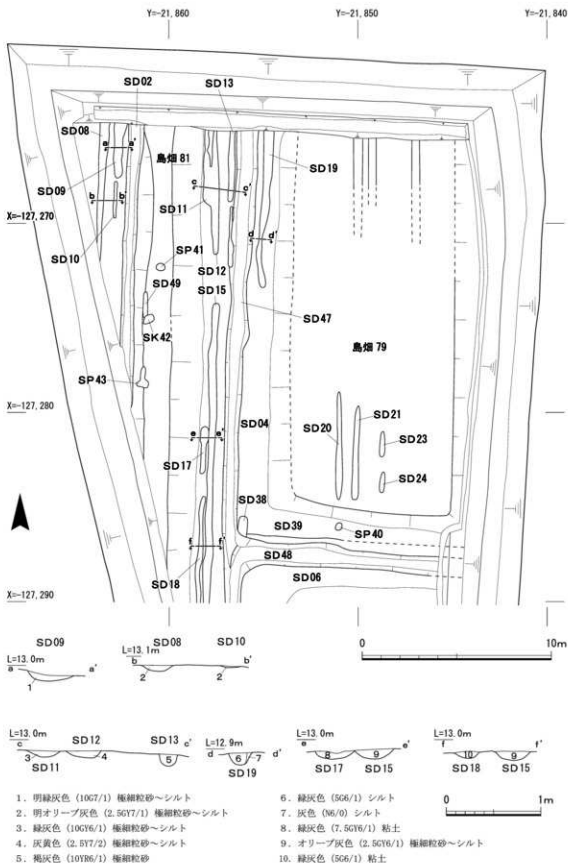


第7図 M1区北壁土層断面図(S=1/100)

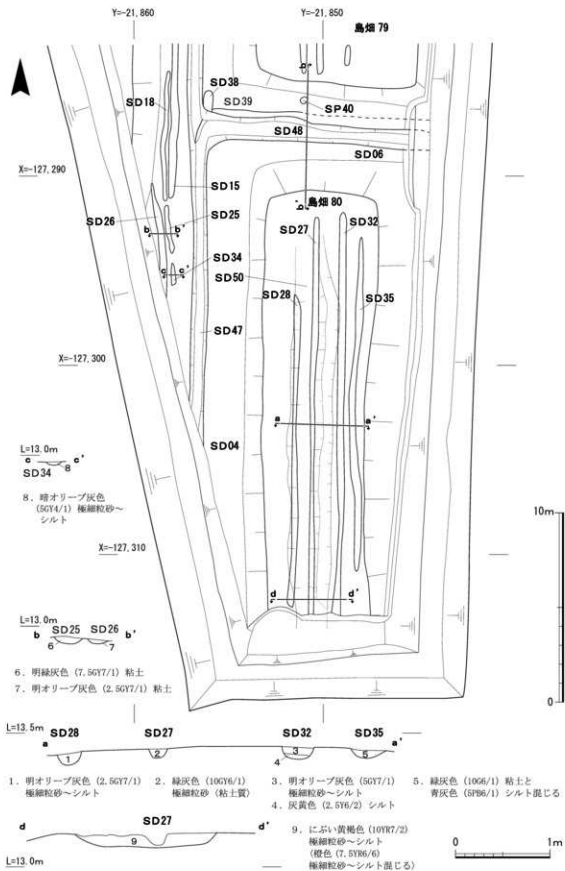
北壁土層名

M1区北壁土層断面図

1. 浅黄色 (2.5Y8/4) 中粒砂 (数 cm ～ 10cm 大の石を含む、現代の盛土)
2. 灰褐色 (7.5YR5/2) 極細粒砂～シルト
3. 明黄褐色 (10YR7/5) 極細粒砂～シルト
4. にぶい褐色 (7.5Y5/3) シルト
5. 褐灰色 (10YR4/1) シルト
6. 褐灰色 (10YR5/1) 細粒砂～極細粒砂
7. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) 極細粒砂～シルト
8. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂
9. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂～シルト
10. 黄灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂～シルト
11. 灰白色 (5Y7/2) シルト
12. 褐灰色 (2.5Y6/1) 極細粒砂
13. 褐灰色 (7.5YR6/1) 極細粒砂
14. 褐灰色 (5YR6/1) 極細粒砂
15. にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルト
16. 灰白色 (10YR/2) 細粒砂～極細粒砂
17. 明黄褐色 (10YR7/6) 中粒砂～細粒砂
18. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト
19. にぶい黄褐色 (10YR7/2) シルト
20. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂
21. 明褐色 (7.5YR7/2) シルト
22. 青灰色 (5B6/1) シルト
23. 明オリーブ灰色 (2.5G7/1) 極細粒砂～シルト
24. にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルト
25. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト
26. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト
27. 明褐色 (7.5YR7/2) シルト
28. 灰白色 (10YR7/1) シルト
29. 青灰色 (5B6/1) 極細粒砂～シルト
30. にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト～粘質土
31. 青灰色 (10B6/1) 粘土
32. 明黄褐色 (10YR7/6) 極細粒砂～シルト
33. 緑灰色 (5G6/1) 極細粒砂～シルト
34. 青灰色 (5B6/1) 極細粒砂
35. 暗緑灰色 (10G4/1) 極細粒砂
36. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂～シルト
37. 灰色 (7.5Y6/1) 極細粒砂～シルト
38. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 極細粒砂
39. 灰色 (5Y6/1) 極細粒砂 (2mm 大の石含む)
40. 灰色 (10Y6/1) 極細粒砂～シルト
41. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 極細粒砂～シルト
42. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂～シルト
43. 明緑灰色 (10G7/1) シルト
44. 灰白色 (7.5Y7/1) 極細粒砂～シルト
45. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 極細粒砂
46. 青灰色 (5B6/1) シルト
47. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト
48. 灰色 (10Y6/1) 粘土
49. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂～シルト
50. 褐灰色 (7.5YR6/1) 極細粒砂
51. 灰黄褐色 (10YR6/2) 極細粒砂～シルト
52. 淡黄色 (2.5YR/4) 中粒砂
53. 緑灰色 (10G5/1) 細粒砂 (淡黄色 (2.5YR/4) 極細粒砂混じる)
54. 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂～極細粒砂
55. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 細粒砂～極細粒砂
56. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂～極細粒砂
57. 灰白色 (5Y7/2) 細粒砂～極細粒砂
58. 灰黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂
59. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 中粒砂
60. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 極細粒砂～シルト
61. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂～シルト
62. オリーブ灰色 (2.5G6/1) 極細粒砂～シルト
63. 緑灰色 (10G6/1) 極細粒砂～シルト
64. 灰白色 (10Y7/2) 極細粒砂～シルト
65. 青灰色 (5B5/1) 粘土 (にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト混じる)
66. 青灰色 (10B6/1) 粘土
67. 青灰色 (5B6/1) 粘土 (にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細粒砂混じる)
68. 明青灰色 (5B7/1) 粘土
69. 青灰色 (10B7/1) 粘土
70. 明オリーブ灰色 (2.5G7/1) シルト
71. 灰白色 (7.5Y7/2) 粘土
72. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土
73. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土
74. 灰オリーブ色 (2.5Y6/2) 極細粒砂～シルト
75. オリーブ色 (5Y6/3) 極細粒砂～シルト
76. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細粒砂
77. 青灰色 (10B6/1) 粘土 (にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト混じる)
78. 明オリーブ灰色 (2.5G7/1) シルト
79. 灰白色 (5Y7/2) 粘土
80. 緑灰色 (7.5GY5/1) 極細粒砂～シルト
81. 青灰色 (5B5/1) シルト
82. 青灰色 (5B6/1) シルト
83. 青灰色 (10B6/1) シルト
84. 青灰色 (10B6/1) 粘土
85. 灰白色 (5Y7/2) シルト
86. 青灰色 (5B6/1) 粘土
87. 青灰色 (5B6/1) シルト
88. 青灰色 (5B6/1) 粘土
89. 青灰色 (10B6/1) シルト
90. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂
91. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細粒砂～シルト
92. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂～シルト
93. 灰白色 (5GY8/1) シルト
94. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂
95. 灰白色 (5Y7/1) 極細粒砂
96. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト
97. 灰白色 (7.5Y7/1) 極細粒砂～シルト
98. 明青灰色 (10B6/1) 極細粒砂～シルト
99. 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土
100. オリーブ灰色 (2.5G6/1) 粘土
101. 褐灰色 (10YR6/1) 粘土
102. 褐灰色 (2.5Y6/1) シルト
103. 褐灰色 (10YR6/1) 粘土
104. 明緑灰色 (10G7/1) 粘土
105. 明オリーブ灰色 (2.5G7/1) 粘土
106. 灰白色 (5Y7/2) 粘土
107. 灰白色 (5Y7/2) 粘土
108. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土
109. 青灰色 (5B6/1) 粘土
110. 浅黄色 (5Y7/3) 粘土
111. 灰白色 (5Y7/2) 粘土
112. 青灰色 (10B6/1) シルト
113. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土
114. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘土
115. 灰白色 (7.5Y7/2) 粘土 (114より粘質強い)
116. オリーブ灰色 (5G7/1) 粘土
117. 灰白色 (5Y7/2) 粘土
118. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂
119. 灰白色 (7.5Y7/2) 極細粒砂～シルト
120. 明緑灰色 (5G7/1) 粘土
121. 灰白色 (5Y7/2) シルト
122. 明オリーブ灰色 (5G7/1) シルト
123. 明緑灰色 (7.5G7/1) 粘土
124. 明緑灰色 (7.5G7/1) シルト
125. 明オリーブ灰色 (5G7/1) 極細粒砂～シルト
126. 明緑灰色 (10G7/1) 極細粒砂～シルト
127. 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土
128. オリーブ灰色 (5G6/1) 極細粒砂～シルト
129. 青灰色 (10B7/1) 粘土 (にぶい黄褐色 (10YR7/2) シルト混じる)
130. 明緑灰色 (7.5G7/1) 粘土
131. 明オリーブ灰色 (2.5G7/1) 粘土
132. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂～シルト
133. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂～シルト
134. 灰白色 (5Y7/2) 極細粒砂～シルト
135. 青灰色 (10B6/1) 粘土
136. 灰白色 (10Y7/1) 極細粒砂～シルト
137. にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト
138. 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト
139. 青灰色 (10B6/1) 粘土 (明黄褐色 (10YR7/6) 極細粒砂～シルト混じる、現代の盛土)



第8図 M1区鳥畑79・81平面図(1/200)・遺構断面図(1/40)



第9図 M1区鳥煙80平面図(1/200)・遺構断面図(1/40)

土は明オリブ灰色シルトである。SD09とSD10は同一の素掘り溝であろう。なお、当初はSD02を境に2つの鳥畑があると考えていたため、調査時の遺構番号が2つあるが、SD02の性格を区画溝と考えたため、同一の鳥畑と判断した。

遺物は精査時や素掘り溝の掘削時に土師器や瓦器の細片が出土した(第13図1)。

鳥畑80(第9図) 調査区の南半部で検出した(B4-w12区ほか)。南北方向の鳥畑で、規模は検出長24.0m、基部幅8.7m以上、上面幅5.2~6.0m、高さ0.5m前後を測る。鳥畑上面の標高はおよそ13.3mである。鳥畑の上面では南北方向の素掘り溝を4条検出した(SD27・28・32・35)。

検出した素掘り溝は、検出長17.6~21.2m、幅0.15~0.35m、深さ0.1m前後である。埋土は明オリブ灰色シルトや緑灰色極細粒砂などである。また、SD27・28は、それ以前に掘られた幅の広い溝SD50の埋土上面に掘削されていることが確認できた。したがって、素掘り溝が掘削される以前にSD50が存在したことになる。SD50は他の素掘り溝とくらべると規模等が異なることから、上述の溝SD02と同様、鳥畑を東西に区画するための溝と考えられる。SD50は、検出長19.5m、幅2.5m前後、深さ0.1~0.2mである。埋土はにぶい黄橙色シルトないし明オリブ色粘土である。

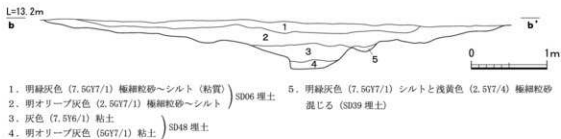
精査時や重機掘削時などに瓦器皿や土師器皿、弥生土器莞などが出土した(第13図2~7)。

溝状遺構SD04(第8・9図) 鳥畑79・80と鳥畑81の間で検出した(B4-ql4区ほか)。南北方向に延び、規模は検出長48.4m、幅6.4m、深さ0.3m前後を測る。溝の底には深めの溝SD47と多数の素掘り溝(SD11~19・25・26・34)を検出した。

SD47は検出長38.8m、幅0.7m、深さ0.5m前後を測る。断面は「U」字状を呈し、埋土は上層が明緑灰色粘土(第7図130層)、下層が明オリブ灰色粘土(第7図131層)である。埋土から須恵器杯Aなどが出土した(第13図13)。SD47の深さがほかの素掘り溝よりも深いことから、排水等を目的としたものと考えられる。

検出した素掘り溝は、検出長2.5~16.9m、幅0.25~0.4m、深さ0.1m前後である。埋土は緑灰色シルトなどである。出土遺物としては土師器や瓦器の細片などがある。

溝状遺構SD06(第9・10図) 鳥畑79と鳥畑80の間で検出した(B4-v12区ほか)。東西方向に延び、規模は検出長8.1m、幅5.8m前後、深さ0.3mを測る。埋土は上層が明緑灰色シルト(1層)、下層が明オリブ灰色シルト(2層)である。遺物は土師器や瓦器の細片が出土した。また、溝の底ではSD06と同じ方向に延びるやや深めの溝SD48を検出した。SD48(第9図)は検出長10.7m、

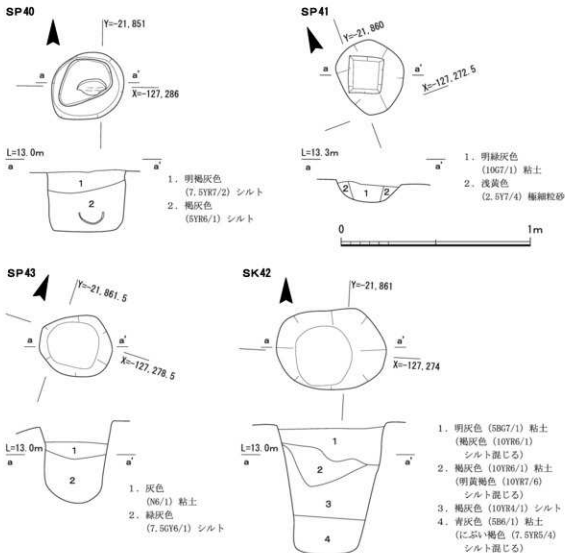


第10図 M1区溝状遺構SD06土層断面図(1/50)

幅0.9～1.2m、深さ0.35mを測る。断面形は緩やかな「U」字状を呈する。上述の溝SD47と同様、排水等を目的としたものと考えられる。埋土は上層が灰色粘土(3層)、下層が明オリーブ灰色粘土(4層)である。遺物は土師器や瓦器の細片が出土した。なお、西端は南北方向に延びるSD47と交差する。SD48の北側肩部に沿って小規模な素掘り溝SD39(第9図)を確認した。検出長4.9m、幅0.4m、深さ0.05m前後である。埋土は明緑灰色シルトと浅黄色極細粒砂の互層(5層)である。遺物は出土していない。

(2)下層遺構

柱穴SP40(第11図左上) 溝状遺構SD06の底、中央北寄りで検出した(B4-v13区)。直径0.4m、検出面からの深さは0.3mを測る。上部は削平されていると考えられる。平面形は円形を呈する。埋土は上層が明褐灰色シルト、下層が褐灰色シルトである。底には柱痕と判断される浅い落ち込みを確認した。遺物は、ほぼ完形の土師器杯1点のみ(第13図14)が出土した。周辺にはこれに伴う柱穴は検出できなかった。出土した土器から飛鳥時代と判断される。



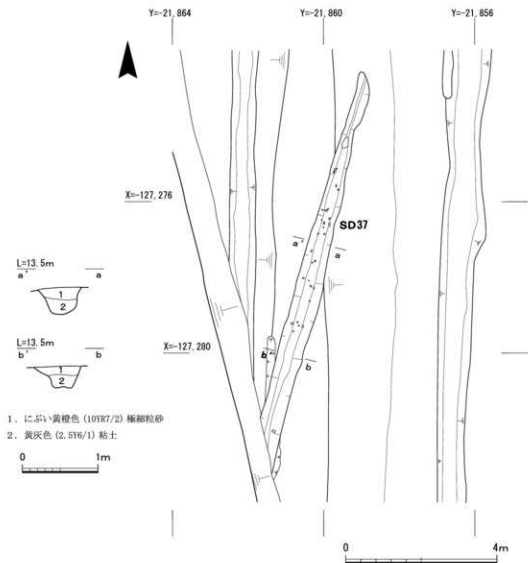
第11図 M1区ビットSP40・41・43、土坑SK42実測図(1/20)

ピット S P 41 (第11図右上) 鳥畑81の中央部北寄りで検出した (B4-s16区)。平面はやや楕円形を呈し、長軸0.4m、短軸0.34m、深さ0.3mを測る。中央部で平面形が方形の土色の変化を確認したことから柱痕の可能性がある。遺物は細片が出土した。

土坑 S K 42 (第11図右下) 鳥畑81の中央付近で検出した (B4-s16区)。平面形は楕円形を呈し、長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.68mを測る。埋土は大きく4層に分けられる。上層から明灰色粘土、褐灰色粘土、褐灰色シルト、青灰色粘土である。遺物は細片が出土した。溝 S D 46と重複し、S K 42が新しい。

ピット S P 43 (第11図左下) 鳥畑81の北寄りで検出した (B4-t16区)。直径0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層が灰色粘土、下層が緑灰色シルトである。埋土上面で土器片がわずかに出土した。素掘り溝 S D 49と重複し、S P 43が古い。

溝 S D 37 (第12図) 鳥畑81の上面で検出した (B4-s15区ほか)。検出長11.0m、幅0.4~0.7m、深さ0.35mを測り、ほぼ直線的に伸びる。溝の主軸は北に対して16°東に振る。断面形は緩やか



第12図 M 1 区溝 S D 37 平面図 (1/100)・土層断面図 (1/50)

な「U」字状を呈する。埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄橙色極細粒砂、下層が黄灰色粘土である。溝からは弥生土器の破片がややまとまって出土した(第13図15・16)。

(渡邊拓也・筒井崇史)

3) 出土遺物

(1) 上層出土遺物

鳥畑81(第13図1) 1は楠葉型瓦器椀であろう。細片であるが、内面に密にミガキを施す。

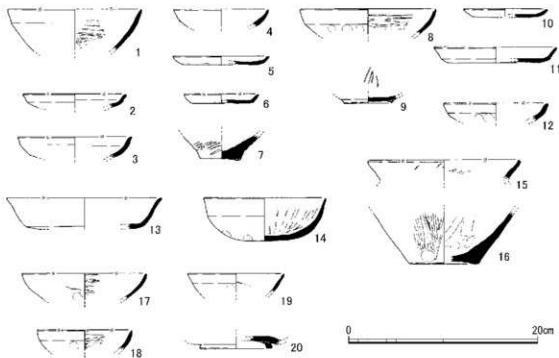
鳥畑80(第13図2~7) 2は瓦器皿である。口縁部がやや強く外反する。3・4は土師器杯であろう。いずれも底部を欠損するが、やや丸底気味を呈すると考えられる。3は口縁端部がやや内傾する面をもつ。5・6は土師器皿である。いずれも平底である。5は口縁端部に面をもつ。7は弥生土器甕の底部である。弥生時代後期のものであるが、下層においてこの時期の遺構は確認していない。

溝SD02(第13図8~11) 8は楠葉型瓦器椀であろう。内面にミガキ、外面にユビオサエ、ナデの痕跡がみられる。9は瓦器椀の底部で、内面に螺旋状と判断される暗文を施す。10・11は土師器皿である。10は鳥畑80で出土した5・6に法量や形態に近いが、11はやや大型で、口縁部が底部から明瞭に立ち上がり、わずかに外反する。内面に暗文等は認められない。

素掘り溝SD09(第13図12) 12は土師器杯もしくは皿であろう。3~6や10・11にくらべて厚手である。口縁端部はわずかに内傾する。

溝SD47(第13図13) 須恵器杯Aである。法量は不明な点があるが、やや大型の杯と考えられる。奈良時代のものであろう。

(2) 下層出土遺物



第13図 M1区出土遺物実測図(1/4)

柱穴SP40(第13図14) 土師器杯である。ほぼ完形で出土した。内面に放射状暗文を認めることができる。形態や法量から飛鳥時代のものであろう。

溝SD37(第13図15・16) いずれも弥生土器である。15は堯の口縁部である。端部をわずかにつまみ上げて面をつくる。16は壺の底部である。底部外面がわずかに凹む。

(3) 遺物包含層出土遺物

個々の出土地点等については観察表を参照されたい。17～19は瓦器椀である。いずれも口縁部に沈線が認められず、内面にミガキを施すが、外面はユビオサエとナデで整形したままである。20は須恵器杯Bの底部である。(筒井崇史)

5. 平成27年度調査の成果

平成27年度に発掘調査を実施したL2・M2区。O地区は、一般国道24号の西側に位置し、府道内里城陽線を挟んだ両側に位置する。調査地周辺の現地表面の標高はおよそ14.5mである。調査面積は6,170㎡である。出土した遺物は整理箱にして27箱である。

1) L2区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

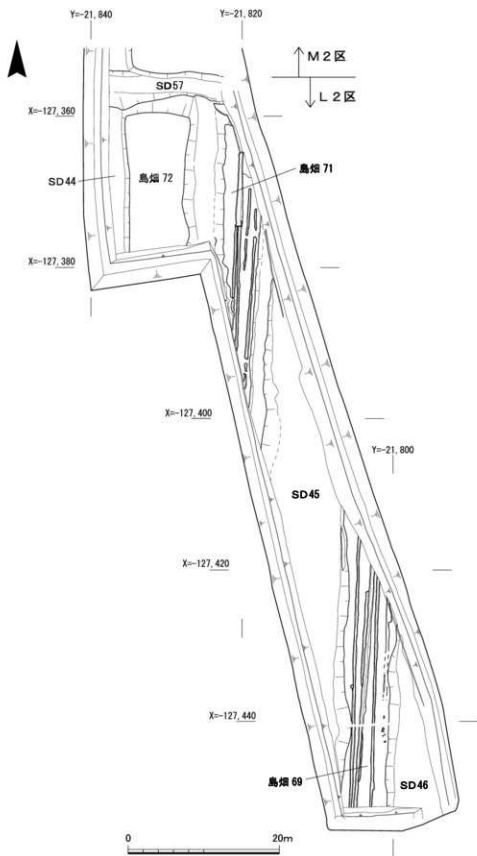
L2区は、平成26年度に実施したL1区の北東側に位置する。調査は、盛り土造営部分を対象として、全長100m、幅11.5～23.5mで、北に対して少し西に振った逆「L」字形の調査区を設定した。また、本調査区の北端は、後述するM2区と接するが、両者の間にはアゼ等を設けず、一体の調査区として調査を実施した。城陽市域における復原条里によると、L地区は三里五坪にあたり、L地区とM地区の境が、三里の二坪と三坪の境にあたるため、その坪境の状況を確認する必要があると考えたためである。

調査の結果、これまでの下水主遺跡の調査成果と同様、上層遺構として鳥畑3基、溝状遺構4条、坪境溝SD57などを検出した。鳥畑はこれまでの調査により、最初に造営された鳥畑から近世・近代に至るまでほぼ同一の地点で、盛り土を繰り返して造営していることが明らかになっている。調査では、原則として最初期に造営された鳥畑を対象として調査を実施した。また、下層遺構として、L1区の調査で確認した氾蓋流路の延長分を確認した。なお、L1区で確認した氾蓋流路は2条であったが、今回の調査により、ほぼ同じ地点で3条の氾蓋流路が重複していることが明らかになった。

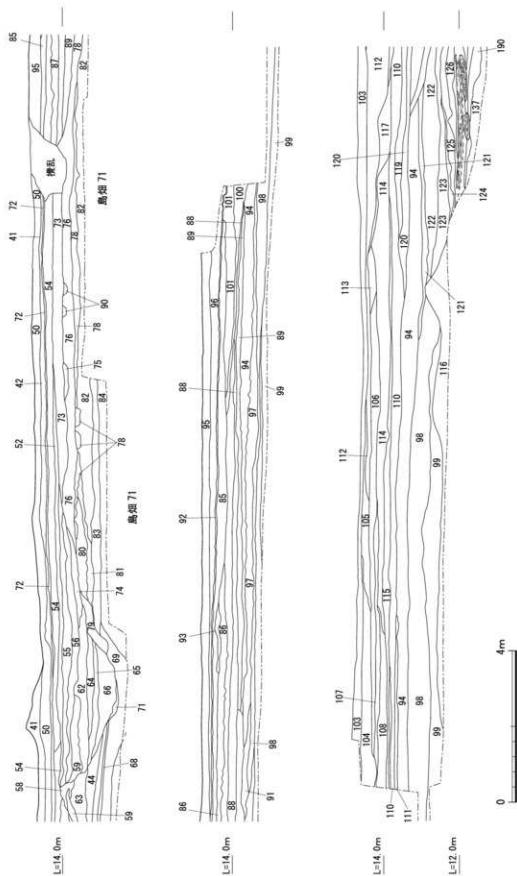
基本的な層序について、調査区の東壁土層断面図によって説明する(第15・16図)。

L2区南半部では、厚さ30cm前後の耕作土(暗オリーブ褐色土:103層)の下層に灰オリーブ色中粒砂(151層)や灰黄褐色土(158層)、黄褐色シルト(127層)、暗灰黄色シルト(112層)、灰黄色極細粒砂(161層)と灰色粘質土(162層)がほぼ水平に堆積している。これらの層を除去すると、鳥畑69と溝状遺構SD46を検出した。

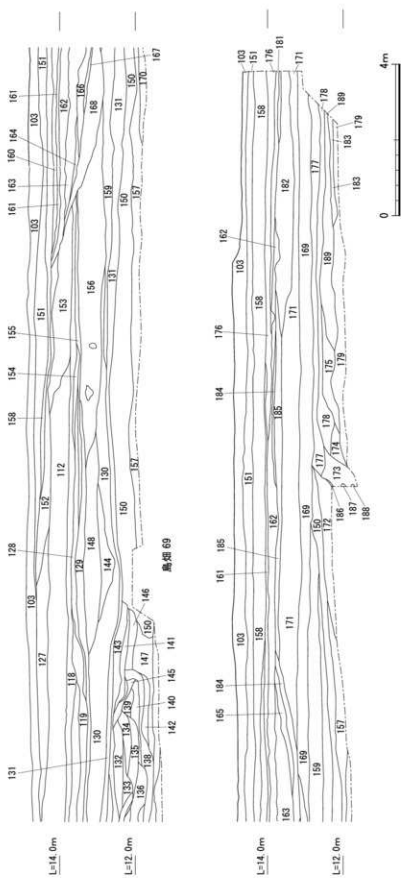
鳥畑69の上面の堆積土である暗オリーブ色粘質土(128層)やにぶい黄褐色粘質土(129層)からは、時期を断定するまでには至らない縄文土器の細片が数点出土した。また、129層の精査中に



第14図 L2区遺構配置図(S=1/500)



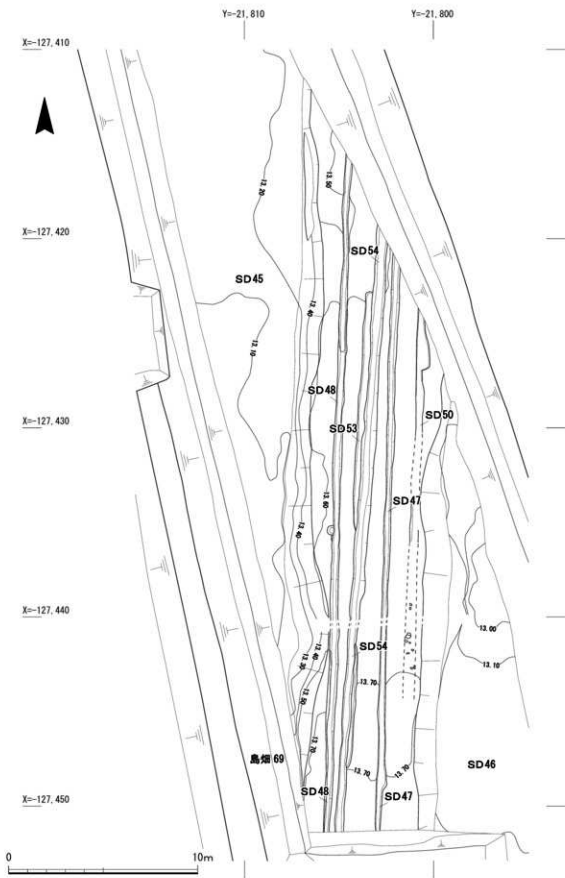
第15図 L2区北壁土層断面図1 (S=L/100)



第16図 L2区東壁土層断面図2 (S=L/100)

L 2 区東壁土層断面図

41. 暗緑黒灰色 (5G3/1) シルト
 42. 灰白色 (5Y4/2) 中粒砂
 43. 暗褐色 (10YR3/4) 土
 44. 黄褐色 (10YR5/6) シルト
 45. 青褐色 (10YR5/8) シルト
 46. 暗青灰色 (10B6/4/1) 粘土
 47. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘土
 48. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土
 49. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細粒砂
 50. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト
 51. 灰色 (10Y4/1) シルト
 52. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト
 53. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
 54. 灰色 (7.5Y4/1) シルト
 55. 灰黄褐色 (2.5Y6/2) シルト
 56. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
 57. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) ~ 黄褐色 (2.5Y5/6) シルト中粒砂混じる
 58. 灰色 (10Y5/1) シルト
 59. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
 60. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) シルト
 61. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
 62. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
 63. 青灰色 (5S5/1) 中粒砂
 64. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘質土
 65. 明青灰色 (5B4/1) シルト
 66. 黄褐色 (2.5Y5/6) 中粒砂
 67. 灰色 (N4/0) 細粒砂
 68. 灰オリーブ色 (2.5Y5/1) 粘土
 69. 灰黄褐色 (10YR5/3) 土
 70. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 土
 71. 有機物堆積層
 72. 灰黄色 (2.5Y7/2) 中粒砂
 73. 緑灰色 (7.5G6/1) 土
 74. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
 75. オリーブ色 (5Y5/4) 土
 76. 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト
 77. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 土
 78. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 土
 79. 暗オリーブ灰色 (2.5G4/1) 粘質土
 80. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
 81. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
 82. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土
 83. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土
 84. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) シルト
 85. オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土
 86. 淡黄色 (2.5Y7/2) 細粒砂
 87. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 細粒砂
 88. 灰色 (N5/0) 細粒砂
 89. 緑灰色 (7.5G2/1) シルト
 90. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト
 91. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
 92. 淡褐色 (5YR8/3) 中粒砂
 93. 灰褐色 (7.5YR5/2) シルト
 94. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
 95. 暗褐色 (10YR3/3) 土
 96. 灰黄褐色 (10YR4/3) 土
 97. 灰青色 (2.5Y4/1) 粘質土
 98. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
 99. 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト
 100. 暗黄褐色 (2.5Y4/2) 中粒砂
 101. オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土
 102. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土、灰色 (N4/0) 粘土、砂等がブロック状に混じり合う(盛土)
 103. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土
 104. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
 105. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト、浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂が混じる
 106. 暗黄褐色 (2.5Y4/2) 粘質土
 107. 淡褐色 (5YR8/3) 中粒砂
 108. オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土
 109. 灰色 (7.5Y6/1) 中粒砂
 110. 灰色 (N4/0) シルト
 111. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
 112. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) シルト
 113. 暗赤褐色 (5YR3/6) 粘質土
 114. 黄褐色 (10YR7/8) 中粒砂
 115. 灰褐色 (10YR6/1) 細粒砂
 116. オリーブ灰色 (5G5/1) シルト
 117. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土
 118. 灰黄褐色 (10YR5/3) 粘土
 119. 暗黄褐色 (2.5Y6/2) 土
 120. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘質土
 121. 緑灰色 (10G5/1) 粘質土
 122. 灰黄色 (2.5Y6/4) シルト
 123. 緑灰色 (10G5/1) シルト
 124. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒砂と明黄褐色 (2.5Y6/8) 中粒砂が縞状の層をなす
 125. 灰色 (N5/0) 中粒砂と浅黄色 (2.5Y7/5) 中粒砂が縞状に層をなす
 126. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中粒砂、炭化した有機物が灰色砂と層をなす
 127. 黄褐色 (10YR5/6) シルト
 128. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘質土
 129. 灰黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
 130. 緑灰色 (5G5/1) シルト (やや粘質)
 131. 青灰色 (5B6/1) 粘質土
 132. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂、木片、灰白色砂を含む
 133. 灰色 (N4/0) 中粒砂、灰白色砂を含む
 134. 暗灰色 (N3/0) 中粒砂、木片と灰白色砂を含む
 135. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂
 136. 灰色 (5Y6/1) 中粒砂、木片が集中する
 137. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂
 138. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂、灰黄褐色 (10YR5/2) 中粒砂、木片が縞状に層をなす
 139. 灰色 (N6/0) 中粒砂と灰白色 (2.5Y8/2) 中粒砂
 140. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂
 141. 灰色 (N6/0) 中粒砂
 142. 木片が集中、灰色 (5Y5/1) 中粒砂が混じる
 143. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂、小枝片が集中する
 144. 灰黄色 (2.5Y6/3) 細粒砂、木片混じる
 145. 緑灰色 (5G5/1) 細粒砂、木片が混じる
 146. オリーブ灰色 (5G5/1) 極細粒砂
 147. 灰色 (N4/0) 細粒砂、暗緑灰色 (7.5G4/1) 細粒砂の中に木片が混じる
 148. 褐色 (7.5YR6/1) シルト
 149. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
 150. オリーブ灰色 (2.5G5/1) シルト
 151. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 中粒砂
 152. オリーブ灰色 (10Y5/2) シルト
 153. オリーブ褐色 (2.5G5/1) シルト
 154. 灰黄褐色 (7.5YR6/3) 粘質土
 155. 黄褐色 (7.5Y5/3) 粘土
 156. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質土
 157. 灰色 (N4/0) 極細粒砂
 158. 灰黄褐色 (10YR6/2) 土
 159. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘質土
 160. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) 土
 161. 灰黄色 (2.5Y7/2) 極細粒砂
 162. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土
 163. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土
 164. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
 165. 灰青色 (2.5Y5/1) 粘質土
 166. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト
 167. 灰黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
 168. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土
 169. オリーブ色 (5Y6/6) シルト
 170. 黒褐色 (7.5YR2/2) 腐植質シルト
 171. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト
 172. 黄色 (5YR6) 細粒砂
 173. 青灰色 (5B6/5/1) 粘土
 174. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土
 175. 暗黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
 176. 灰色 (5Y5/1) 土、黄褐色 (2.5Y5/6) 中粒砂を含む
 177. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土
 178. 灰白色 (10Y5/1) 粘土
 179. 青灰色 (5B6/5/1) 粘土
 180. 暗青灰色 (5B6/4/1) 土、黄褐色 (2.5Y5/6) 中粒砂を含む
 181. オリーブ灰色 (2.5G5/1) 粘質土 (やや砂混じり)
 182. 暗黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質土
 183. 暗緑灰色 (10G4/1) シルト
 184. 緑灰色 (10G5/1) 土
 185. オリーブ灰色 (2.5G5/1) 粘質土 (やや砂混じり)
 186. 灰色 (10Y5/1) 細粒砂、灰白色 (10Y6/1) 細粒砂、縞状をなす(中間に有機層を含む)
 187. 灰色 (N5/0) 粘土
 188. 灰色 (7.5Y4/1) シルト、オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト、ブロック状をなす
 189. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土
 190. 明緑灰色 (7.5G7/1) シルト



第17図 L2区鳥畑69平面図(S=1/200)

風倒木痕と思われる不整形の落ち込みを数か所検出した(図版第14-1)。

L2区北半部の島畑71の基底面から厚さ30cm前後の緑灰色土(73層)が認められた。この73層からは遺物が出土しなかったが、近世以降の島畑造営に伴う盛り土と判断して73層を除去し、その下層で遺構の検出作業を進めた。(石井清司・橋本 稔)

(2)検出遺構

①上層遺構

L2区では、島畑69・71・72の3基の島畑を検出した(第14図)。いずれも平成26年度の第6次調査において確認している島畑である。

島畑69(S X 01)(第17図) 調査区の東端で検出した(D4-d2区ほか)。L1区の調査では島畑の南半部のごく一部を確認していたのみであるが、L2区の調査では、島畑本体のほか、両側の溝状遺構SD45・46を検出することができた。島畑69は南北方向の島畑で、規模は検出長46m、上面幅5.5~6.5m、基部幅約9.0m、高さ約0.6mを測る。平成26年度調査分も合わせると、検出長は47.1mである。島畑の斜面の傾斜角度は約15°である。島畑上面の標高はおよそ13.6mである。

調査区東壁の土層観察(第16図)によると、島畑69は、上層からオリープ灰色粘質土(181層)、暗灰黄色粘質土(182層)灰オリープ色シルト(171層)、オリープ色シルト(169層)などの堆積層を基盤とし、これらを掘り込んで形成されている(第16図)。

島畑の最上層に当たる181層の上面で南北方向の素掘り溝を5条検出した(SD47・48・50・53・54)。この面が島畑69の当初の造営面と判断した。

検出した素掘り溝は、検出長12.9~35.8m、幅0.3~0.75m、深さ0.1m前後である。断面形はSD48が「U」字形である他は台形を呈する。埋土は灰黄褐色粘土である。出土遺物としては土師器細片、須恵器片、瓦器片などがある。SD53はSD54と重複がありSD53をSD54が切る。SD50の南半部では、耕作に伴う鋤あるいは鍬によると思われる楕円形の掘り込みを2列、南北16m分を検出した。島畑上面で耕作が行われていた痕跡である可能性がある。溝や鋤(鍬)先痕跡の埋土からは土師器細片が出土した。

溝状遺構SD46(第17図) 島畑69の東側で検出した(D3-h25区ほか)。規模は検出長23.8m(新名神高速道路整備事業に伴うL3区の調査成果を加えると33.5mである)、検出幅6.8m、深さ0.5m前後である。溝底の標高はおよそ13.2mである。埋土は暗灰黄色粘質土(182層)である(第16図)。埋土からは土師器・陶器片が出土した。

溝状遺構SD45(第17図) 島畑69と島畑73の間で検出した(C4-t5区ほか)。規模は検出長70m、検出幅9.0m、深さ0.6m程度である。溝底の標高はおよそ13.4mである。SD45の埋土は、3層に分かれており、上層の灰オリープ色細粒砂(87層)、中層の灰色細粒砂(88層)、下層の緑灰色シルト層(89層)である(第15図)。下層の89層を除去するとベース層である灰黄褐色粘質土(94層)がある。ただし、南端部は、後述する縄文時代晩期の氾濫流路NR42の上面に達している。溝底からは土師器片、瓦器片、須恵器片、土師質羽釜、土師質鍋、陶器片、青磁片など13世紀後半以降の遺物が出土した。

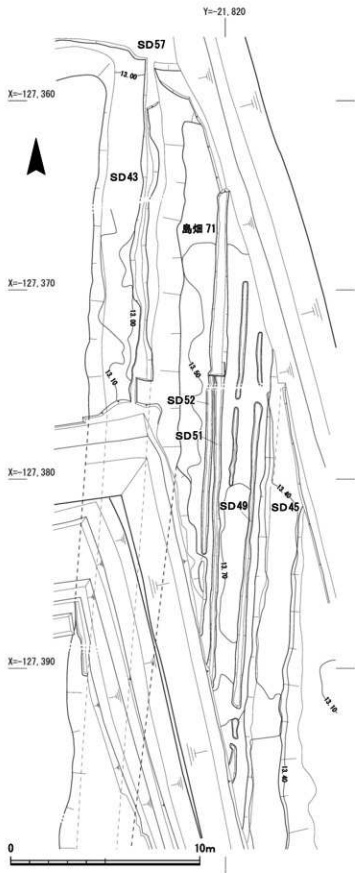
島畑71 (S X 16) (第18図)

島畑69と同様、平成26年度の調査で南半部を検出しており、今回の調査では、その北半部を検出した(C4-c6区ほか)。島畑上面の標高は13.5~13.7mである。

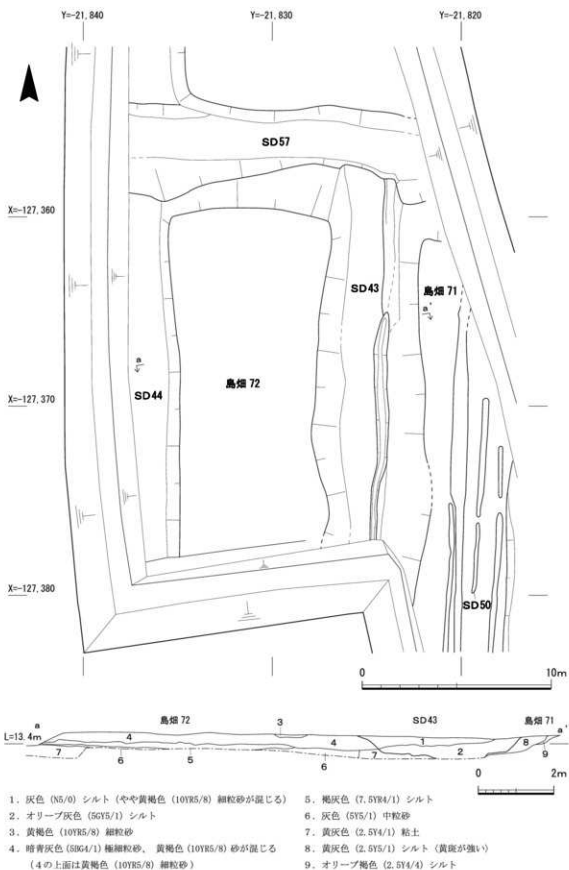
調査区東壁の土層観察によると、最も初期の島畑は灰オリブ色粘質土(82層)を基盤層とし、この上面に暗オリブ色土(78層)が認められ、この上面から素掘り溝が掘削されている。この上面に灰オリブ色土(76層)や緑灰色土(73層)などを盛り上げて、その度に素掘り溝などを掘削しているようすが看取できる(第15図)。詳細な時期は不明であるが、盛り土による耕作面の形成と、素掘り溝の掘削が繰り返行われていることが断面観察から確認することができた。

78層の上面で素掘り溝を4条検出した(SD49~52)。いずれも南北方向に延びる。検出した素掘り溝は、検出長10.7~26.0m、幅0.2~0.5m、深さ0.1m前後である。断面形はいずれも「U」字形である。埋土はいずれも灰オリブ色土である。出土遺物としては土師器、瓦器細片がある。SD51は、島畑北半部でSD52と重複するが、その前後関係は明らかにならなかった。

溝状遺構SD43(第18・19図)



第18図 L2区島畑71平面図(S=1/200)



第19図 L 2区鳥畑72平面図(S=1/200)・土層断面図(S=1/100)

島畑71と島畑72の間で検出した(C4-o6区ほか)。検出長22.6m、幅4.5～5.0m、深さ0.6mを測る。溝底の標高はおよそ13.0mである。溝の埋土は上層から灰色シルト(1層)、オリーブ灰色シルト(2層)、黄褐色細粒砂(3層)である(第19図)。遺物は土師器片、瓦質鍋片が出土した。

島畑72(S X O5)(第19図) 島畑69・71と同様、平成26年度の調査で南半部を検出しており、今回の調査では、その北半部を検出した(C4-o7区ほか)。平成26年度調査では、検出長60m、基底幅9.3mの島畑を確認したが、その北側は後世の攪乱等により、島畑の高まりを検出することができず、基底の一部を確認できたに過ぎなかった。今回の調査では、検出長20.0m、基底部幅9.0～9.5m、高さ0.3mの島畑を確認し、検出状況から平成26年度に検出した島畑72の延長部であると判断した。島畑上面の標高は13.6mである。同一の島畑とすると島畑72の総延長は102mを測り、一坪域を占める南北方向に長い島畑となる。

島畑72の中央部を東西方向に断ち割り、断面観察を行った結果、島畑71の基盤層である黄灰色粘土(7層)が東から西に向かって傾斜し、その上層に灰色中粒砂(6層)、褐灰色シルト(5層)、暗青灰色極細粒砂(4層)が堆積した層を基盤にして島畑が造営されていることを確認した。以上のような極粗粒砂や中粒砂の堆積状況から、島畑72は島畑71よりも軟弱な地盤を基盤として造営されたと考えられる。こうした軟弱な地盤が形成された詳しい経緯は不明であるが、下層で縄文時代晩期の氾濫水路が形成されていることから、島畑造営以前にこの地点が洪水によって削り取られた可能性も考えられる。

島畑72の上面で耕作に伴う遺構等の検出に努めたが、検出することはできなかった。なお、精査中に土師器片、須恵器片、瓦器片、瓦質鍋片、陶器碗片、陶器片などが出土した。

溝状遺構 S D 44(第19図) 島畑72の西側で検出した(C4-p10区ほか)。溝状遺構の西半部は農業用水路があるため検出できなかった。規模は検出長21m、検出幅20m、深さ0.2m前後を測る。溝底の標高はおよそ13.4mである。断面形は台形を呈する。埋土は上層が黄灰色シルト、下層が暗灰色シルトである。埋土から土師器片、陶器片が出土した。S D 44の北端は後述する坪境溝 S D 57と合流する。

坪境溝 S D 57(第19図) L 2 地区の島畑71・72とM 2 区の島畑73の間で検出した(C4-m6区ほか)東西方向の溝である。調査区としてはL 地区とM 地区の境にあたる。規模は検出長16.1m、幅7.2m、深さ1.0m前後を測る。溝底の標高はおよそ12.5mである。断面形は「U」字形を呈する。溝の埋土は大きく8層に分かれる(第15図)。最下層の灰色細粒砂(66層)、黄褐色中粒砂(65層)、明青灰色シルト(64層)を1つの単位として、河道あるいは洪水に伴う堆積が認められる。溝底には木質等の有機物の堆積が認められた(71層)。中層として青灰色中粒砂(62層)などがあり、水の流れの痕跡を示している。64～66層の上層には灰黄色シルト(59層)、暗灰黄色シルト(56層)、灰オリーブ色シルト(55層)である。その堆積状況から、人為的に短期間で埋められた可能性がある。埋土内からは土師器皿細片、須恵器鉢、瓦質火舎片が出土した。溝底の標高は、L 2・M 2 区では最も低い標高であることから、坪境に設けられた水路と考えられる。

また、S D 57の性格や島畑における耕作の状況を確認するために植物珪酸体分析を行った。試料

はS D57の埋土ならびM 2区の鳥畑73のを構成する堆積土から採取した。その結果、鳥畑73の各層でイネ属の珪酸体が大量に確認され、堆積層の土壌の状況と合わせて水田耕作が行われていた可能性が指摘できる。これらイネ属に次いでコムギ連の量があることからイネとムギの栽培が行われていた可能性も考えられる。さらに、S D57採取の試料においても量的には少ないもののイネ属の珪酸体を確認することができことから、調査地周辺で、水田耕作が行われていた可能性が指摘できる。(石井清司)

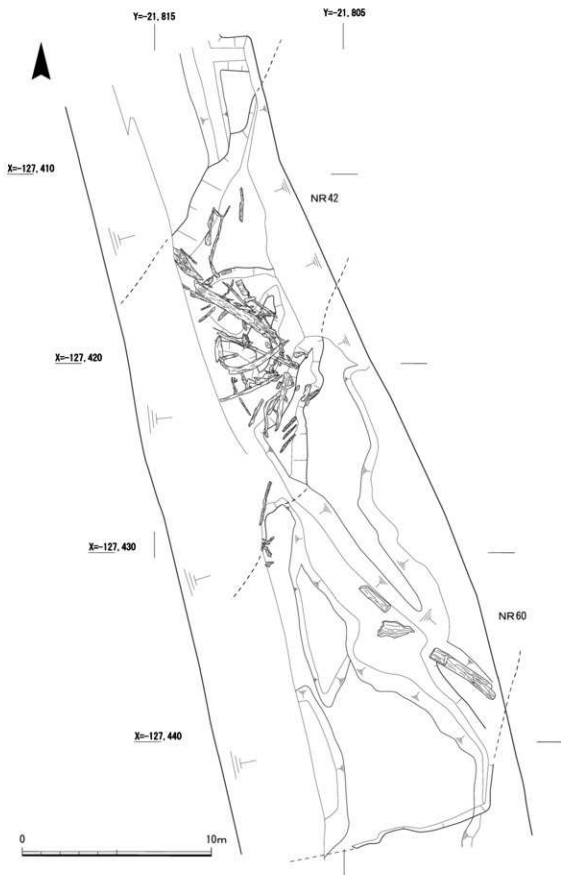
②下層遺構

L 2区は、L 1区で検出した縄文時代晩期の氾濫流路の東側延長部に当たることから、その検出を目的に調査を進めた。

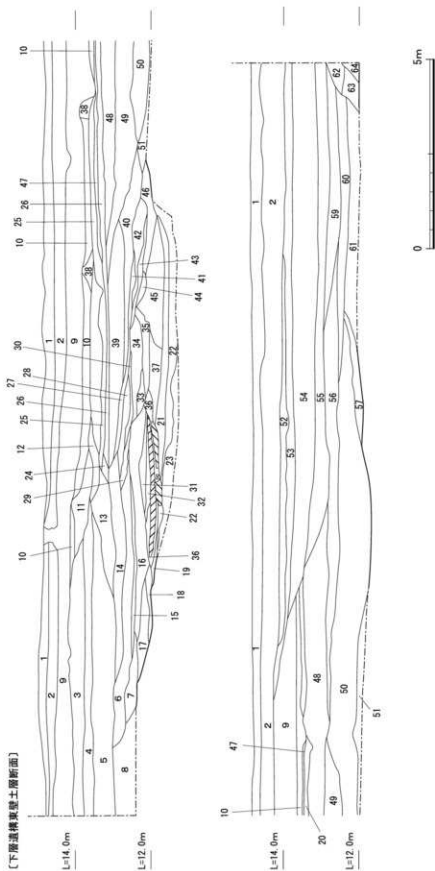
氾濫流路N R38(第21図) L 1区で検出した流路の延長部である。後述するN R42との識別が困難で、明確な遺構の輪郭を確認することはできなかったが、調査区東壁の土層断面の観察の結果、認識することができた。土層断面よれば、上面幅6m程度、深さ1.4m前後を測る。調査区中央では標高13.1mでN R38の肩を検出し、流路底の標高は12.0mを測る。ただ、埋土が中粒砂で、かつN R38の埋没後に地震動による堆積土の攪拌と判断される部分があるため、埋土の分層が困難な所もある。調査区東壁の土層観察(第21図)によると、埋土は上層より浅黄色中粒砂(28層)、灰色中粒砂(29層)、灰白色中粒砂(30層)が堆積している。下層で暗灰色中粒砂(34層)、灰色中粒砂(33層)、灰色中粒砂(35層)が堆積している。砂の堆積状況から、南から北へと流れていたと考えられる。部分的に洪水による再浸食が繰り返されたと判断される。34・35層には木片や植物遺体が含まれていたが土器は出土しなかった。木片での放射性炭素年代測定では2,290年±30yrBPの結果を得た(付載参照)。ただし、平成26年度に調査を実施したL 1区のN R38出土の晩期の縄文土器の推定年代との差が大きいことから、その評価については慎重に検討する必要がある。

氾濫流路N R42(第20図) N R38の下層で検出した(D4-b3区ほか)。流路の北肩の検出面の標高13.0m前後で、後述するN R60と重複すると考えられる。南肩は鳥畑に伴う溝状遺構S D46によって削平されているため、検出面の標高は12.6m前後である。N R42は平成26年度のL 1区の調査で検出したもので、その平面形は大きく湾曲して「U」字状を呈し、蛇行していると考えられた。平成27年度の調査ではその北東延長部分を検出した。流路はおおむね北東に向かって延びる。検出長8.5m、幅10.0m前後、深さ1.8m前後を測る。砂粒の観察から水は南西から北東方向に流れていたと考えられる。

流路は順次、水平に堆積しており、中粒砂・シルト・粘質土を主体とし、一部極粗粒砂が混じる。このような堆積状況は、間欠的に発生する洪水による浸食と充填を繰り返しながら堆積が進行した状況を示している。これらの堆積層から試料を採取し、含有される微細な遺物についての分析を行った。その結果、多量の木材化石や植物遺体が流路底部から下半部にかけて堆積していた。木材化石にはクリ(年輪数10~77)・イチイガシ(年輪数30・36)、ムクロジ(年輪数64)などの大木を含んでおり、流路に対して平行あるいは直交するように残っている。これらの大木の周囲



第20図 L2区下層遺構平面図(S=1/200)



第21図 L 2区北瀬流路 N R 60号土層断面 1 (S=L/100)

氾蓋流路 東壁

1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土
2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂
3. 黄褐色 (10YR7/8) 中粒砂 (洪水層)
4. 灰色 (N4/) シルト
5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
6. にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト
7. 緑灰色 (10GY5/1) シルト
8. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
9. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト
10. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土
11. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土
12. 明緑灰色 (5GY7/1) 粘質土
13. 青灰色 (10BG6/1) 粘土
14. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト
15. 明緑灰色 (10GY7/1) シルト
16. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂 (木片・灰白砂を含む)
17. 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂とオリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中粒砂の互層 (水平堆積)
18. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中粒砂と灰白色 (N7/) 細粒砂の互層 (水平堆積)
19. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂
20. 炭化した有機物であるオリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中粒砂に灰色 (N5/) 砂が縞状に層をなす
21. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂に明黄褐色 (2.5Y7/6) 中粒砂が混ざる
22. 明緑灰色 (7.5GY7/1) シルト
23. 明緑灰色 (5GY7/1) 極細粒砂
24. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土
25. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘質土
26. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
27. 緑灰色 (10GY5/1) シルト
28. 浅黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂
29. 灰色 (N4/) 中粒砂
30. 灰白色 (N8/) 中粒砂
31. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中粒砂と灰色 (N5/) が縞状に層をなす
32. 浅黄色 (2.5Y7/3) と灰色 (N5/) 中粒砂が縞状に層をなす
33. 灰色 (N6/) 中粒砂
34. 暗灰色 (N3/) 中粒砂 (木片と灰白色 (5Y8/1) 砂を含む)
35. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂にオリーブ黒色 (7.5Y3/1) を多く含む
36. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂にオリーブ黒色 (7.5Y3/1) を少量含む
37. 緑灰色 (10G5/1) 中粒砂 木片が縞状に層をなす
38. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土
39. 緑灰色 (5G5/1) シルト やや粘質
40. 青灰色 (5BG6/1) 粘質土
41. 緑灰色 (10GY5/1) シルト
42. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂 小枝片が集中
43. 灰色 (N6/) 中粒砂
44. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂
45. 灰色 (N4/) 細粒砂 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂が縞状となる、木片を多く含む
46. オリーブ灰色 (5GY5/1) 極細粒砂
47. にぶい褐色 (7.5YR6/3) 粘質土
48. 灰褐色 (7.5YR6/1) 土
49. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト 藁等の植物根あり
50. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト やや粘質
51. 灰色 (N4/) 極細粒砂
52. 灰黄褐色 (10YR6/2) 土
53. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 土
54. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土
55. 灰色黄 (2.5Y6/2) 粘質土
56. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
57. 暗青灰色 (5B4/1) 細粒砂 植物遺体が縞状に堆積
58. 淡黄色 (2.5Y8/4) 砂礫
59. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細粒砂
60. 暗青灰色 (5B4/1) 細粒砂 植物遺体が縞状に堆積
61. 灰色 (7.5Y5/1) 粘土
62. 明緑灰色 (5G4/1) 粘質土
63. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土

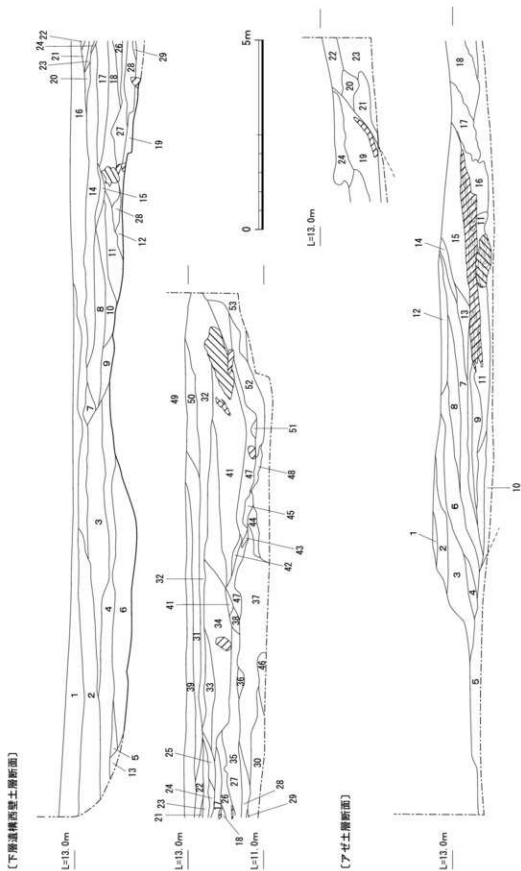
には小木・小枝が集まっていた。植物遺体にはカエナ属・トチノキ(?)・イチイガシ・ツツジ科の種実、草本などがあり、河川水や土砂等の流入がある不安定な環境下にあり、堆積速度も早かった可能性が高い。また、植物遺体や木材化石が堆積した後は、流水域があった状況を示している。

L1区で検出したNR42では縄文時代後期から晩期の土器が300点以上出土しているが、L2区では縄文時代晩期の深鉢(第23図24)と器種不明の縄文土器の細片が数点出土したのみである。

氾蓋流路NR60(第20図) NR42の下層で検出した氾蓋流路で、平成26年度の調査では未確認であった。北層はNR42と重複し、南層はNR42よりも広く、検出幅は約33mである。南層の検出面のおよそ標高12.3mである。調査区の幅が狭く安全に掘削できないため、NR60の最深部は完掘には至っていない。NR42と同様、堆積層に含まれる微細遺物の分析を行った結果、木材化石や植物遺体が出土した。

NR60を横断するように設定した畦の土層断面(第22図下半)観察では、溝の斜面に平行して南から北に向かって黒色粘質土と灰色中粒砂の互層(17層)、灰色細粒砂と灰白色細粒砂の互層(18層)が堆積した下層の流路が認められた。その上層に水平気味に堆積した灰白色極細粒砂(15層)、灰色細粒砂(13層)、灰色極細粒砂(14層)などの砂粒層が堆積している。

NR60では土器が出土しなかったため、NR60の時期を決定するまでには至らなかった。し



第22図 L2区氾濫流路N R601ほか土層断面図2 (S=L/100)

氾濫流路 西壁

1. ぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土
(藁等の植物根あり)
2. オリーブ灰色 (2.5Y3/1) シルト
3. 灰色 (N4/) 極細粒砂
4. 暗灰色 (10B4/1) シルト
5. 暗緑灰色 (5G4/1) 細粒砂
(植物遺体が縞状に堆積)
6. 緑灰色 (10GY3/1) シルト
7. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂
(木片・灰白色砂を含む)
8. 淡黄色 (2.5Y7/3) 中粒砂とオリーブ黒色 (7.5Y3/1) 中粒砂の互層
9. 暗灰色 (N3/) 中粒砂
(木片と灰白色砂を含む)
10. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂と緑灰色 (10GY5/1) 中粒砂の互層
11. 灰色 (5Y5/1) 中粒砂
12. 灰色 (10Y1/4) 細粒砂と黒色 (7.5Y1/2) 粘質土の互層
13. 明緑色 (10GY7/1) シルト
14. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂
(木片・灰白色砂を含む)
15. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
16. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂
(木片・灰白色砂を含む)
17. 緑灰色 (10GY5/1) 中粒砂
(木片が縞状に層をなす)
18. 青灰色 (10B6/1) シルト
19. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト
20. 緑灰色 (10GY5/1) シルト
21. 緑灰色 (5G5/1) シルト (やや粘質)
22. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細粒砂
(小枝片が集中)
23. 灰色 (N6/) 中粒砂
24. オリーブ灰色 (5GY5/1) 極細粒砂
25. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 中粒砂
26. 灰色 (N4/) 細粒砂と暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂が縞状に堆積
(木片を多く含む)
27. 明青灰色 (10BG7/1) 細粒砂と暗赤褐色 (5YR3/2) 細粒砂が縞状に堆積
28. 明緑灰色 (10G7/1) 細粒砂
29. 明緑灰色 (10G7/1) 細粒砂と黒褐色 (10YR3/2) 細粒砂の互層
30. 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト
31. オリーブ灰色 (5GY5/1) 極細粒砂
32. 灰白色 (5Y8/2) 細粒砂
(木片を多量に含む)
33. 青灰色 (5B6/1) 細粒砂
(木片を多量に含む)
34. 灰白色 (10Y5/1) 中粒砂
35. 黒色 (7.5Y1/2) 粘質土と灰色 (10Y1/6) 中粒砂が互層で堆積
36. 灰色 (10Y1/5) 細粒砂と灰白色 (10Y1/5) 細粒砂と灰白色 (10Y7/2) 細粒砂が互層で堆積
37. 灰色 (10Y1/4) 粘質土と黒色 (7.5Y1/2) 粘質土が互層で堆積
38. 暗灰色 (N3/) 粘質土
39. 灰色 (7.5Y1/5) シルトにオリーブ黒色 (10Y1/3) がブロック状に堆積
40. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂に灰色 (10Y1/5) 細粒砂が縞状に入る
41. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土
42. 淡黄色 (2.5Y8/4) シルト
43. 灰白色 (10B5/7) シルト、粘堆をおびる 氾濫流路①の堆積土
44. 緑灰色 (10G6/1) 中粒砂
45. 灰白色 (5Y8/2) 粗粒砂
46. 灰黄褐色 (5YR5/2) 細粒砂、灰白色 (7.5Y8/2) 粗粒砂、明青灰色 (10BG4/1) 細粒砂が拡散された状態
47. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中粒砂、植物遺体と明緑灰色 (7.5GY7/1) 細粒砂が縞状に堆積
48. 青灰色 (7.5Y8/2) 粗粒砂
49. 灰白色 (7.5Y8/2) 粗粒砂
50. 明青灰色 (10BG7/1) 粗粒砂
51. 明青灰色 (5B6/1) シルト
52. 青灰色 (5B6/1) シルト
53. 淡黄色 (2.5Y8/4) 中粒砂
54. ぶい黄色 (2.5YR6/4) シルト
55. 明青灰色 (5B7/1) 粗粒砂
56. 明青灰色 (5B7/1) 粗粒砂
57. 暗青灰色 (10BG4/1) シルト
(木片を含む)

氾濫流路 南北セクション

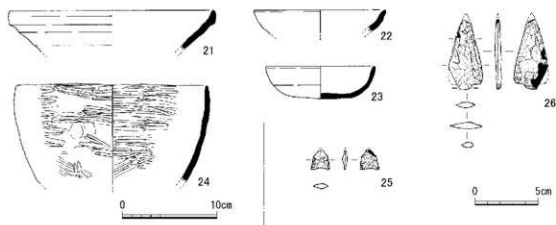
1. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト
(藁等の植物根あり)
2. オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト
やや粘質
3. 灰白色 (N7/1) 極細粒砂
4. 黄灰色 (2.5Y4/1) 中粒砂と灰白色 (2.5Y7/1) 中粒砂が混じりあった堆積土
5. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細粒砂
(木片・種子を多く含む、氾濫流路のさらに下層の堆積層か)
6. 灰色 (N8/) シルトに灰白色 (5Y8/1) 細粒砂が混じる
7. 灰色 (N5/) 細粒砂に淡黄色 (2.5YR3/) 細粒砂が部分的に縞状をなす
8. 灰色 (N8/) シルトに淡黄色 (Y8/4) 細粒砂が混ざる
9. 灰白色 (5Y7/1) 細粒砂にオリーブ黒色 (7.5Y3/2) 細粒砂が縞状に堆積
10. オリーブ灰色 (5GY5/1) 中粒砂
11. 黒色 (7.5YR2/1) 中粒砂と灰褐色 (2.5Y6/2) 中粒砂が混ざった状態で堆積
12. 灰色 (N4/) シルト
13. 灰色 (N6/) 細粒砂に淡黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂が部分的に縞状に堆積
14. 灰色 (N7/) 極細粒砂
15. 灰白色 (N7/)、暗赤灰色 (10R4/1) 極細粒砂が縞状に堆積
16. 灰色 (10Y5/1) 中粒砂
17. 黒色 (7.5Y1/2) 粘質土と灰色 (10Y1/6) 中粒砂が互層で堆積
18. 灰色 (10Y1/5) 細粒砂と灰白色 (10Y7/2) 細粒砂が互層で堆積
19. 灰色 (10Y1/4) 粘質土と黒色 (7.5Y1/2) 粘質土が互層で堆積
20. 暗灰色 (N3/) 粘質土
21. 灰色 (7.5Y1/5) シルトにオリーブ黒色 (10Y1/3) がブロック状に堆積
22. 明黄褐色 (10YR6/6) 中粒砂に灰色 (10Y1/5) 細粒砂が縞状に入る
23. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土
24. 淡黄色 (2.5Y8/4) シルト

かし、N R42の堆積層の可能性もあるオリーブ灰色極細粒砂(第21図46層)の植物遺体(葉)の放射性炭素年代測定では2,730年±30yr B Pを、灰黄褐色粘質土(63層)の木片の放射性炭素年代測定では3,680年±30yr B Pの結果を得ており、およそ縄文時代後期から晩期の850年ほどの間にN R 60が洪水などによって埋没していった可能性が高い。

(石井清司)

(3) 出土遺物

L 2区での出土遺物は少ない。図示できたのは土師器、縄文土器、石器など6点に過ぎない。ほかに高畑の精査時や素掘り溝の掘削時などに土師器や須恵器、瓦器などの細片が出土している。



第23図 L2区出土遺物実測図(1/4・1/3)

坪境溝SD57(第23図21・22) 21は須恵器鉢である。いわゆる東播系と呼ぶ鉢で、中世前半(12世紀代)のものであろう。22は陶器片である。16世紀頃の遺物で混入と考えられる。

汜濫流路NR42(第23図24) 24は縄文時代晩期の深鉢である。口縁端部は水平とならず、わずかに山形となる。内外面とも緻密にミガキを施す。胎土の砂粒が少なく精良であることから精製土器である。

遺物包含層(第23図23・25・26) 23は土師器杯である。D4-m1区の黄褐色粘土層から出土した。内面に1段の放射状暗文を施す。近接して坪境溝SD57や島畑71・72などがあるが、器形等からM1区柱穴SP40出土の土師器碗と同じく飛鳥時代のものであろう。25・26は石器である。25は無茎の石鎌である。D4-j2区の灰オリーブ色粘土層から出土した。先端の一部を欠損する。26は有茎の石槍である。D4-g1区の灰オリーブ色粘土層から出土した先端と側縁の一部を欠損する。石器の法量等は観察表に示した。

(筒井崇史)

2) M2区の調査

(1) 調査区の概要と基本的な層序

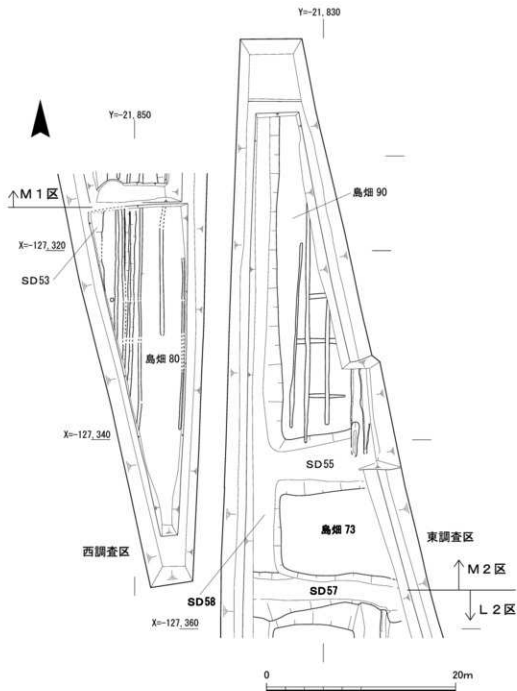
M2区は、平成26年度に発掘調査を実施したM1区の南東側に設けた調査区である(第24図)。先述のように、L2地区と隣接しており、両調査区の間にはアゼ等を残さず、一体の調査区として発掘調査を実施した。M2区は全長約60m、幅約28mのほぼ矩形の調査区である。ただし、農業用水路を保護する必要から調査区を東西の2つに分けて調査を実施した。以下の記述では、用水路の西側を西調査区、東側を東調査区と呼称する。

調査の結果、上層遺構として島畑3基と溝状遺構3条を検出した。また、下層遺構として弥生時代の土坑等を5基検出した。

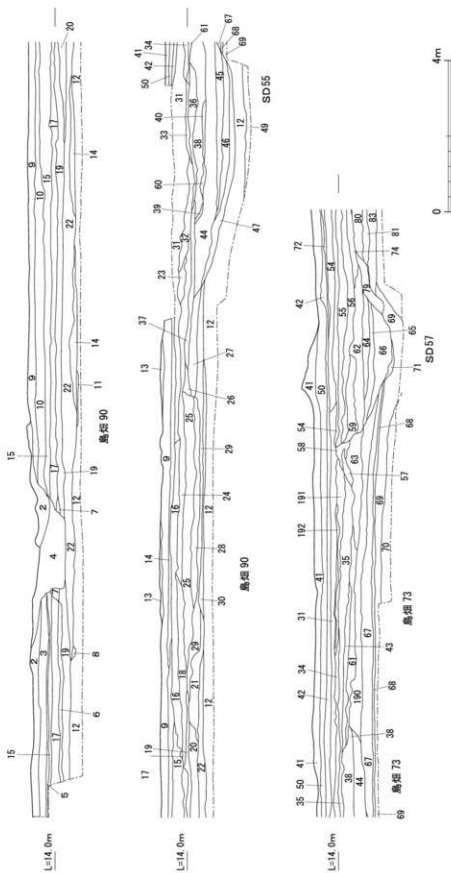
基本的な層序は、まず東調査区の南部では、上層から暗灰黄色シルト(18層)、褐色シルト(24層)、明オリーブ灰色シルト(37層)などが堆積しており、これらは島畑の基盤層である暗青灰色粘土(12層)の上部に盛り上げられた島畑73の盛り土になると考えられる。また、12層上面では弥生時代中期の土坑SK68・69を検出した。ただ、調査区西壁の土層を図示していないが、西壁には暗灰

黄色中粒砂(14層)など、洪水に起因すると思われる砂層の堆積が断続的に存在していることから、L2区と同様に、たびたび洪水に見舞われたと考えられる。

一方、東調査区の北部では、耕作土として黒褐色細粒砂(2層)や暗褐色シルト(9層)が、また、床土としてオリーブ褐色中粒砂(3層)やにぶい黄褐色シルト(10層)などが確認できる。その下層には上層から灰色シルト(17層)、暗灰黄色シルト(18層)、オリーブ灰色シルト(19層)など、鳥畑の盛り土と思われる堆積層が確認できる。その下層には鳥畑の基盤層と考えられる暗青灰色粘土層(12層)や暗オリーブ灰色粘土(22層)を整形して鳥畑としている。



第24図 M2区遺構配置図(S=1/400)



第25図 M2区東壁土層断面図 (S=L/100)

M2区東壁土層断面図

- | | | |
|--|---|----------------------------|
| 2. 黒褐色 (2.5Y3/1) 細粒砂 | 29. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト | 57. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト |
| 3. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中粒砂 | 30. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 粘土 | 58. 灰色 (10Y5/1) シルト |
| 4. オリーブ黒色 (10Y3/2) 極細粒砂～シルト | 31. にぶい黄褐色 (10Y6/4) シルト | 59. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト |
| 5. 明黄褐色 (2.5Y6/8) 粗粒砂 | 32. 灰黄褐色 (10Y6/2) 極細粒砂 | 60. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト |
| 6. 灰色 (10Y4/1) 極細粒砂 | 33. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト | 61. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト |
| 7. 灰色 (10Y5/1) シルト | 34. 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト | 62. 青灰色 (5B5/1) 中粒砂 |
| 8. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土 | 35. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト | 63. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘質土 |
| 9. 暗褐色 (10Y3/4) シルト | 36. 明褐色 (7.5Y7/2) 極細粒砂 | 64. 明青色 (5B4/1) シルト |
| 10. にぶい黄褐色 (10Y4/3) シルトに黄褐色 (10Y5/6) 中粒砂が混じる | 37. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) シルト | 65. 黄褐色 (2.5Y5/6) 中粒砂 |
| 11. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト | 38. 青灰色 (10BG6/1) 極細粒砂～シルト | 66. 灰色 (N4/0) 細粒砂 |
| 12. 暗青灰色 (5B4/1) 粘土 | 39. 緑灰色 (7.5GY6/1) シルト | 67. 黄褐色 (2.5Y5/1) 粘土 |
| 13. オリーブ黒色 (5Y3/2) 土 | 40. 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 極細粒砂～シルト | 68. にぶい黄褐色 (10Y5/3) |
| 14. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中粒砂 | 41. 暗緑黒灰色 (5G3/1) シルト | 69. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) |
| 15. 褐灰色 (10Y5/1) シルト | 42. 灰白色 (5Y4/2) 中粒砂 | 70. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) シルト |
| 16. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト | 43. 暗褐色 (10Y3/4) 土 | 71. 有機物が堆積 |
| 17. 灰色 (5Y5/1) シルト | 44. 黄褐色 (10Y5/6) シルト | 72. 灰黄色 (2.5Y7/2) 中粒砂 |
| 18. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト | 45. 黄褐色 (10Y5/8) シルト | 73. 緑灰色 (7.5GY6/1) 土 |
| 19. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) シルト | 46. 暗青灰色 (10G4/1) 粘土 | 74. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト |
| 20. にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト | 47. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘土 | 75. オリーブ色 (5Y5/4) 土 |
| 21. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト | 48. 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土 | 76. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 土 |
| 22. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土 | 49. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 細粒砂 | 77. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) |
| 23. 灰黄褐色 (10Y3/2) シルト | 50. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト | 78. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) |
| 24. 褐色 (7.5YR4/3) シルト | 51. 灰色 (10Y4/1) シルト | 79. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 |
| 25. にぶい褐色 (7.5YR5/3) シルト | 52. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト | 80. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト |
| 26. 灰色 (5Y5/1) シルト | 53. 灰黄褐色 (10Y5/2) シルト | 81. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト |
| 27. にぶい黄褐色 (10Y6/4) シルト | 54. 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 82. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土 |
| 28. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト | 55. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト | 83. 暗緑灰色 (10G4/1) 粘土 |
| | 56. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト～黄褐色 (2.5Y5/6) 中粒砂混じる | 190. 灰色 (7.5Y5/1) シルト |
| | | 191. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト |
| | | 192. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト |

なお、M2区は城陽市史によると条里型地割の復原では三里八坪に相当し、L地区との境界が坪境となる。

(石井清司・橋本稔)

(2) 検出遺構

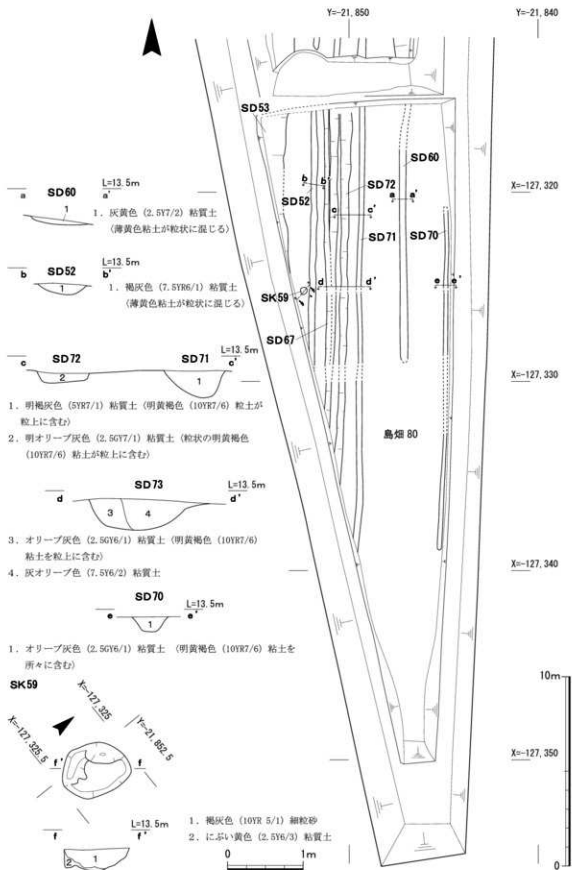
① 上層遺構

M2区西調査区では、平成26年度調査で検出した鳥畑80の南半部を検出した。また、東調査区では新たに南北方向の鳥畑90を検出するとともに、N地区の南端で検出した東西方向の鳥畑73の西半部を検出した。これらの鳥畑間では溝状遺構を検出した(第24図)。

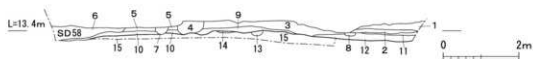
鳥畑80(SX07)(第26図) 西調査区の範囲とはほぼ重複して検出した(C4-e12区ほか)。南北方向の鳥畑で、今回の検出規模は検出長33.4m、上面検出幅8.4m、高さ0.3mである。後述するように、上層耕作面の標高はおおよそ13.4mである。西調査区は、南に向かって調査区の幅が狭くなるため、鳥畑80の南端および東西の基底部を確認することはできなかった。

鳥畑80では、調査区北壁や中央部の断ち割りなどの土層断面の観察の結果、盛り土を行って鳥畑の造営の繰り返ししており、少なくとも2面の耕作面を確認した。下層耕作面は上層耕作面を10～20cm下げて検出した(第27図)。

鳥畑80では、上層耕作面に伴う盛り土としてオリーブ黄色粘質土(第26図3層)、オリーブ灰色粘質土(5・10層)、灰黄色粘質土(9層)が認められる。下層耕作面は鳥畑の基盤層にあたり、浅



第26図 M2区鳥煙80平面図(1/200)・遺構断面図(1/50)



1. 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土
2. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土
3. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質土
(にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土が広く混じる)
4. 灰色 (7.5Y 4/1) 粘質土
(一部明黄褐色 (10YR6/6) が混じる (SD67埋土))
5. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土
6. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質土
7. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土 (SD52埋土)
8. 赤灰色 (2.5YR6/1) 粘質土 (SD60埋土)
9. 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土
(にぶい橙色 (2.5YR) 粘土が粒状に混じる)
10. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土
(にぶい橙色 (2.5YR) 粘土が粒状に混じる)
11. 灰色 (5Y5/1) 粘質土 (明黄褐色 (10YR6/6) 粘土が混じる)
12. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土
(にぶい橙色 (7.5YR7/4) 粘土が粒状に混じる)
13. 褐色 (7.5YR 5/1) 粘質土 (SD72埋土)
14. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土
(明黄褐色 (10YR7/6) 粘土を粒上を含む (SD72埋土))
15. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂 (鳥畑ベース層)

第27図 M2区鳥畑80土層断面図(1/100)

黄色極細粒砂(15層)を確認した。

上層耕作面に伴う素掘り溝には南北方向のものが3条ある(S D52・67・70)。検出した素掘り溝は、検出長18.6～39.8m、幅0.2～0.8m、深さ0.05～0.15mである。断面形はいずれも「U」字形である。埋土は灰オリーブ色粘質土や灰色粘質土である。

下層耕作面に伴う素掘り溝は南北方向のものが2条ある(S D71・72)。どちらも北壁での断面観察の結果、下層耕作面に伴うものと判断した。検出した素掘り溝は、検出長20.0～47.0m、幅0.4～0.6m、深さ0.1m前後である。断面形はいずれも「U」字形である。埋土は明オリーブ灰色粘質土や褐色粘質土である。

鳥畑上面や素掘り溝から、瓦器細片、白磁片、肥前陶器(唐津)片、瀬戸美濃系陶器片が少量出土している(第35図27・28)。

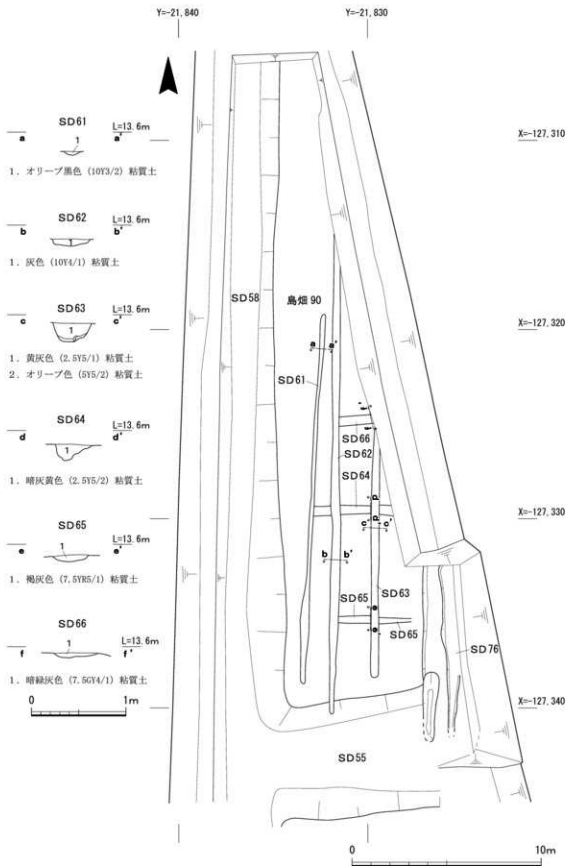
溝状遺構 S D53 (第26図) 調査区の北西部で部分的に検出した(C4-e14区ほか)。M1区で検出した溝状遺構 S D04 と同一の遺構と考えられる。検出範囲はごく一部にとどまり、全容は不明である。溝状遺構下面、鳥畑80直上の斜面では後述する弥生時代中期の土坑 S K51 を検出した。

(田原薬月・石井清司)

鳥畑90(S X54) (第28図) 東調査区の北半部で検出した(C4-b9区ほか)。南北方向の鳥畑で、調査区の東側を一部拡張して鳥畑の幅を確認した。規模は検出長35.4m、基部幅9.5m、上面幅7.1m、高さ0.4m前後である。鳥畑の北端と東半部の大半は調査区外となるため確認することができなかった。最初期の鳥畑の標高はおよそ13.6mである。基本層序の項で述べたように、断面観察によると、順次盛り土を行っていると考えられる。

鳥畑の上面で東西方向の素掘り溝3条(S D64～66)、南北方向の素掘り溝3条(S D61～63)を検出した。これらの素掘り溝は、遺構の切り合い関係から、東西方向の素掘り溝が先行し、その後、南北方向の素掘り溝が掘られている。

まず、東西方向の素掘り溝は、検出長2.8～4.1m、幅0.4～0.5m、深さ0.05～0.1m程度である。断面形はS D66が台形で、他の2条は「U」字形である。埋土はいずれも灰オリーブ色シルトで



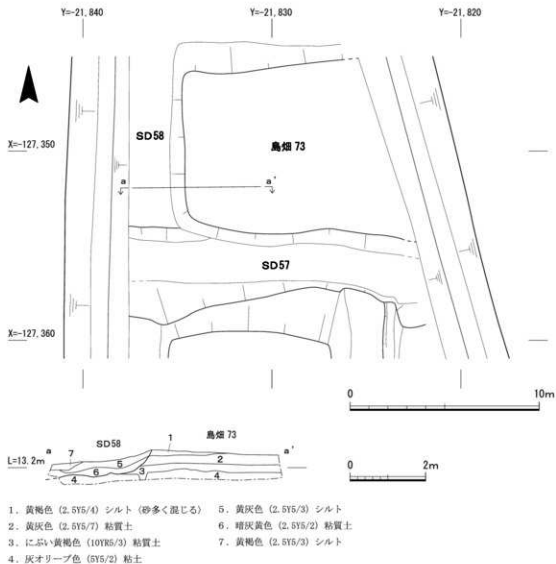
第28図 M2区鳥畑90平面図(1/200)・遺構断面図(1/40)

ある。出土遺物としては土師器細片がある。

次に、南北方向の素掘り溝は、検出長14.6～25.0m、幅0.3～0.4m、深さ0.05～0.2mである。断面形はいずれも「U」字形である。埋土はいずれも灰オリーブ色シルトである。出土遺物としては土師器細片がある。S D61は、北に対して東に7°程度の振れがある。S D62の南端は鳥畑の上面から斜面にかけて延びる。

溝状遺構 S D58 (第28・29図) 鳥畑73・90と鳥畑80の間で検出した(C4-b9区ほか)。西調査区と東調査区の間にあるため、遺構の全容は明らかにできていない。溝底の標高はおよそ13.2mである。検出長47.8m、検出幅2.4～3.0m、深さは0.6m前後を測る。埋土は上層から黄灰色シルト(第29図5層)、暗灰黄色粘質土シルト(6層)、暗灰色シルト(7層)である。埋土から土師器片、陶器片が出土した。

鳥畑73 (S X 56) (第28図) 東調査区の南部で検出した(C4-17区ほか)。東西方向の鳥畑で、平成26年度のN地区の調査で東半部を確認した鳥畑の西半部にあたる。規模は検出長12.7m、上



第29図 M2区鳥畑73平面図(1/200)・遺構断面図(1/100)

面幅8.9m、基部幅10.8m、高さ0.6m前後である。両調査区の成果を合わせると、鳥畑73の規模は検出長40m以上、上面幅9.0m前後、基部幅11.0m前後、高さ0.6m前後を測る。ただし、両調査区の間には未調査地が存在する。鳥畑上面の標高はおおよそ14.1mである。鳥畑上面では素掘り溝等の遺構を確認することはできなかった。

調査区東壁の土層観察(第25図)によると、湿地などにより堆積した暗緑灰色粘質土(63層)や灰色ないし灰黄色シルト(57・58層)が堆積した厚さ60cmの堆積層を50cm程度掘り穿れて、新たに暗灰黄色シルト(35層)や灰オリーブ色シルト(61層)、暗褐色土(43層)で埋めていることから、鳥畑の基盤層の土壤改良を行っていると考えられた。35層から14世紀の瀬戸焼の椀の細片が1点出土した。35層を対象に土壤に含まれている植物珪酸体の分析の結果、多量のイネ花粉が含まれていることが明らかになった。

この鳥畑の調査を終えた後、さらに下層での状況を確認するための精査を進めたところ、標高13.6mで新たに鳥畑の造営面を検出した。この鳥畑のベース面は灰色シルト(190層)の上面に形成されたもので、精査を繰り返したが素掘り溝は検出できなかった。

溝状遺構 S D 55 (第28図) 鳥畑73と鳥畑90の間で検出した(C4-k8区ほか)。検出長11.0m、幅6.0~7.0m、深さ0.6~0.7mである。溝底の標高は12.9mである。断面形は「U」字形を呈している。溝の埋土は4層に分かれ(第25図)、最上層は黄褐色シルト(44層)で、ほぼ水平に堆積している。その下層には黄褐色シルト(45層)と暗青灰色粘土(46層)が皿状に堆積している。最下層には厚さ0.2m程度の灰オリーブ色粘土(47層)が溝底に沿って堆積している。埋土からは土器細片が出土した。
(石井清司・橋本稔)

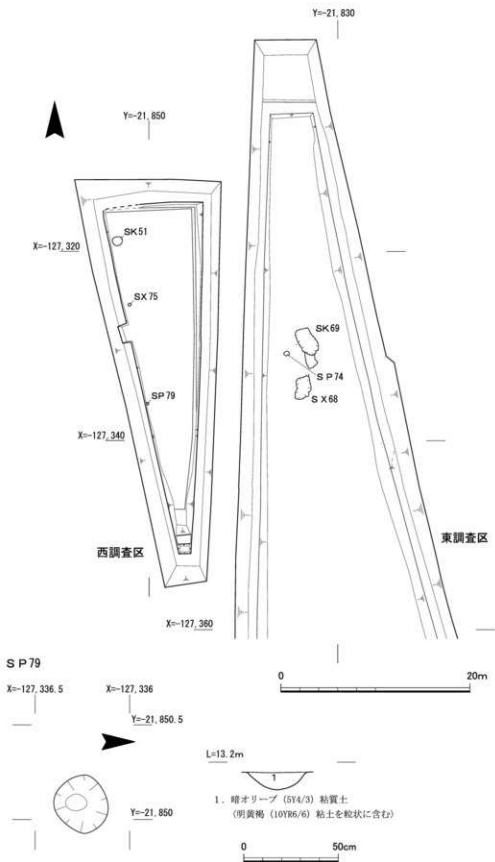
②下層遺構

弥生土器が出土する土坑やピットを5基検出した(第30図)。検出した遺構は、西調査区で土坑 S K 51・75・ピット S P 79、東調査区で土坑 S K 68・69である。これらの遺構は、いずれも鳥畑の基盤層である暗オリーブ灰色粘土(第25図22層)の上面で検出した。

土坑 S K 51 (第31図) 西調査区の北西部で検出した(C4-e14区)。平面形は楕円形状を呈し、長軸0.85m、短軸0.35m、深さ0.15mである。鳥畑80の西側斜面にあたるため、S K 51の西半部は溝状遺構 S D 53によって部分的に削平されている。弥生土器片が何層も重なり合って出土した。埋土は2層に分けられ、上層が灰オリーブ色粘質土、下層がオリーブ黄色粘質土で、炭化物や焼土が混じる。上層から弥生時代中期の土器が多量に出土した(第35図34~42)が、下層からは出土していない。

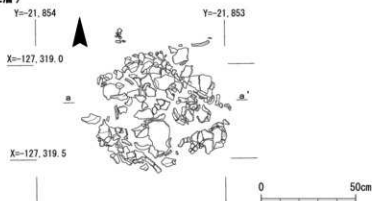
土坑 S K 68 (第32図) 東調査区の南西部で検出した(C4-i9区)。平面形は楕円形もしくはいびつな隅丸方形を呈し、長軸2.4m、短軸1.6m、深さ0.3mである。遺構検出面の標高は13.4m前後である。埋土は大きく3層に分かれ、上層は、炭・焼土が少量混じるオリーブ灰色粘質土である。中層は炭化物が混じる灰色粘質土である。下層はオリーブ黒色粘質土である。各層から弥生土器が多量に出土したほか、石楯や石籤なども出土した(第36図45~67・第38図92・93)。

土坑 S K 69 (第33図) 土坑 S K 68と同じく東調査区の南西部、S K 68の北約1mで検出した

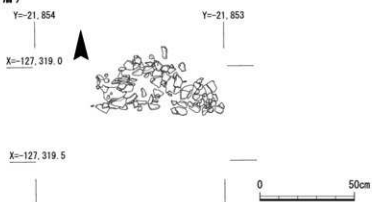


第30図 M2区下層遺構平面図(1/400)・ピットSP79実測図(1/20)

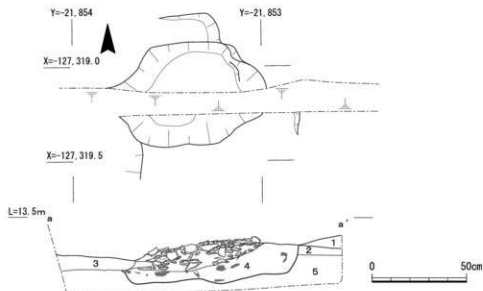
SK51 遺物出土状況（上層）



SK51 遺物出土状況（下層）



SK51 完掘状況



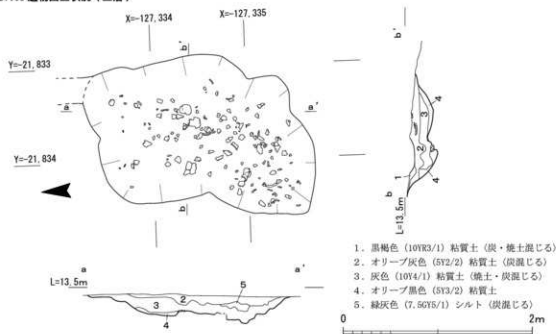
1. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土 (明褐黄色 (10YR6/6) 粘土を粒状に含む)
2. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 粘質土 (明褐黄色 (10YR6/6) 粘土を粒状に含む)
3. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土
4. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質土 (灰赤色 (2.5YR5/2) 粘土を部分的に含む、炭塵じる)
5. 浅黄色 (5Y7/3) 粘質土 (明褐黄色 (10YR6/6) 粘土を粒状に含む)

第31図 M2区土坑SK51実測図(1/20)

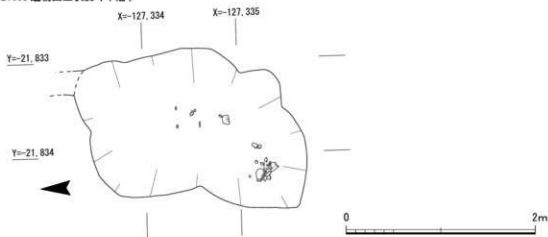
(C4-h9区)。遺構検出時に遺構の重複が認められなかったが、断面観察からは2基の土坑の重複が認められた。上層をSK 69 a、下層をSK 69 bと呼ぶ。SK 69 aは、主軸がほぼ南北で、推定長軸2.1m、短軸0.5mで、深さ0.05m程度である。埋土は灰色粘質土(1層)で、炭化物が少量混じる。SK 69 bは、SK 69 aの埋土である灰色粘質土を除去した段階で検出した。平面形は楕円形を呈する。主軸は北に対して約35度西に振る。長軸3.0m、短軸1.75m、深さ0.45mを測る。埋土は4層に分かれ、上層は灰色粘質土でやや炭化材が混じる。中層はオリーブ灰色粘質土でやや炭化材が混じる。下層は暗オリーブ色粘質土で、中層よりも炭化物が密に混じる。最下層は灰オリーブ色粘質土に炭化物が部分的に混じる。遺物は上層から最下層までの各層から弥生土器のほか、石器や骨片が出土した(第37図68～91・第38図94)。骨片は人骨とは断定できない。

土坑SK 75(第34図) 土坑SK 51の南約6mの位置で、島畑80の上面から溝状遺構SD 53に

SK68 遺物出土状況(上層)

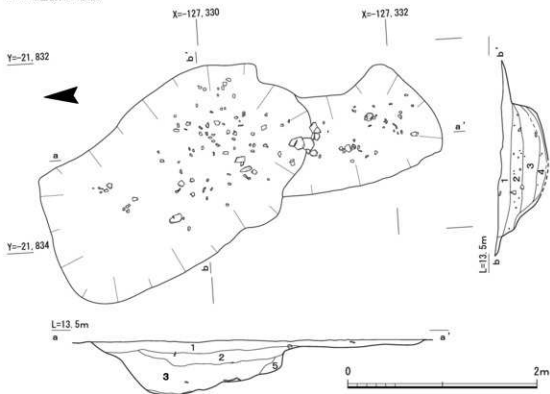


SK68 遺物出土状況(下層)



第32図 M2区土坑SK 68実測図(1/40)

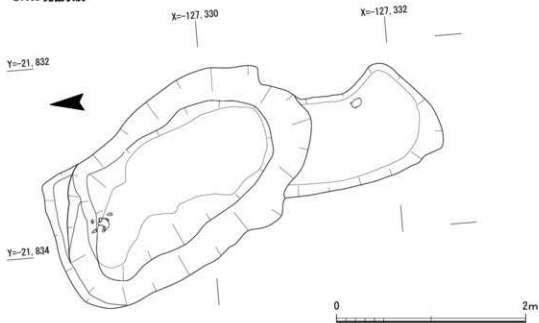
SK69 遺物出土状況



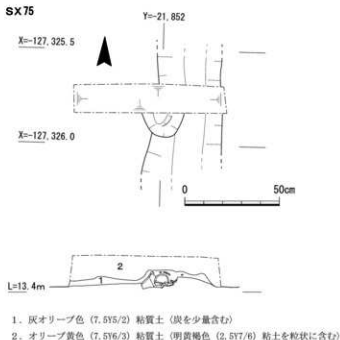
1. 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 (やや炭が混じる)
2. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土 (1より大きめの炭が混じる)

3. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 粘質土 (細い炭が混じる)
4. オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘質土 (1層目と同じ量の炭が混じる)
5. 炭の層

SK69 完掘状況

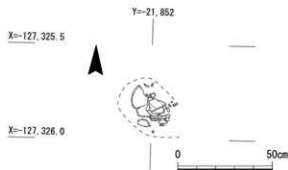


第33図 M2区土坑SK69実測図(1/40)



1. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土 (炭を少量含む)
2. オリーブ黄色 (7.5Y6/3) 粘質土 (明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土を粒状に含む)

SX75 遺物出土状況



第34図 M2区土坑SK75実測図(1/20)

が出土した。

①上層遺構出土遺物

鳥畑80 (第35図27・28) 27は白磁皿VI類の底部と考えられる。見込みには沈線で模様が施されている。高台は削り出しである。28は土師器皿である。鳥畑80の盛り土の掘削中に出土した。口縁部にヨコナデを施す。詳細な時期は明らかにできないが、中世のものであろう。

溝SD78 (第35図29) 29は非常に扁平な土師器皿である。

溝状遺構SD53 (第35図30) 30は土師器羽釜の鈎の破片である。全体の形状は不明であるが、球形ないし内傾気味の体部からはほぼ水平に長さ2.1cmほどの鈎が付くものである。中世前半(13世紀代か)のものであろう。

鳥畑90 (第35図31) 31は肥前陶器(唐津)椀の底部である。

遺物包含層 (第35図32・33) 32は鳥畑73で出土した弥生土器甕の底部である。摩滅するが外面にハケの痕跡を確認できる。33は鳥畑80で出土した弥生土器高杯の脚端部の破片である。脚端部

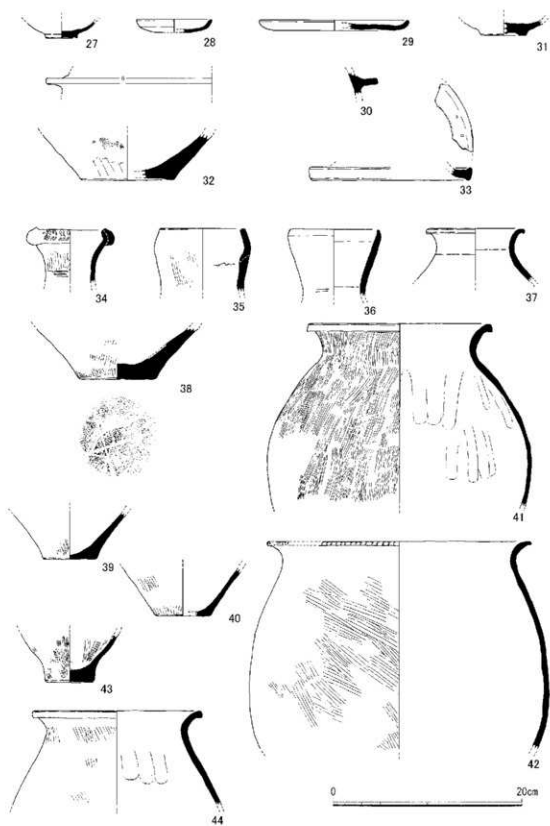
かけての斜面で検出した(C4-g13・14区)。平面形は不整形な円形を呈し、長軸0.3m、短軸0.2m、深さ0.1mである。弥生土器片が重なり合い、検出面に対して垂直な状態で出土した。弥生時代後期の甕などの破片がある(第35図43・44)。

ビットSP79 (第30図) 西調査区の南西部で検出した(C4-j13区)。平面形はややいびつな円形を呈し、径0.3m前後、深さ0.1mである。遺物は出土しなかった。SP79以外に柱穴状の遺構を周囲で確認しなかったため、建物を構成するような柱穴である可能性は低い。

(石井清司・田原葉月)

(3)出土遺物

M2区出土遺物の大半は下層遺構の土坑から出土した弥生土器である。ほかに石鏃が出土した。また、上層遺構である鳥畑や溝状遺構の検出時あるいは掘削時に肥前陶器(唐津)椀、陶器、瓦器、土師器皿など



第35図 M2区出土遺物実測図1(1/4)

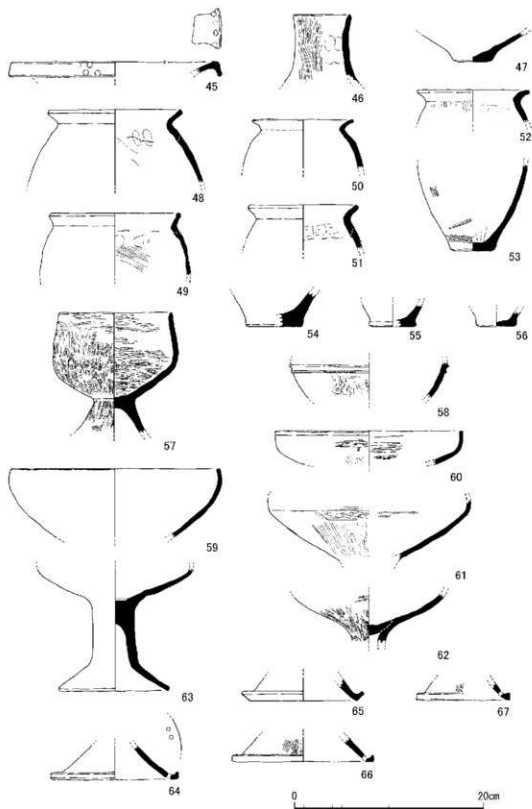
付近の上面に直径2mm程度の円形の刺突が認められるが、文様を意識したものでどうか不明である。どちらも、下層遺構に伴う遺物が混入したものであろう。(筒井崇史・田原葉月)

②下層遺構出土遺物

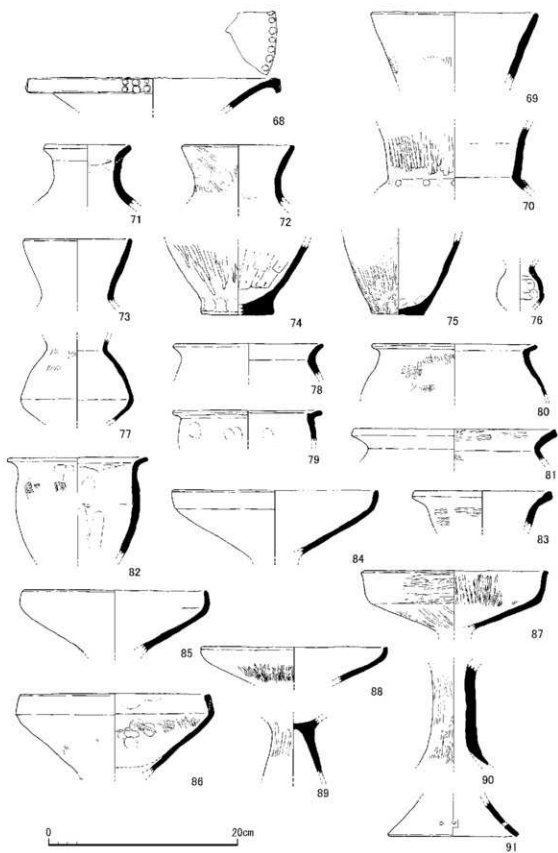
土坑 S K 51 (第35図34～42) 34～42は弥生土器である。34は細頸壺である。口縁部外面に上下2段の列点文を施す。35は細頸壺である。口縁部外面に2次焼成による器表面の剥離が認められる。36は細頸壺である。頸部が斜め上方にまっすぐに延び、口縁部がわずかに内傾する。37は広口壺である。摩滅が著しいが、頸部から肩部にかけて波状文を施す。38～40は甕または壺の底部である。いずれも平底から斜め上方に体部が延びる。外面にハケを施しており、ミガキを施すものは確認していない。38は大型品で、底部外面に「+」字状の線刻が認められる。39・40は小型品である。41は壺、42は甕である。どちらも体部下半以下を欠損するが、短めの口縁部が頸部から緩やかに外反し、肩部があまり張らない倒卵形を呈する。41の体部には、おおむね縦方向のハケを施すが、42の体部には斜め方向のハケを施し、口縁端部外面にキザミメを施す。図示した遺物はいずれも摩滅が著しく、調整の不明瞭なものが多い。いずれも弥生時代中期中葉～後葉のものであろう。

土坑 S K 75 (第35図43・44) 43・44は弥生土器である。43は甕あるいは鉢の底部と思われる。底部が高さ1.5cmほどの突出底となっており、体部が斜め上方に延びる。44は甕の口縁部から体部上半にかけての資料である。土坑 S K 51出土の41・42と同様の器形を呈するが、法量はやや小さい。全体に摩滅が著しい。いずれも弥生時代中期後半のものであろう。

土坑 S K 68 (第36図・第38図92・93) 45～67は弥生土器である。45は広口壺の口縁部である。小破片のため法量は推定値である。円形浮文を口縁部上面に1列、口縁部外面に上下2列ずつ配する。円形浮文の間隔は6～8mmである。46は細頸直口壺である。頸部から口縁端部に向かって緩やかに外反する。47は壺の底部と思われる。底部は1cmほど下方に突出気味を呈し、体部は大きく開きながら、上方へ延びていく。48～56は甕である。48～52は口縁部から体部上半にかけての資料で、口縁部の形状や調整等に違いがあるものの、先述の41・42や44と同じく、短めの口縁部が頸部から緩やかに外反、もしくは頸部が「く」字状に屈曲し、肩部があまり張らない倒卵形を呈するものである。口縁部の形状は、48・49が口縁端部をつまみ上げ気味に調整を加えて端面を作る。これに対して50～52は面をもちつつも、やや丸みを帯びた端面を作る。48～52はいずれも摩滅が著しく、内外面とも調整が不明瞭である。53は体部下半から底部にかけての資料である。法量や器形的には50～52の甕に対応すると思われるが、外面調整がミガキであるため、壺の可能性もある。54～56は底部である。いずれもやや突出気味の底部である。57は台付鉢である。やや内傾気味の口縁部もつ鉢部に脚部がつくものであるが、脚部の下半は欠損する。鉢部の内外面や脚部の外面には緻密にミガキを施す。58は鉢の体部の破片であろう。体部中位にキザミメを施した突帯が2条めぐる。59～67は高杯である。59～62は高杯杯部の資料である。いずれも杯口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、59は深手、60はやや浅めの杯部と考えられる。61・62も深手のものと考えられるが、口縁部を欠損する。59～62も摩滅するものが多いが、口縁部にヨコナ



第36図 M2区出土遺物実測図2(1/4)

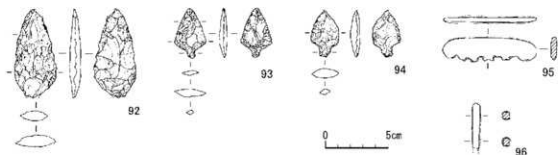


第37図 M2区出土遺物実測図3(1/4)

デ、それ以外の杯部の内外面にはやや緻密なミガキを施すのが基本と考えられる。62・63は杯部と脚部との接合部が遺存する。62は脚部上部が中空であることから、脚部と杯部を連続的に製作し、杯底部に円盤を充填すると考えられる。これに対して63は、詳細は不明であるが、脚部上部が中空であることから、まず脚部を製作し、脚部の頂部側面から杯底部の粘土を積み上げていくと考えられる。64～67は脚裾部の資料である。いずれも「ハ」字状に開いた脚裾部の先端を上方もしくは斜め上方に折り返し、もしくはつまみ上げて端部を少し拡張している。脚裾部に直径3～5mm程度の円孔を穿つものが64・66・67に認められる。64は2個ならんでいることから、2個1組とし、複数の円孔が穿たれていた可能性がある。これらの弥生土器は、いずれも弥生時代中期後葉から後期初頭のものであろう。

92・93は石器である。どちらも材質はサヌカイトである。92は石槍あるいは石鏃未製品である。端部先端は18.3cm、長さ7.0cm、最大幅3.4cmを測る。93は有茎式石鏃である。

土坑S K 69(第37図・第38図94) 68～91は弥生土器である。68は先述の土坑S K 68出土の大口壺(45)とはほぼ同器形の大口壺である。円形浮文の配置も同じである。69は直口壺である。口縁部が大きく開く。70は68や69のような壺の口縁部下半から頸部にかけての資料である。肩部の最上部に直径6～7mm程度の円形浮文を8～9mm間隔で配置する。頸部外面にはミガキを施す。71は直口壺である。ほぼまっすぐ立ち上がる頸部に、屈曲して開く口縁部がつく。ナデを主体に整形されている。72は直口壺である。口縁部は緩やかに外反し、端部がわずかに肥厚する。73は口縁部が頸部からわずかに外反した後、内湾気味となる。74・75はどちらも壺の底部と考えられる。74は高さが1.3cmほどの突出底となるのに対して、75は平底の底部から体部が立ち上がる。どちらも外面にはミガキを施す。76はミニチュアの壺で、頸部から体部にかけての破片である。体部下半に最大径をもち、後述する77を小型化したような資料である。77は直口壺の体部片と思われる。口縁部と底部を欠損するが、体部下半に最大径をもつ。器表面の摩滅・剥離が著しく、調整は不明である。78～82は甕である。土坑S K 51や土坑S K 68出土の甕と同様、短めの口縁部が頸部で「く」字状に屈曲し、肩部があまり張らない倒卵形の器形を呈すると考えられる。81は明瞭な端面を有するが、そのほかの個体の端面は丸みを帯びる。83は鉢と推定される。体部下半部を欠損するが、口縁端部が肥厚気味にやや厚くなり、端面はやや丸みを帯びる。体部外面に横方向のハケを施す。84～91は高杯である。84～88は高杯の杯部である。84～87はやや深手の杯部



第38図 M2区出土遺物実測図4(1/3)

を、88は浅い杯部である。器形としては、85・86はほぼ同一の器形で、杯口縁部がわずかに内方へ傾く。84・87は杯底部から口縁部が外方に向かって延びるが、84は内湾気味に端部に至り、87は外反気味に端部に至る。87は口縁端部に明瞭な面をもつ。88は口縁部が内湾気味に短く立ち上がり、口縁端部の端面に面をもつ。84～86は摩滅のため調整が不明瞭であるが、87・88は緻密なミガキを施す。ただし、88の内面はナデで仕上げる。89～91は高杯の脚部である。89は脚部の上部で、杯部との接合部に当たるが、接合方法は不明である。90は脚柱部の径の大きさがほぼ同じものである。どちらも外面は摩滅するものの、ミガキを施していることがわかる。91は脚裾部である。ほぼ「ハ」字状に開いた形状を呈し、スカシ孔が2個並んで穿たれている。

94は有茎式石甌である。材質はサヌカイトである。SK69は弥生時代中期後半から後期初頭と思われる。

その他の遺構 95は島畑72の上面精査中から出土した不明鉄鋸である。上部は弧状を呈し下部ははがねなどで打ち込んだように凸凹している。96は島畑80の上面精査中から出土した鉄釘である。(筒井崇史)

3) O地区の調査

O地区は、府道内里城陽線の北側に設定した調査区である。調査は、排土置き場を確保する必要から反転調査とし、南側をO1区、北側をO2区とした。ただし、調査の結果、島畑をO1・O2両調査区に跨って検出したことから、一体のものとして報告する。O地区は復原条里によると、久世郡条里五条三十八坪にあたる。調査地の東側をほぼ南北に流れる農業用水路が東西方向の坪境に復原されている。なお、調査区の北側を栗隈大溝とも推定されている古川がほぼ東西に流れている。

(1) 調査区の概要と基本層序

O1区は東西約44m、北辺約50m、南辺約30mの台形の調査区である。O2区はO1区の北側に位置し、南北約25m、東西約45mの「L」字形の調査区である。現地表面の標高は14.4～15.2mである。現地表下1.3～1.5mで上層遺構として島畑5基を検出した。また、下層遺構として、島畑の盛り土の下層で土坑状遺構および柱穴状遺構を合計20か所検出した。

基本的な層序は、最上層には現在の盛り土が認められる。現在の盛り土の約0.2mには厚さ約0.3mの灰白色粗～中粒砂層(11層)が堆積し、場所によっては橙色に酸化が認められる。これらの砂層は近世以降の洪水による堆積の可能性が考えられる。その下層の堆積状況は島畑部分と溝状遺構部分で異なる。溝状遺構では灰色粘質土(43層)、暗オリーブ灰色粘土(48層)などが厚さ1.0mほど堆積する。島畑部分では青灰色粘質土(51層)、オリーブ灰色粘質土(52層)など、新しい時期の島畑造営に伴う盛り土が認められる。今回の調査では、もっとも初期の島畑の盛り土である暗オリーブ灰色中粒粘質土(54層)の上面を上層遺構面として調査を行った。これらの島畑から出土した遺物から、島畑の造営は中世前半ごろと考えられる。島畑の盛り土の下層に緑灰色粘土(56層)の堆積が認められ、遺物包含層と考えられる。時期は出土した遺物から弥生時代と考えられる。この下層で、基盤層としてオリーブ黒色粗粒粘質土混じりのオリーブ褐色粘質土(59層)

を確認した(第40図)。

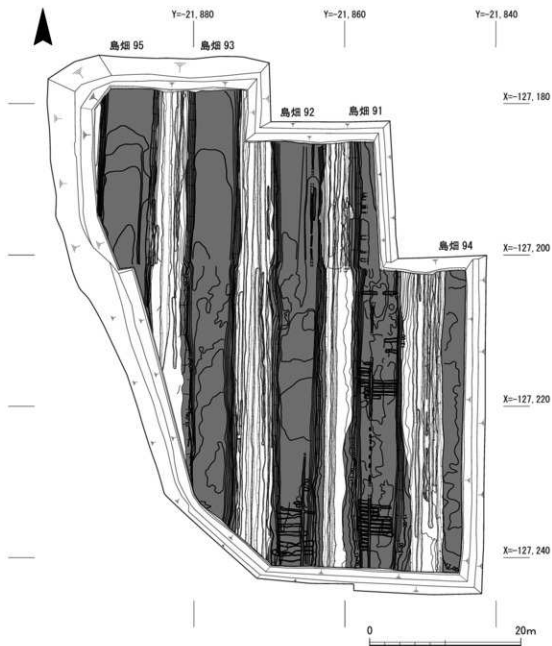
(竹村亮仁)

(2) 検出遺構

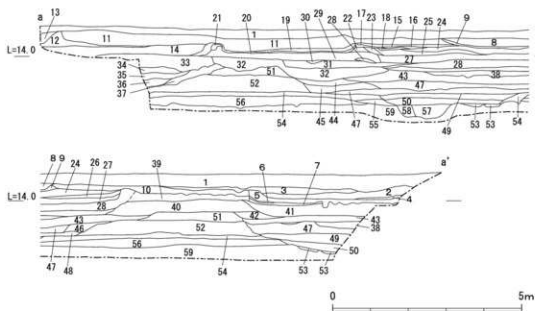
① 上層遺構

鳥畑94(第41図) 調査区の東端で検出した(B4-A12区ほか)。南北方向の鳥畑で、規模は検出長39.8m、基部検出幅2.6m、上面幅2.2m、高さ0.3m前後である。鳥畑上面の標高はおよそ13.1mである。鳥畑の南北両端は調査区外に延びるため確認できなかった。鳥畑上面では素掘り溝は確認できなかった。

遺物は、精査時や鳥畑下層の掘削時に縄文土器、土師器、須恵器、青磁、石鏃などの細片が出



第39図 O地区遺構配置図(1/500)



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 盛土 2. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 砂 3. 青黒色 (10BG2/1) 細粒砂質土 4. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂 5. 灰白色 (2.5Y8/2) 砂 6. 赤褐色 (5YR4/8) 砂 7. 青灰色 (5B5/1) 細砂混じりの粘質土 8. 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂 9. 橙色 (7.5YR7/6) 砂 10. 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 砂 11. 灰白色 (7.5Y8/2) 12. 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 砂 13. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂 14. 灰白色 (2.5Y7/1) 砂 15. 浅黄色 (2.5Y7/6) 砂 16. 灰色 (N6/1) 砂 (木片、炭化物含む) 17. 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 砂 18. 灰色 (N6/1) 砂 (木片、炭化物多量を含む) 19. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂 20. 極暗褐色 (10R2/8) 砂 21. 黄灰色 (2.5Y2/1) 粘質砂土 22. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質砂土 23. 灰色 (N4/1) 砂 (木片、炭化物多量を含む) 24. 灰白色 (10Y8/2) 砂 25. 灰白色 (7.5Y7/1) 砂 (木片、炭化物多量を含む) 26. 灰色 (10Y5/1) 砂 27. 灰色 (7.5Y6/1) 砂 28. 青灰色 (10BG5/1) 粘質砂土 29. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘質砂土 30. 灰色 (10Y6/1) 粘質砂土 | <ol style="list-style-type: none"> 31. 灰褐色 (7.5YR4/2) 砂 32. 黄灰色 (2.5Y2/1) 粘質砂土 33. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質砂土 34. 灰色 (N5/0) 粘質砂土 35. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 36. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 37. 青灰色 (5B5/1) 粘質土 38. 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 39. 浅黄色 (2.5Y7/3) 細粒砂混じりの粘質土 40. 青灰色 (5BG6/1) 粘質土 41. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 42. オリーブ灰色 (5GY5/1) 粘質砂 43. 灰色 (5Y6/1) 粘質土 44. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 45. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 46. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 47. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 48. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 極細粒砂混じりシルト 49. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質土 50. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土 51. 青灰色 (10BG6/1) 粘質土 52. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土 53. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 極細粒砂混じりシルト 54. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 中粒砂混じりシルト 55. 灰色 (5Y6/1) 粘質土 56. 緑灰色 (10GY4/1) 粘土 57. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 58. 青灰色 (5BG5/1) 粘質土 59. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粗粒シルト
(オリーブ黒色 (10Y3/2) 粗粒シルトが混じる) |
|---|---|

第40図 O地区北壁土層断面図(1/100)

土した(第46図110~113・第47図136)。

島畑91(第41図) 調査区の東半部、島畑94の西側で検出した(A4-v15区ほか)。南北方向の島畑で、規模は検出長56.6m、基部検出幅6.2~9.0m、上面幅4.8~5.4m、高さ0.4m前後である。島畑上面の標高はおよそ13.0mである。島畑の南北両端は調査区外に延びるため確認できなかった。島畑の基盤層はオリープ黒色粘質土である(第43図)。

島畑の上面では南北方向の素掘り溝1条(SD18)と東西方向の素掘り溝32条を検出した。素掘り溝SD18は島畑91の上面を途切れながら南北方向に延びる。本来は島畑を南北に縦断すると考えられ、復原長35.0m、幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後を測る。東西方向の素掘り溝は、O2区調査地では不明瞭なものが多いが、検出長0.8~4.0m、幅0.2~0.5m、深さ0.05m前後を測る。これらの溝にはSD18と交差するものと、SD18を境に途切れるものを検出しているが、本来は島畑91を東西に横断する溝と考えられる。これらの素掘り溝群はSD18に直交し、SD18よりも古い。

遺物は、精査時や島畑下層の掘削時に須恵器や土師器、瓦器などの細片が出土したが図示できないようなものはなかった。

島畑92(第41図) 調査区の中央で検出した(A4-v16区ほか)。南北方向の島畑で、規模は検出長56.0m、基部検出幅6.8~7.0m、上面幅4.4~5.8m、高さ0.3m前後である。島畑上面の標高はおよそ12.9mである。島畑の南北両端は調査区外に延びるため確認できなかった。島畑の基盤層は暗オリープ色細粒砂混じり粘質土である(第43図)。

島畑91と同様に、島畑上面では南北方向の素掘り溝1条(SD33)、東西方向の素掘り溝10条を検出した。素掘り溝SD33は検出長14.0m、幅0.2~0.3m、深さ0.1m前後を測る。東西方向の素掘り溝は検出長0.4~4.5m、幅0.2~0.7m、深さ0.05mを測る。SD33に直交している。

遺物は、精査時や島畑下層の掘削時に弥生土器や須恵器、土師器、瓦器、白磁、砥石などの細片が出土した(第46図97~100・105・第47図140)。

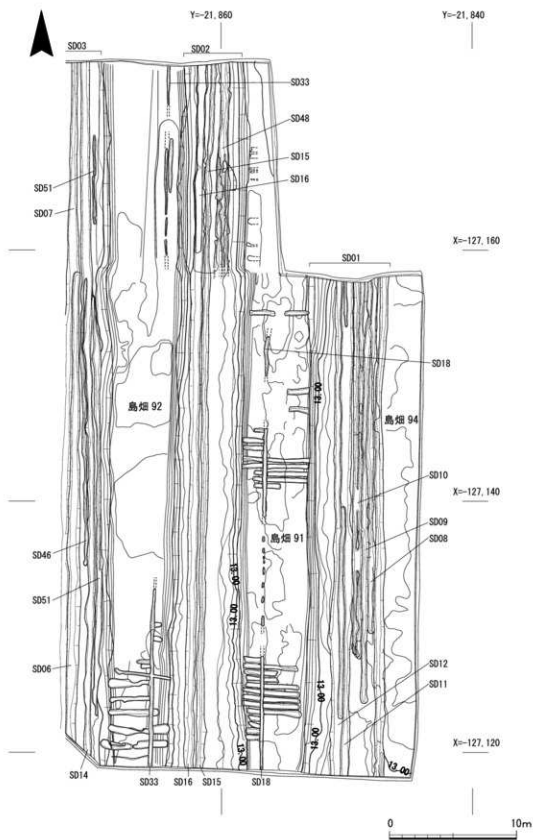
島畑93(第42図) 調査区の西側で、島畑92・95の間で検出した(A4-t19区ほか)。南北方向の島畑で、規模は検出長56.4m、基部検出幅8.0~8.2m、上面幅3.8~6.1m、高さ0.4m前後である。島畑上面の標高はおよそ12.9mである。島畑の南北両端は調査区外に延びるため確認できなかった。島畑上面では素掘り溝は確認できなかった。島畑の基盤層は褐色粘質土である(第43図)。

遺物は、遺構検出時ならびに島畑上面の精査時、あるいは島畑下層の掘削時に土師器、須恵器、瓦器、天目茶碗などの細片が出土した(第46図101~104・106・107)。

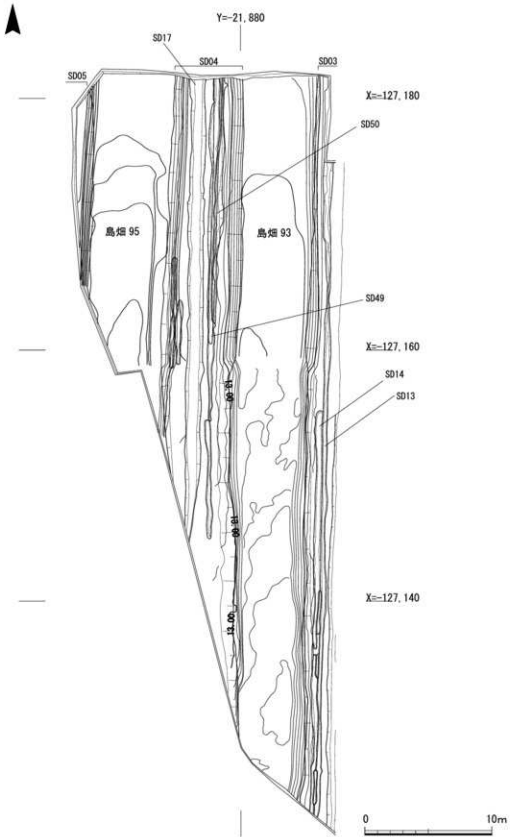
島畑95(第42図) 調査区の西半部で検出した(A4-t22区ほか)。南北方向の島畑で、規模は検出長23.2m、基部検出幅3.6~5.0m、上面幅2.4~3.8m、高さ0.35m前後である。島畑上面の標高はおよそ12.6mである。島畑の南北両端は調査区外に延びるため確認できなかった。島畑上面では素掘り溝は確認できなかった。

遺物は、精査時や島畑下層の掘削時に須恵器や土師器、瓦器などの細片が出土したが図示できないようなものはなかった。

溝状遺構SD01(第41図) 島畑94と島畑91の間で検出した(B4-a12区ほか)。規模は検出長



第41図 O地区島畑91・92・94平面図(1/300)



第42図 O地区島畑93・95平面図(1/300)

39.8m、幅5.8～6.0m、深さ0.5mである。溝底で8条の素掘り溝を検出した。素掘り溝の規模は検出長29.3～40.9m、幅0.3～0.8m、深さ0.1m前後を測る。

遺物は、精査時などに土師器や瓦器などの細片が出土したが、図示できるようなものは瓦質土器の鉢1点のみである(第46図109)。また、溝底の素掘り溝SD08からは須恵器杯Bが出土した(第46図121)。

溝状遺構SD02(第41図) 鳥畑91と鳥畑92の間で検出した(A4-v16区ほか)。規模は検出長56.0m、幅4.0～4.5m、深さ0.5mである。埋土は47～50層で、粘質土・粘土が堆積している。溝底で5条の素掘り溝を検出した。素掘り溝の規模は検出長16.5～55.9m、幅0.4～0.9m、深さ0.3m前後を測る。

遺物は、精査時に須恵器杯身、須恵器杯蓋、天目碗、白磁碗の破片などが出土した(第46図115～120)。

溝状遺構SD03(第41・42図) 鳥畑92と鳥畑93の間で検出した。(A4-v18区ほか)。規模は検出長55.0m、幅6.0～6.8m、深さ0.4～0.5mである。埋土は44・45・47～50層で、粘質土・粘土

鳥畑91土層断面

L=13.4m



鳥畑92土層断面

L=13.0m



鳥畑93土層断面

L=13.2m



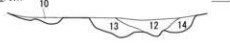
SD01内素掘り溝SD09～12土層断面

L=13.0m



SD02内素掘り溝SD06・07・13・14土層断面

L=13.0m



0 2m

1. オリーブ灰色(10Y4/2) 中粒砂混じりの粘質土
2. オリーブ黒色(10Y3/2) 粘質土(暗オリーブ色(5Y4/3) 細粒砂混じる)
3. 暗緑灰色(7.5GY4/1) 細粒砂混じりの粘質土
4. 暗オリーブ色(5Y4/4) 細粒砂混じりの粘質土
5. 褐色(10YR4/4) 粘質土
6. 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 粗粒砂混じりの粘質土
7. 灰色(10Y4/1) 粘土

8. オリーブ灰色(2.5GY5/1) 粗粒砂混じりの粘質土
9. オリーブ灰色(5GY5/1) 粗粒砂混じりの粘質土
10. オリーブ灰色(5GY5/1) 中粒砂混じりの粘質土
11. 暗緑灰色(7.5GY4/1) 細粒砂混じりの粘質土
12. 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 細粒砂混じりの粘質土
13. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1) 細粒砂混じりの粘質土

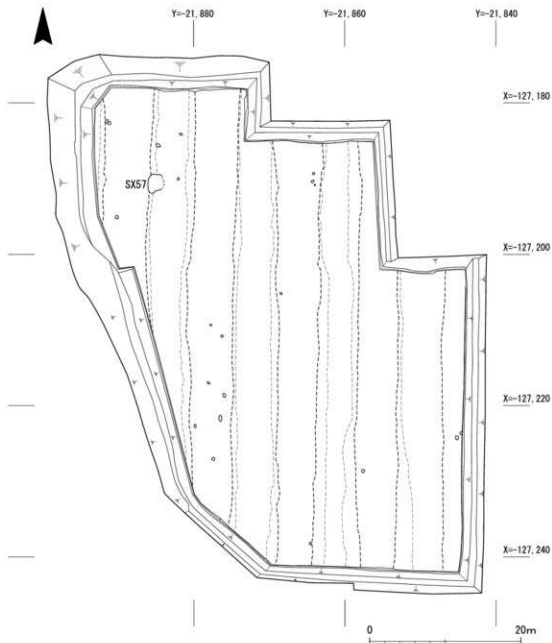
第43図 O地区鳥畑91～93、SD01・02土層断面図(1/60)

が堆積している。溝底で 6 条の素掘り溝を検出した。素掘り溝の規模は検出長 18.9~54.0m、幅 0.3~0.9m、深さ 1.0m を測る。

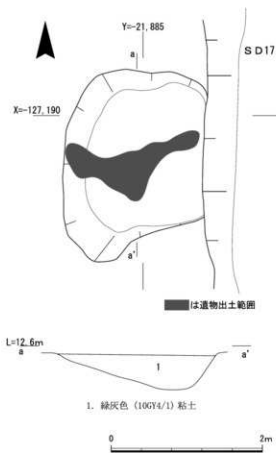
遺物は、精査時に土師器や瓦器、白磁、天目碗の破片などが出土した(第46図124・129)。

溝状遺構 S D 04 (第42図) 鳥畑93と鳥畑95の間で検出した(A4-t22区ほか)。規模は検出長 35.0m、幅 5.4~5.5m、深さ 0.5m である。埋土は 47~58 層で、粘質土・粘土・シルトが堆積している。溝底で 5 条の素掘り溝を検出した。素掘り溝の規模は 5.0~36.9m、幅 0.6~1.0m、深さ 1.1m である。

遺物は、精査時に土師器皿の破片などが出土した。また、素掘り溝 S D 17 から弥生土器や須恵器、土師器、瓦器の破片などが出土した(第46図122・123・126~128)。



第44図 O地区下層遺構配置図(1/500)



第45図 O地区土坑S K57実測図(1/50)

溝状遺構S D05(第42図) 島畑95の西側で検出した(A4-t24区ほか)。規模は検出長14.9m、検出幅0.9m、深さ0.4mである。埋土は34~36層で、粘質土が堆積している。ほかの溝状遺構とは異なり、素掘り溝は検出できなかった。遺物は出土していない。

②下層遺構(第44図)

島畑盛り土の下層には、遺物包含層と考えられる緑灰色粘土が堆積し、その層を除去すると、基盤層であるオリープ黒色粗粒粘質土混じりのオリープ褐色粘質土となる。その上面で柱穴状遺構20か所を確認した。柱穴状遺構は調査区内に点在しており、掘立柱建物や柵として復原することはできなかった。また、島畑95の下層で検出した土坑S K 57(第45図)から弥生土器の細片が出土した。S K 57の埋土は遺物包含層(緑灰色粘土層)と同一であることから、自然の窪地に土器が堆積したものである可能性がある。

(増田孝彦・竹村亮仁)

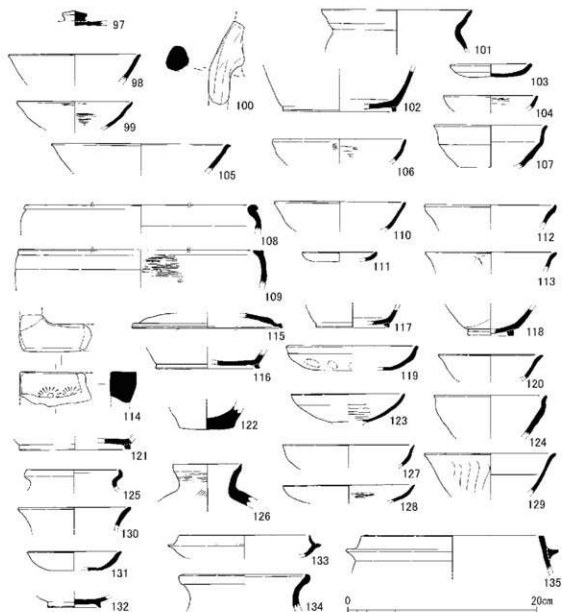
(3)出土遺物

O地区では完形の土器は出土しておらず、すべて小片である。

島畑92(第46図97~100・105) 97は須恵器蓋のつまみの破片である。奈良時代のもと考えられる。98は須恵器杯である。99は瓦器碗である。全体に摩滅しており、内面にミガキが一部残る。100は瓦質土器羽釜の脚部である。胎土は粗く、羽釜との接合部に1cm程度の小石を含む。105は中国製白磁碗である。第V類と考えられる。

島畑93(第46図101~104・106・107) 101は弥生土器である。口縁部がわずかに有段となる。弥生時代後期から終末期のものであろう。102は須恵器杯Bである。口縁部下半から高台付近まで残存している。高さ4mm程度の高台が貼り付けられている。内面は若干黒く変色している。103は土師器皿である。全体的に摩滅しているが、口縁部にヨコナデ、底部にナデを施す。104は瓦器碗の口縁部である。口縁端部は丸く収める。106は瓦器碗である。内外面とも摩滅している。107は美濃の天目碗である。

溝状遺構S D01(第46図108・109・114) 108は土師器羽釜の口縁部である。109は瓦質土器の鉢であろうか。114は瓦質の火鉢である。形状から方形の火鉢と考えられる。側面に花文を押印する。

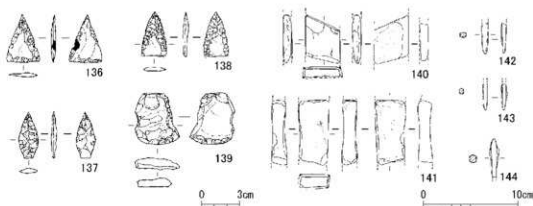


第46図 O地区出土遺物実測図I (1/4)

島畑94 (第46図110~113) 110は須恵器杯の口縁部である。回転ナデを施す。杯Bと考えられる。111は土師器皿である。112は土師器壺または甕と考えられる。口縁部のみで全体は不明である。古墳時代のものであろう。113は中国製青磁碗の小片である。外面に鎗蓮弁文と思われる意匠が認められることから13世紀ごろのものであろう。

溝状遺構 S D 02 (第46図115~120) 115は須恵器蓋である。やや扁平な形状である。天井部は欠損しているが、つまみがつくと思われる。116・117は須恵器杯Bである。底部外面はヘラヘズリ後ナデで仕上げる。118は鉄釉の天目碗である。美濃産であろうか。119は土師器皿である。全体に摩滅している。120は中国製白磁皿の口縁部である。口縁部の釉薬をはがす。13世紀のものである。

素掘り溝 S D 08 (第46図121) 121は須恵器杯Bの底部である。



第47図 O地区出土遺物実測図2 (1/3・1/4)

溝SD17(第46図122・123・126～128) 122は弥生土器の壺か甕の底部であろう。123は瓦器碗である。126は須恵器提瓶の口縁部から肩部である。肩部の広がりから口縁部に比べて体部が大きく開く可能性がある。127・128は瓦器碗の口縁部である。128は摩滅が激しい。

溝状遺構SD03(第46図124・129) 124は鉄軸の天目碗である。118とは別個体ではあるが、美濃産である。129は中国製白磁碗である。12世紀ごろと考えられる。

土坑SK57(第46図125・130) 125・130は弥生土器もしくは土師器壺の口縁部である。摩滅が著しい。

遺物包含層(第46図131～135) 131は土師器皿である。口縁部下半から底部にかけてユビオサエが認められる。132は緑釉陶器碗と考えられる。京都系の緑釉陶器であろう。底部のみであるため、皿の可能性もある。133は須恵器杯である。全体に回転ナデが認められる。底部は欠損している。134は須恵器壺の口縁部である。口縁端部は扁平気味に収める。135は土師器羽釜である。鈿は貼り付けで、全体にナデを施す。

136・137は無茎式石鏃である。138は有茎式石鏃である。139は石匙であろう。石器はすべてサヌカイト製である。140・141は砥石である。ともに表面の観察から仕上げ砥石と考えられる。141は表面に使用痕跡が認められる。142・143はいずれも鉄釘である。頭部・頸部を欠損している。144は釘または鉄鏃と考えられる。上部に広がりを持つことから、鉄鏃の茎部の可能性が考えられるが、はっきりしない。

(竹村亮仁)

6. 総括

平成26年度に実施したM1区と平成27年度に実施したL2区、M2区、O地区の調査成果を報告した。今回の平成26・27年度の調査によって下水主遺跡の北端の様相が明らかとなった。

1) 島畑と条里型地割について

条里制地割と島畑 調査区として設定したL地区とM地区の境界は、城陽市域の条里復原によると東西方向の坪境に相当すると考えられていたが、ここで用排水路と思われる坪境溝SD57を

検出した。この坪境溝を中心に鳥畑の様相を明らかにすることができた。O地区では4基の鳥畑を検出した。O地区では坪境付近が現府道にあたり、発掘調査にはいたっていないが鳥畑92～95は南北方向に長さ65mを測るもので、長地型を呈していた可能性が高い。一方、L地区では3基、M地区では5基の鳥畑を検出した。このうち、M地区では南北方向で検出長60m以上を測る鳥畑80など、南北方向を基調とする鳥畑が多いが、坪境に隣接した鳥畑73は坪境溝S D57と同様、東西方向の鳥畑であり、条里地割を踏襲するかのように鳥畑を配置していることが明らかとなった。

鳥畑での前後関係 L2区の調査では、安定した堆積層を基盤にして造営された鳥畑71と、その西側のやや軟弱である砂質層を基盤にして造営された鳥畑72を検出した。鳥畑71と鳥畑72の造営時期には前後関係があり、鳥畑71の造営後に鳥畑72が造営されていることが判明した。これまでの下水主遺跡や水主神社東遺跡の発掘調査では、各鳥畑の前後関係について明らかにできたものはなかったが、今回の調査によって、一斉に鳥畑の造営されたのではなく、安定した基盤層に鳥畑を造営した後、さらに軟弱な地盤の上に鳥畑造営を行っていたことが推測できる。

鳥畑と条里型地割の関連、鳥畑の展開などは平成23年度から継続して発掘調査を進めている下水主遺跡や水主神社東遺跡の全容が明らかになった段階で再度検討する必要がある。また、鳥畑は可耕地を確保するために、低地部に土を盛り上げて畑地を造り出すもので、鳥畑と鳥畑の間には土取りされた部分が生じる。この部分は凹地(本報告では溝状遺構と呼称)となるため、用水の確保や、排水あるいは畑地、もしくは水田として利用されたと考えられる。この凹地(溝状遺構)の大きさや配置は、周囲の地形を考慮した上で、湿地帯や雨水の排水を意図したものと推測される。

坪境溝の検出 今回のL2区の調査では鳥畑71・72と鳥畑73の間に坪境が存在するものと想定して発掘調査を実施した。調査の結果、想定していた地点で東西方向の溝S D57を検出した。S D57は検出長16.1m、上面幅7.2m、深さ1.0mの規模で、鳥畑間の溝状遺構と比べて幅がやや狭いものの、約0.15m深く掘り込まれて造られていた。基幹的な水路の役割を担っていたものと推測される。この溝からの出土遺物が限られているため、溝の機能した具体的な時期は明らかでないが、鳥畑造営以後も何度となく掘り返されていることから、長期間にわたり同じか所で用排水や区画を目的として機能していたと考えられる。

2) 下層遺構について

弥生集落の様子 下水主遺跡の北端部にあたるL・M・Oの各地区では、鳥畑造営以前の遺構として弥生時代の遺構・遺物と縄文時代の遺構・遺物を検出した。下水主遺跡の南半部では、古墳時代前期以降の溝や掘立柱建物、井戸などを検出しているが、北半部においてこの時期の遺構・遺物の存在は希薄であり、古墳時代から古代にかけての遺跡の広がりは南半部に集中すると思われる。一方、弥生時代の遺構としては、今回の調査で中期の土坑を5基検出した。また、L地区の東側に位置するN地区(平成26年度調査、報告書は平成29年度刊行予定)でも同時期の土坑などを検出している。しかし、竪穴建物が未検出のため集落の範囲は明らかになっていないが、L地区よりも南側では弥生時代中期の遺構・遺物はほとんど出土していない点を踏まえると、N地区

の北東側に弥生時代中期の集落の中心部が存在する可能性が考えられる。これまでの調査成果をあわせると、弥生時代の遺構は木津川によって形成された微高地上に存在していたと考えられる。

縄文時代晩期の氾濫流路 弥生時代に先行する縄文時代の遺構として氾濫流路N R38・42・60を検出した。いずれの遺構も平成26年度に初めて検出したものである（報告書は平成29年度刊行予定）。今回の調査では、平成26年度調査の東延長部を確認したことになる。これらの氾濫流路は木津川から氾濫した洪水によってL1・L2区の南部にある軟弱な地盤が挟り込まれた流路状の遺構である。遺構の検出状況は、その流路に洪水によって自然木が流れ込んだ状況を示している。今回のN R42の調査では少量の縄文時代後期の遺物とともに自然木・堅果類・木ノ葉などが多量に出土したが、平成26年度の調査では多くの縄文時代後・晩期の土器が出土しており、その整理成果を待って詳細を検討する必要がある。これらの遺構・遺物は縄文時代後・晩期の環境を復原する上で有効な資料と考えられる。

3)木津川と下水主遺跡

木津川は文献史料によると何度となく洪水をおこしており、縄文時代においても下水主遺跡で洪水痕跡を確認している。弥生時代から平安時代にかけて洪水を避けるかのように微高地上や流路を開削して水を制御していた状況が、発掘調査によって明らかになりつつある。また、中世以降には、こうした低地部を開発して島畑を形成していることが明らかになっている。ただ、島畑造営後の近世においても島畑の上部に洪水によると考えられる砂層が厚く堆積しており、木津川の洪水被害を受けながらも近代まで島畑として機能していたことが明らかとなった。

(石井清司)

付編 平成27年度一般国道24号線城陽I C関係遺跡(下水主遺跡)年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、下水主遺跡で確認された氾濫流路形成・埋没期の古環境に関する情報を得ることを目的として、現地調査を実施した。その際採取した試料について放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、種実分析、樹種同定を実施した。

(紙幅の都合上、放射性炭素年代測定のみを報告する。文章には一部に変更を加えた)

1. 調査地点の層序

今回の調査区では、縄文時代晩期ないしそれ以前の流路が検出されている。この流路は、流路内堆積物に認められる再侵食面によって、NR38・NR42・NR60の3条の流路跡に区分される。堆積学的調査により、これらの流路は、木津川から氾濫原に向かう氾濫流の侵食によって形成された氾濫流路であることが明らかにされている。分析試料採取時の断面観察によると、NR42・NR60については、流路内堆積物が再侵食面などにより細分可能であると考えられた。このような堆積状況をふまえると、NR42・NR60は、間欠的に発生する洪水による侵食と充填を幾度も受けながら埋積が進行していったと捉えられる。以下に、各流路を埋積した堆積層の概要を示す。

NR60は、NR60-8～6、NR60-5、-4、NR60-3、-2、NR60-1の4つの流路内堆積物からなる堆積ユニットに大別される(図1)。これらの堆積ユニットの累重状況から、本流路は、南から北に向かって側方付加しながら埋積されたと考えられる。NR60では、河床部分に葉理の発達する粗粒砂～極粗粒砂ないしシルトの葉理の挟在する中粒砂～粗粒砂、流路縁付近に極細粒砂～細粒砂の葉理を挟在する腐植質シルトやシルトの葉理が発達する中粒砂が累重する。また、流路上半部については、浮遊砂を主体とすると考えられる、不明瞭な平行葉理ないし見かけ上で塊状をなすシルトを多く含む細粒砂～中粒砂によって埋積される傾向にある。

(以下省略)

2. 分析試料

各分析資料の採取位置を図1に示す。放射性炭素年代測定は、⑧地点(NR38-1)の木片、⑥地点(NR60-6)の葉、②地点(NR60-1)の木材、①地点(unit5)の炭化材の4点について実施する。

(以下省略)

3. 分析方法

(1)放射性炭素年代測定

植物遺体は、メス・ピンセット、超音波洗浄などにより、根や土壌など後代の付着物を、物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。通常では、塩酸、水酸化ナトリウム

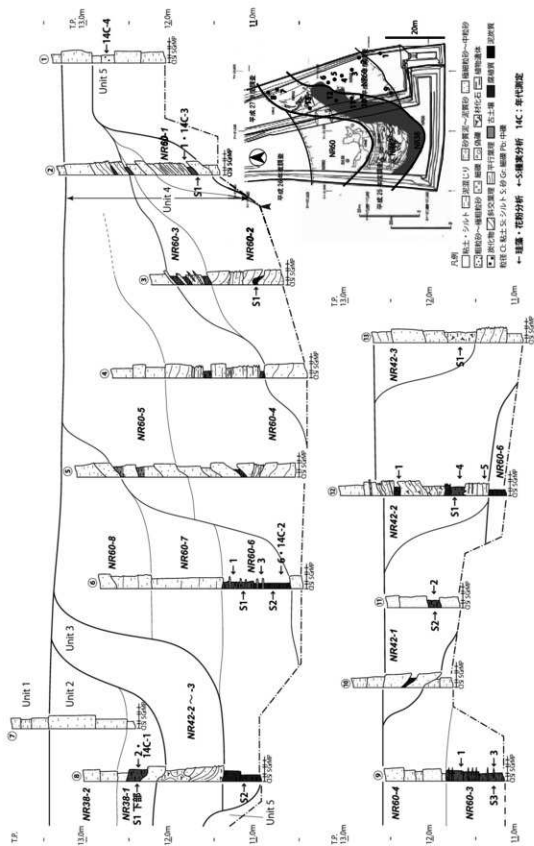


図1 調査地点の層序および分析試料採取位置

ともに1mol/Lを用いるが、試料が脆弱な場合は水酸化ナトリウムの濃度を0.001~1mol/Lの範囲内で徐々に濃くしていき、反応をみながら処理を行う。1mol/Lの水酸化ナトリウムを用いると分析に必要な炭素量が得られない可能性がある場合は、濃度の低い水溶液の時点で処理を終える(AaAと表記する)。

これらの試料を燃焼させて二酸化炭素を発生させ、真空ラインで精製する。その後鉄を触媒として還元し、グラファイトを得る。得られたグラファイトをカソードにプレスしてターゲットを作成する。タンデム加速器のイオン源に装着し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C の濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C の濃度($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)の測定を行う。測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma 68%)に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウェアはCALIB var.7.1である。また、このソフトウェアで用いられる較正曲線の最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer et al.2013)である。なお、年代測定値は、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるが(Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、丸めない値(1年単位)を記す。

(以下省略)

4. 結果

放射性炭素年代測定

年代測定および暦年較正結果を表1、図2に示す。上位層準より、⑧地点(NR38-1)の木片が $2,290 \pm 30\text{yrBP}$ 、⑥地点(NR60-6)の葉が $2,730 \pm 30\text{yrBP}$ 、②地点(NR60-1)の木材が $2,820 \pm 30\text{yrBP}$ 、①地点(unit5)の炭化材が $3,670 \pm 30\text{yrBP}$ を示す。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正し、暦年に近づける方法である。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表す。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものの、中央値は、確率分布が等しくなる点の値である。 2σ の値でみると⑧地点(NR38-1)の木片は2,350~2,180 cal BP、⑥地点(NR60-6)の葉は2,870~2,770 cal BP、②地点(NR60-1)の木材は2,990~2,860 cal BP、①地点(unit5)の炭化材は4,080~3,910 cal BPである。中央値は、⑧地点(NR38-1)の木片は2,330 cal BP、⑥地点(NR60-6)の葉は2,820 cal BP、②地点(NR60-1)の木材は2,919 cal BP、①地点(unit5)の炭化材は3,990 cal BPである。

(以下省略)

表1 放射性炭素年代測定結果

地点 試料名	試料 状態	分析 方法	測定年代 yr BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代yrBP (暦年較正用)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値					中央値
						σ	2σ	相対比	中央値		
④地点 NR38-1	木片	AAA	2,360±30	-29.37±0.24	2,290±30 (2,292±26)	σ	BC 399 - cal BC 367	cal BP 2,347 - 2,316	1,000	ca1BC 381	IAA- 151357
						2σ	cal BC 403 - cal BC 357	cal BP 2,352 - 2,306	0.837		
④地点 NR60-6	葉	AAA	2,830±30	-31.02±0.56	2,720±30 (2,728±26)	σ	cal BC 496 - cal BC 839	cal BP 2,945 - 2,798	1,000	ca1BC 820	IAA- 151358
						2σ	cal BC 919 - cal BC 816	cal BP 2,868 - 2,767	1,000		
②地点 NR60-1	木片	AAA	2,880±30	-28.53±0.59	2,820±30 (2,818±26)	σ	cal BC 1,003 - cal BC 967	cal BP 2,952 - 2,916	0.515	ca1BC 969	IAA- 151359
						2σ	cal BC 964 - cal BC 931	cal BP 2,913 - 2,880	0.485		
①地点 unit5	炭化材	AaK	3,680±30	-25.91±0.42	3,670±30 (3,665±26)	σ	cal BC 1,042 - cal BC 1,036	cal BP 2,991 - 2,985	0.010	ca1BC 2044	IAA- 151360
						2σ	cal BC 1,031 - cal BC 907	cal BP 2,980 - 2,856	0.990		

1) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

2) AaKは、酸、アルカリ、酸塩基、AaLは、アルカリの濃度を表した結果を示す。

3) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用。計算には表に示した丸める前の値を使用している。1桁目を丸めるのが慣例だが、

暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率は σ は68%、

2σ は95%である。相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。中央値は、確率分布関数の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

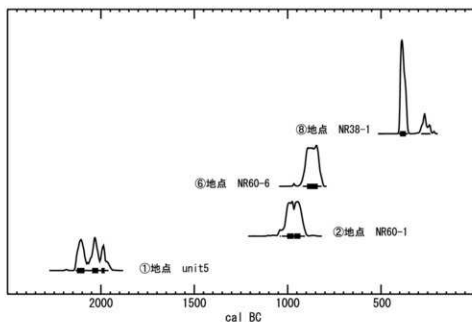


図2 暦年較正結果

付表 1 出土土器観察表

下水主通跡 M 1 区

報告番号	器種	器形	出土遺構		法 量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備 考
			遺構名	層位・状況	口径	器高	底径						
1	瓦器	椀	鳥畑 81	裾留部 精査	*140	(44)	-	1/12 以下	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面ナデ、内面：ナデのちミガキ	
2	瓦器	皿	鳥畑 80	断ち取り 2	*110	(15)	-	1/12 以下	密	灰白色 (5Y8/1)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
3	土師器	杯	鳥畑 80	精査	*120	(22)	-	1/12 以下	密	外面：灰白色 (10YR8/2)、内面：灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、内外面：ナデ	
4	土師器	杯	鳥畑 80	精査	100	(18)	-	1/12	密	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ	
5	土師器	皿	鳥畑 80	精査	102	09	-	1/12	粗	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、底部外面：ユビオサエのちナデ、底部内面：摩滅のため調査不明	
6	土師器	皿	鳥畑 80	断ち取り 1	*78	10	-	1/12 以下	やや粗	外面：灰白色 (10YR8/2)、内面：灰黄褐色 (10YR8/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナデ、底部外面：ユビオサエのちナデ、底部内面：ナデ	
7	弥生土器	甕	鳥畑 80	重機掘削	/	(26)	42	12/12	やや粗	外面：灰黄褐色 (10YR6/2)、内面：灰白色 (10YR8/1)	良好	外面：タタキ、内面：ナデ、底部外面：ユビオサエ・ナデ	
8	瓦器	椀	SD02	-	142	(27)	-	15/12	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面ユビオサエ・ナデ内面：ナデのちミガキ	口縁端部に沈線あり
9	瓦器	椀	SD02	-	/	(13)	50	6/12	密	灰白色 (2.5Y8/1)	やや軟	底部内面：ナデ後増え、底部外面：ユビオサエのちナデ、高台貼り付け時：ヨコナデ	
10	土師器	皿	SD02	精査	88	(09)	-	1/12	密	にぶい褐色 (7.5YR7/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、底部内外面：ナデ	
11	土師器	皿	SD02		130	17	-	25/12	やや粗	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、外面：摩滅気味のため不明 (ナデか)	
12	土師器	杯/皿	SD09	-	*110	(19)	-	1/12 以下	密	褐色 (10YR6/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面：ユビオサエ・ナデ、内面：ナデ	
13	須恵器	杯	SD47	南半	*163	(33)	-	1/12 以下	やや粗	灰白色 (N7/0)	良好	口縁部内外面・底部内面：回転ナデ、底部外面：ナデ	
14	土師器	椀	SP40	-	130	46	-	10/12	やや粗	褐色 (5YR6/8)	軟	口縁部内外面：ヨコナデ、外面：ユビオサエ・ナデ、内面：ナデ	1 段斜状射状暗文あり、全体に摩滅気味
15	弥生土器	甕	SD37	2 区	*158	(21)	-	1/12 以下	やや粗	灰黄褐色 (10YR5/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ	口縁部外面に刺点文、保付着
16	弥生土器	壺	SD37	1 区	/	(57)	72	3/12	やや粗	外面：褐色 (5YR6/6)、内面：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	良好	外面：ミガキ、内面・底部外面：ナデ	
17	瓦器	椀	-	調査区 西壁精査	*130	(28)	-	1/12 以下	密	灰 (N5/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面ユビオサエ・ナデ内面：ナデのちミガキ	
18	瓦器	椀	-	調査区 東壁精査	*99	(21)	-	1/12 以下	密	灰色 (N4/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面ユビオサエ・ナデ内面：ナデのちミガキ	
19	瓦器	椀	-	鳥畑 81 下層	101	(21)	-	1/12	密	暗灰色 (N3/0)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、外面ユビオサエ・ナデ内面：ナデのちミガキ	
20	須恵器	杯 B	-	調査区 東壁精査	/	(14)	76	1/12	密	灰色 (N6/0)	良好	内面・高台貼り付け時：回転ナデ	

下水主通跡 L 2 区

報告番号	器種	器形	出土遺構		法 量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備 考
			遺構名	層位・状況	口径	器高	底径						
21	須恵器	鉢	SD57	灰オリーブ粘質土	21.5	(44)	-	1/12 以下	密	灰色 (N6/1)	良好	口縁部内外面：回転ナデ (摩滅)	
22	陶器	皿小	SD67	灰オリーブ粘質土	140	(25)	-	1/12	精良	にぶい黄色 (2.5YR6/4)	極軟	口縁部内外面：回転ナデのち施軸	

23	土器	杯	D4 - ml区	黄褐色粘質土	114	35	-	(1)12/12/12	密	明赤褐色 (5YR5/8)	良	口縁部内外面：ヨコナテ、体部内外面：ナテ	内面に1段着色放射状暗文あり
24	縄文土器	深鉢	NR42	-	200	(104)	-	2/12	精良	黒色 (2.5Y2/1)	良好	内外面：ミガキ	

下水主溝跡 M2区

報告番号	器種	器形	出土遺構		法 量			残存率	胎土	色調	焼成	技法上の特徴	備 考
			遺構名	層位・状況	口径	器高	底径						
27	白磁	椀	鳥畑80	積査中	-	(1)8	3.4	6/12	精良	灰白色 (2.5GY8/1)	堅緻	内外面：回転ナテのち施軸	高台は削り出し
28	土器	皿	鳥畑80	高畑盛土掘削	7.8	(1.4)	-	2/12	密	灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、底部内外面：ナテ	
29	土器	皿	SD78	東証張部	15.6	(1.1)	-	2/12	密	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、底部内外面：ナテ	
30	瓦質土器	羽釜	SD63	-	-	(2.5)	-	1/12	密	灰白色 (10YR7/1)	良好	胴：ヨコナテ、体部内面：ナテ	
31	陶器	底部	鳥畑90	-	-	(1.7)	4.8	6/12	精良	灰白色 (5Y7/1)	堅緻	内外面：回転ナテのち施軸	
32	弥生土器	甕	鳥畑73	重機掘削	-	(4.8)	9.6	4/12	粗	外面：浅黄褐色 (10YR8/3)、内面：褐灰 (10YR6/1)	良好	外面：ハケ・ナテ、内面・底部外面：ナテ	
33	弥生土器	高杯	鳥畑80	盛り土掘削	-	(1.4)	16.6	2/12	やや粗	にぶい・橙色 (5YR7/4)	良好	脚端部内外面：ヨコナテ	
34	弥生土器	壺	SK51	-	6.8	(5.8)	-	7/12	粗	黒褐色 (10YR3/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、頸部内外面：ミガキ、頸部内面ナテ	
35	弥生土器	壺	SK51	-	8.8	(6.1)	-	7/12	粗	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテか、頸部・体部外面：ハケか(摩滅)、頸部・体部内面ナテ	口縁部外面に2次焼成による剥離あり
36	弥生土器	壺	SK51	-	9.3	(7.1)	-	3/12	粗	灰白色 (10YR8/2)	軟	口縁部内外面：ヨコナテ(摩滅)	
37	弥生土器	壺	SK51	-	9.8	(5.6)	-	11/12	粗	灰白色 (10YR8/2)	軟	口縁部内外面：ヨコナテ(摩滅)、頸部外面：ハケ、頸部内面：ナテ(摩滅)	
38	弥生土器	甕	SK51	-	-	(5.8)	8.0	12/12	粗	灰白色 (10YR8/2)	良好	外面：ハケ、内面・底部外面：ナテ	
39	弥生土器	甕	SK51	-	-	(5.1)	5.4	5/12	粗	灰白色 (10YR8/2)	やや軟	外面：ハケ(摩滅)、内面：摩滅不明、底部外面：ナテ	
40	弥生土器	甕	SK51	-	-	(5.1)	6.0	5/12	粗	灰白色 (10YR8/2)	軟	外面：ハケ(摩滅)、内面・底部外面：摩滅不明	
41	弥生土器	壺	SK51	-	18.5	19.35	-	3/12	やや粗	明褐色 (7.5YR7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：ハケ、体部内面：ナテ	
42	弥生土器	甕	SK51	-	28.1	(22.0)	-	5/12	粗	灰白 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：ハケ、体部内面：ナテ	
43	弥生土器	鉢	SK75	-	-	(5.2)	-	5/12	密	にぶい・黄色 (2.5Y6/3)	良好	内外外面：ハケ、底部外面：ナテ	
44	弥生土器	甕	SK75	-	17.7	(10.0)	-	4/12	粗	外面：にぶい・褐色 (5YR7/4) 内面：灰白色 (10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：ハケ(摩滅)、体部内面：ナテ(摩滅)	
45	弥生土器	壺	SK68	-	*21.4	(1.6)	-	1/12以下	粗	褐色 (10YR6/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ	口縁部外面・口縁部上面にそれぞれ円形浮文
46	弥生土器	壺	SK68	-	-	(7.3)	-	-	密	黄灰色 (2.5YR4/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、口縁部外面：ハケ、口縁部内面：ユビオサエ・ナテ	
47	弥生土器	壺	SK68	-	-	(3.1)	4.0	12/12	粗	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	良好	外面：摩滅不明、内面・底部外面：ナテ	
48	弥生土器	甕	SK68	-	13.8	(7.8)	-	5/12	粗	外面：灰褐色 (10YR4/1)、内面：にぶい・黄褐色 (10YR7/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：ナテ、体部内面：ユビオサエのちケズリ	
49	弥生土器	甕	SK68	-	13.4	(6.7)	-	2/12	粗	外面：にぶい・褐色 2.5YR6/3、内面：黒褐色 (2.5Y3/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：摩滅不明、頸部内面：ユビオサエ、体部内面：ハケ	

一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡発掘調査報告

50	養生土器	壘	SK68	-	104	(5.0)	-	6/12	やや粗	外面：焼灰色(75YR4/1)、内面：灰白色(10YR8/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：ハケカ、体部内面：ナデ	外面に2次焼成痕
51	養生土器	壘	SK68	-	112	(4.8)	-	3/12	粗	灰黄色褐色(10YR5/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：摩滅不明、体部内面：ケズリ	
52	養生土器	壘	SK68	-	117	(3.5)	-	3/12	粗	灰黄色褐色(10YR6/2)	やや軟	口縁部内外面：ヨコナテ、体部外面：粗いハケ、体部内面：ナデカ	
53	養生土器	壺	SK68	-	-	(9.2)	4.8	12/12	粗	灰黄色褐色(10YR5/2)	軟	外面：ミガキ(摩滅気味)、内面・底部外面：ナデ	
54	養生土器	壘	SK68	-	-	(3.7)	5.6	2/12	粗	外面：灰白色(10YR8/2)、内面：焼灰色(10YR5/1)	良好	内外面・底部外面：ユビオサエ・ナデ	
55	養生土器	壺/壘	SK68	-	-	(2.4)	5.0	3/12	粗	焼灰色(10YR4/1)	良好	外面：ミガキ、内面・底部外面：ナデ	
56	養生土器	壘	SK68	-	-	(1.6)	3.8	6/12	やや粗	にぶい褐色(7.5YR6/4)	良好	外面：ミガキ、内面・底部外面：ナデ	
57	養生土器	高杯	SK68	-	117	(12.7)	-	2/12	やや粗	焼灰色(7.5YR4/1)	良好	杯部内外面・脚部外面：ミガキ、脚部内面ハケ・ナデ	
58	養生土器	鉢	SK68	-	-	(4.0)	-	体部最大径1/12	やや粗	外面：灰黄色褐色(10YR4/2)、内面：にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	体部外面：ハケ、体部内面：摩滅不明	外面にキザミメを施した突帯が2条めぐ
59	養生土器	高杯か	SK68	-	220	(7.3)	-	2/12	粗	褐色(5YR6/6)	良好	杯部内外面：摩滅不明(ナデカ)	
60	養生土器	高杯	SK68	-	196	(3.6)	-	1/12以下	やや粗	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	杯口縁部内外面：ヨコナテ、杯底部内外面：ミガキ	
61	養生土器	高杯	SK68	-	-	(6.8)	-	杯部最大径3/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	軟	杯部内外面：ミガキ(摩滅)	
62	養生土器	高杯	SK68	-	-	(5.4)	-	-	粗	にぶい黄褐色(10YR7/4)	良好	杯底部外面・脚部外面：ミガキ、杯底部内面：摩滅不明、脚部内面：ナデ	
63	養生土器	高杯	SK68	-	-	130	11.3	7/12	やや粗	灰白色(2.5YR8/2)	やや軟	杯底部内外面・脚部外面：摩滅不明、脚部内面：ナデ	
64	養生土器	高杯	SK68	-	136	(3.7)	13.6	3/12	粗	灰白色(10YR8/2)	良好	脚端部内外面：ヨコナテ、脚部内外面：ナデ	
65	養生土器	高杯	SK68	-	-	(2.5)	-	1/12	やや粗	浅黄褐色(10YR8/3)	良好	脚端部内外面：ヨコナテ、脚部内外面：ナデ	
66	養生土器	高杯	SK68	-	-	(2.6)	15.0	1/12	やや粗	にぶい赤褐色(5YR5/4)	良好	脚端部内外面：ヨコナテ、脚部外面：ミガキ、脚部内面：ナデ	
67	養生土器	高杯	SK68	-	-	(2.1)	9.8	1/12	密	灰白色(10YR8/2)	良好	脚端部内外面：ヨコナテ、脚部外面：ミガキ	
68	養生土器	壺	SK69	-	262	(3.3)	-	1/12	粗	褐色(7.5YR6/8)	良好	口縁部内外面：摩滅不明(ナデカ)	口縁部外面・口縁部上面にそれぞれ円形浮文
69	養生土器	壺	SK69	-	174	(7.5)	-	4/12	粗	灰白色(2.5YR8/2)	やや軟	口縁部外面上半・内面：ヨコナテ、口縁部外面下半：ハケ	
70	養生土器	壺	SK69	-	-	(6.8)	-	-	粗	浅黄褐色(10YR8/3)	良好	胴部外面：ミガキ、胴部内面：摩滅不明	胴部に円形浮文
71	養生土器	壺	SK69	-	89	(6.6)	-	6/12	粗	にぶい褐色(7.5YR7/4)	良	口縁部内外面：ヨコナテ、胴部内外面：ナデ	
72	養生土器	壺	SK69	-	114	(6.6)	-	5/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ、口縁部外面：ハケのちナデ、口縁部内面：ナデ、体部内面：ハケ	
73	養生土器	壺	SK69	-	111	(6.6)	-	3/12	粗	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナテ	
74	養生土器	壺	SK69	-	-	(7.4)	7.4	6/12	粗	灰黄色褐色(10YR4/2)	良好	外面：ミガキ、内面・底部外面：ナデ、底部周囲：ユビオサエ・ナデ	
75	養生土器	壺	SK69	-	-	(8.3)	5.4	12/12	粗	外面：灰黄色褐色(10YR4/2)、内面：黄褐色(10YR7/3)	良好	外面：ミガキ(摩滅気味)、内面：ナデ、底部外面：ケズリのみナデ	

76	弥生土器	ミニチュア土器	SK69	-	-	(4.3)	-	-	やや粗	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良好	胴部外面：ヨコナデ、体部外面：ナデ、体部内面エビオサエ・ナデ
77	弥生土器	壺	SK69	-	-	(8.7)	-	頸3/12	粗	外面：橙色 (5YR6/6)、内面：灰黄色 (2.5Y7/2)	やや軟	胴部外面：ハケか、体部内外面：摩滅不明
78	弥生土器	甕	SK69	-	15.5	(3.5)	-	1/12	粗	灰白色 (10YR8/2)	軟	内外面：摩滅不明
79	弥生土器	甕	SK69	-	15.4	(3.2)	-	3/12	粗	外面：陶灰色 7.5YR4/1、内面：にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部内外面：ナデ
80	弥生土器	甕	SK69	-	17.2	(5.4)	-	1/12以下	粗	黒褐色 (10YR2/2)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：ハケのうちナデ、体部内面：ナデ
81	弥生土器	甕	SK69	-	21.4	(3.4)	-	2/12	やや粗	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	口縁部外部・口縁部外面：ヨコナデ、口縁部内面：ハケ
82	弥生土器	甕	SK69	-	14.4	(10.7)	-	2/12	粗	黒褐色 (7.5YR3/1)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：ハケのうちナデ、体部内面：ナデ
83	弥生土器	鉢小	SK69	-	14.4	(3.9)	-	2/12	やや粗	橙色 (7.5YR7/6)	良好	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：ハケ、体部内面：ナデ
84	弥生土器	高杯	SK69	-	21.4	(7.1)	-	2/12	粗	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	良好	杯口縁部内外面：ヨコナデ、杯底部外面：摩滅不明、杯底部内面：ナデ
85	弥生土器	高杯	SK69	-	19.4	6.6	-	6/12	粗	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	軟	内外面：摩滅不明
86	弥生土器	高杯	SK69	-	19.9	8.4	-	1/12	粗	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	やや軟	杯口縁部内外面：ヨコナデ、杯底部外面：摩滅不明 (ハケか)、杯底部内面：エビオサエ・ハケ・ナデ
87	弥生土器	高杯	SK69	-	19.1	6.4	-	1/12	粗	明赤褐色 (2.5YR5/6)	やや軟	杯口縁部外部：ヨコナデ、杯口縁部内外面：ミガキ、杯底部外面：ミガキ、杯底部内面：ミガキ (摩滅気味)
88	弥生土器	高杯	SK69	-	19.5	3.75	-	15/12	粗	外面：灰褐色 (7.5YR5/2)、内面：にぶい橙色 (5YR7/4)	良好	杯口縁部内外面：ヨコナデ、杯底部外面：ミガキ、杯底部内面：ナデ
89	弥生土器	高杯	SK69	-	-	(5.6)	-	実測範囲 完全	粗	灰色 (10YR8/2)	軟	脚柱部外面：ミガキ (摩滅)、脚柱部内面：ナデ
90	弥生土器	高杯	SK69	-	-	(10.7)	-	脚柱径 5/12	やや粗	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良好	脚柱部外面：ミガキ (摩滅)、脚柱部内面：ナデ
91	弥生土器	高杯	SK69	-	-	(3.9)	13.3	2/12	粗	灰褐色 (7.5YR6/2)	やや軟	脚部内外面：摩滅不明

下水主遺跡O地区

報告番号	器種	器形	出土遺構		法量			残存率	胎土	色調	焼成	調整	備考
			遺構名	層位	口径	器高	底径						
97	須恵器	杯蓋	高畑92	精査	-	(1.6)	-	-	密	灰白色 (N7.0)	堅緻	回転ナデ・回転ナデ後一方向ナデ	
98	須恵器	杯	高畑92	包含層下層	*138	(2.9)	-	1/12以下	密	暗青灰色 (5PB4/1)	堅緻	回転ナデ	
99	瓦器	椀	高畑92	-	12.2	(2.8)	-	2/12	密	暗青灰色 (5PB4/1)	良好	ナデ・ミガキ・摩滅	
100	瓦質土器	羽釜脚	高畑92西側	-	-	-	-	-	粗	暗灰色 (N3.0)	良好		
101	弥生土器	甕	高畑93	南半最下層	15.9	(4.3)	-	3/12	やや粗	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	やや軟	ナデ・横ナデ	
102	須恵器	杯B	高畑93	断割	-	(4.5)	(11.9)	1/12以下	密	灰白色 (N7.0)	堅緻	回転ナデ・貼付高台	
103	土師器	皿	高畑93	精査中	8.4	(1.5)	-	6/12	密	灰白色 (2.5Y8/2)	良好	ナデ・横ナデ	
104	瓦器	椀	高畑93	包含層下層	*9.9	(1.4)	-	1/12以下	密	灰色 (N3.0)	良好	ナデ	
105	白磁	椀	高畑92上面	-	17.0	(2.8)	-	1/12	密	灰白色 (7.5Y8/1)	堅緻	施釉	
106	瓦器	椀	高畑93	包含層下層	*14.0	(2.4)	-	1/12以下	密	灰色 (N4.0)	良好	内外面：摩滅 (少しミガキあり)	

107	土師器	天目	碗	島畑 93	-	*118	(4.6)	-	1/12 以下	密	暗赤褐色 (25YR3/4)	堅緻	施軸	
108	土師器	羽釜	碗	SN01 東側	-	-	(27)	-	-	やや粗	灰白色 (2.5Y8/2)	良好	横ナデ	
109	瓦質土器	鉢	碗	SN01	-	-	(37)	-	-	密	灰色 (N4/0)	良好	横ナデ・継がいのハケ目	
110	須恵器	杯	碗	島畑 94	包含層下層	*137	(3.0)	-	1/12 以下	密	灰色 (N4/0)	堅緻	回転ナデ	
111	土師器	皿	碗	島畑 94	包含層下層	7.7	(1.0)	-	2/12	やや粗	にぶい褐色 (10YR7/4)	良好	ナデ・横ナデ	
112	土師器	壺	碗	島畑 94	包含層下層	*138	(2.2)	-	1/12 以下	密	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	良好	ナデ・横ナデ	
113	青磁	碗	碗	島畑 94	包含層下層	*137	(1.8)	-	1/12 以下	密	明緑白色 (7.5Y7/1)	堅緻	施軸・蓮弁紋	
114	瓦質土器	火鉢か	碗	SN01 東側	-	-	-	-	-	密	灰色 (N4/0)	良	最大幅 (7.6) 最大長 (3.6) 厚さ 2.1 ~ 2.8	
115	須恵器	杯蓋	碗	SN02	-	*158	(1.6)	-	1/12 以下	密	灰白色 (N7/0)	堅緻	ロクロナデ	
116	須恵器	杯 B	碗	SN02	-	-	(17)	10.8	底 1/12	密	灰白色 (N7/0)	堅緻	ロクロナデ・貼付高台・ヘラ切り後ナデ	
117	須恵器	杯 B	碗	SN02	-	-	(19)	7.6	底 2/12	密	灰白色 (N7/0)	堅緻	ロクロナデ・貼付高台・ヘラ切り後ナデ・貼付時ナデ	
118	土師器	天目	碗	SN02	-	-	29	4.6	5/12	密	外面：こげ茶色・明茶色 内面：こげ茶色	堅緻	施軸・貼付高台	
119	土師器	皿	碗	SN02	-	13.5	(2.6)	-	2/12	良	灰白色 (10YR8/2)	良好	ナデ・横ナデ	
120	白磁	皿	碗	SN02	-	*10.0	(2.6)	-	1/12 以下	密	灰白色 (5Y7/1)	堅緻	施軸 (口ハケ)	
121	須恵器	杯 B	碗	SD08	-	-	1.2	11.5	底 2/12	密	灰白色 (N7/0)	堅緻	回転ナデ	
122	弥生土器	甕	碗	SD17 南	-	5.7	(2.6)	-	底 6/12	粗	外面：にぶい黄色 (10YR7/3)、 内面：灰色 (5Y5/1)	良好	ナデ	
123	瓦器	碗	碗	SD17	-	12.0	(3.1)	-	1/12	密	灰白色 (N8/0)	良好	ミガキ・横ナデ・ナデ・貼付高台	
124	土師器	天目	碗	SN03	-	11.8	(4.3)	-	1/12	密	施軸：濃茶色、 露胎：うす茶色	堅緻	施軸	
125	土師器	壺	碗	SX57	-	9.8	(2.0)	-	1/12	密	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	良好	ナデ・横ナデ	
126	須恵器	横敷	碗	SD17 南半西側	7.2	(4.5)	-	-	3/12 強	密	内外面：青灰色 (5PB5/1)、 断面：紫灰色 (5RP6/1)	堅緻	回転ナデ・カキ目・タタキ	
127	瓦器	碗	碗	SD17 北側	*139	(2.3)	-	-	1/12 以下	密	灰白色 (N8/0)	良好	ナデ・横ナデ	
128	瓦器	皿	碗	SD17	-	13.9	(1.8)	-	1/12	密	灰白色 (N8/0) 一部灰色 (N4/0)	良好	ミガキ・横ナデ・ナデ	
129	白磁	碗	碗	SN03	-	13.9	(4.3)	-	2/12	密	灰白色 (5Y7/1)	堅緻	施軸	
130	土師器	壺	碗	SX57	-	11.7	(2.3)	-	1/12	粗	外面：褐色 (7.5YR5/1)、 内面：浅黄褐色 (7.5YR8/3)	やや軟	摩滅・調整不明	
131	土師器	皿	碗	-	攪乱	9.8	2.0	-	不明	密	浅黄褐色 (10YR8/3)	良好	ナデ・横ナデ	
132	陶器	碗	碗	-	重機掘削時	-	(1.2)	5.6	1/12 以下	密	暗オリーブ灰色 (5GY4/1)	堅緻	施軸	
133	須恵器	杯	碗	-	重機掘削時	*138	(2.4)	-	1/12 以下	密	灰色 (N6/0)	堅緻	回転ナデ	
134	須恵器	壺	碗	-	攪乱 2	13.1	(3.7)	-	1/12	密	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	堅緻	回転ナデ	
135	土師器	羽釜	碗	-	精査中	18.5	(3.9)	-	1/12	密	にぶい褐色 (5YR7/3)	良好	ナデ	

付表2 石器・石製品一覧

番号	器種	器形	出土遺構			法量(単位はcm, 重量のみg)			
			地区名	遺構名	層位・状況	全長	幅	厚	重量
25	石器	石鏃	L2区	D4-g1区	灰オリーブ粘土層	(16)	1.5	0.4	0.9
26	石器	石槍	L2区	D4-g2区	灰オリーブ粘土層	(5.5)	(2.7)	0.5	7.5
92	石器	石槍	M2区	SK68	-	7.0	3.4	0.9	20.9
93	石器	石鏃	M2区	SK68	-	3.9	2.4	0.6	4.4
94	石器	石鏃	M2区	SK69	-	3.7	2.2	0.8	5.1
136	石器	石鏃	O地区	鳥畑94	最下層	3.9	2.6	0.4	2.7
137	石器	石鏃	O地区	SX57	-	(3.7)	1.6	0.4	2.3
138	石器	石鏃	O地区	SN04	-	3.6	2.0	0.5	2.7
139	石器	石匙?	O地区	-	掘削中	4.1	3.6	0.8	14.2
140	石製品	硯石	O地区	鳥畑92	-	(5.1)	3.7	1.0	
141	石製品	硯石	O地区	SN02	-	(6.8)	3.3	1.6	

()は残存値

付表3 鉄器一覧

番号	種類	器種	出土遺構			法量(単位はcm, 重量のみg)			
			地区名	遺構名	層位・状況	全長	幅	厚	重量
95	鉄器	不明	L2区	鳥畑72	上面	7.35	200	0.5	13.7
96	鉄器	鉄釘	M2区	鳥畑80	上面	3.6	0.7	0.7	4.3
142	鉄器	鉄釘	O区	鳥畑②	上面	3.2	0.65	0.55	2.3
143	鉄器	鉄釘	O区	鳥畑②	上面	2.8	0.45	0.55	1.6
144	鉄器	鉄釘	O区	鳥畑4 包含層下層		4.1	0.8	0.8	5.8

圖 版

(1) 調査前全景(南東から)



(2) 1トレンチ全景(西から)



(3) 2トレンチ全景(西から)





(1) 3トレンチ全景(南から)



(2) 4トレンチ全景(南から)

(1) 3トレンチ瓦器輪出土状況
(東から)



(2) 4トレンチ井戸SE401
(西から)



(3) 5トレンチ全景(北から)





出土遺物



(1) 調査前の状況(東から)



(2) 1トレンチ全景(東から)



(1) 1 トレンチ全景(西から)



(2) 1 トレンチ井戸 S E31(南から)



(1) 2 トレンチ全景(東から)



(2) 3 トレンチ全景(西から)



(1) 4 トレンチ全景(東から)



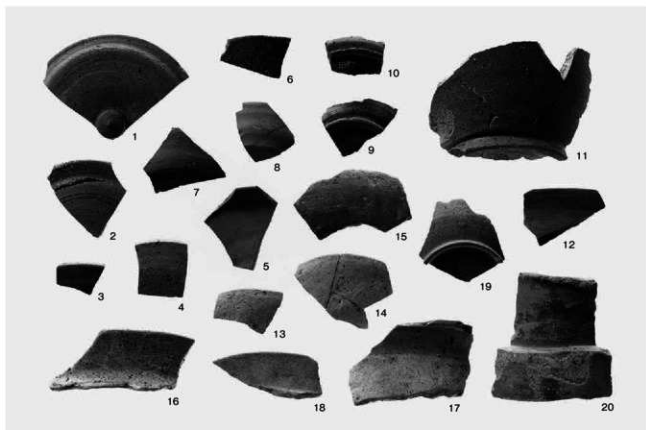
(2) 4 トレンチ掘立柱建物 2 (南から)



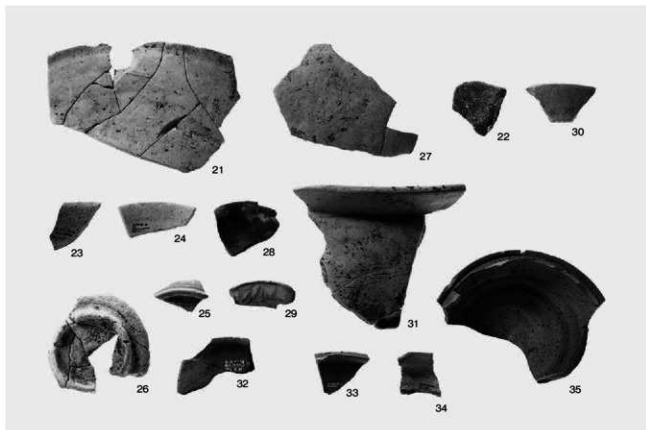
(1) 5 トレンチ全景(北から)



(2) 6 トレンチ全景(西から)



(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2

下水主遺跡第 6 次

(1) M1 区全景(南から)



(2) M1 区全景(北から)



(3) M1 区調査区北壁土層断面
(南から)



下水主遺跡第 6 次



(1) M1 区島畑81全景(北から)



(2) M1 区溝状遺構 S D04 全景
(北から)



(3) M1 区島畑79全景(北から)

下水主遺跡第 6 次



(1) M1 区島畑80全景(北から)



(2) M1 区島畑全景(南から)



(3) M1 区島畑80(溝 S D50検出後)
全景(南から)

下水主遺跡第 6 次



(1) M 1 区島畑80上面検出素掘り溝 S D27土層断面(南から)



(2) M 1 区島畑80上面検出溝 S D50土層断面(南から)



(3) M 1 区溝状遺構 S D04内検出素掘り溝 S D16・18土層断面(南から)

下水主遺跡第 6 次

(1) M1 区溝状遺構 S D06・
溝 S D48土層断面(東から)



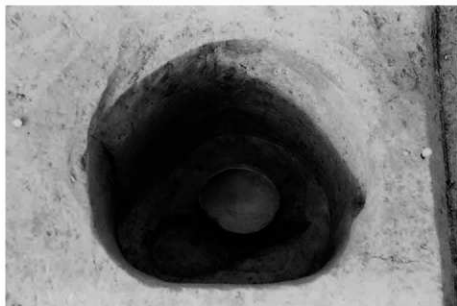
(2) M1 区溝状遺構 S D06・
溝 S D48全景(東から)



(3) M1 区溝状遺構 S D04内検出素
掘り溝 S D25・26土層断面
(南から)



下水主遺跡第 6 次



(1) M1 区柱穴 S P 40 遺物出土
状況 (南から)



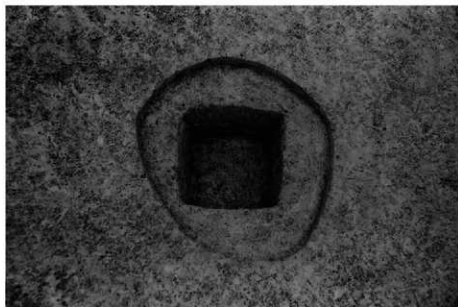
(2) M1 区柱穴 S P 40 完掘状況
(南から)



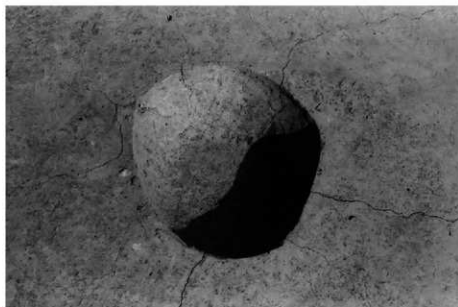
(3) M1 区ビット S P 43 完掘状況
(南から)

下水主遺跡第 6 次

(1) M1 区ビット S P 41 柱根
掘削状況 (南から)



(2) M1 区ビット S P 41 完掘状況
(南から)



(3) M1 区土坑 S K 42 完掘状況
(南から)



下水主遺跡第 6 次



(1) M1 区溝 S D37 遺物出土状況
(北東から)



(2) M1 区溝 S D37 遺物出土状況
(部分、北東から)



(3) M1 区溝 S D37 全景
(北東から)

下水主遺跡第 8 次

(1) L 2・M 2 区全景(南から)



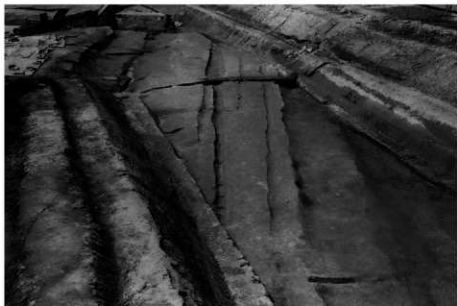
(2) L 2・M 2 区全景(真上から、
上が北)



(3) L 2・M 2 区全景(北から)



下水主遺跡第8次



(1) L2区島畑71全景(南から)



(2) L2区島畑71全景(北から)



(3) L2区島畑71全景(北東から)

下水主遺跡第8次

(1) L2区島畑69全景(北から)



(2) L2区島畑69全景(南から)



(3) L2区島畑69全景(北東から)



下水主遺跡第8次



(1) L2区島畑69上面素掘り溝
SD50跡痕跡検出状況(南から)



(2) L2区島畑72全景(南から)



(3) L2区島畑72全景(北東から)

下水主遺跡第8次



(1) L2区島畑72全景(北から)



(2) L2区溝状遺構S D43土層断面
(北から)



(3) L2区全景(北から)

下水主遺跡第8次



(1) L2区風倒木痕完掘状況
(南から)



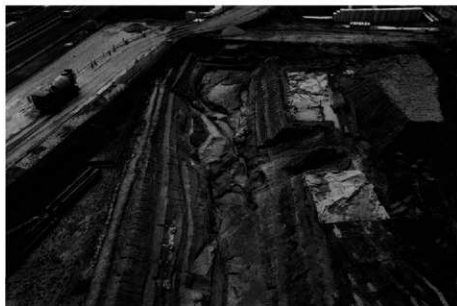
(2) L2区氾濫流路NR38検出状況
(南西から)



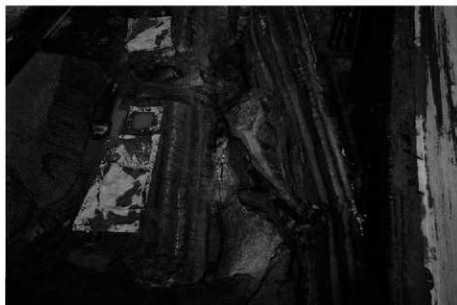
(3) L2区氾濫流路NR38完掘状況
(南西から)

下水主遺跡第 8 次

(1) L 2 区氾濫流路 N R 60 全景
(北から)



(2) L 2 区氾濫流路 N R 60 全景
(南から)



(3) L 2・M 2 区下層遺構面全景
(西から)



下水主遺跡第 8 次



(1) L 2 区氾濫流路NR42・60全景
(北から)



(2) L 2 区氾濫流路NR42・60全景
(南から)



(3) L 2 区氾濫流路NR42全景
(南西から)

下水主遺跡第 8 次

(1) L 2 区氾濫流路 N R 60 土層断面
(南西から)



(2) L 2 区氾濫流路 N R 60 土層断面
(北半部、南西から)



(3) L 2 区氾濫流路 N R 60 土層断面
(南半部、南西から)



下水主遺跡第8次



(1) L2区氾濫流路NR42・60全景
(南から)



(2) L2区氾濫流路NR38全景
(南から)



(3) L2区氾濫流路NR42土層断面
(西から)

下水主遺跡第 8 次



(1) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土
状況(北西から)

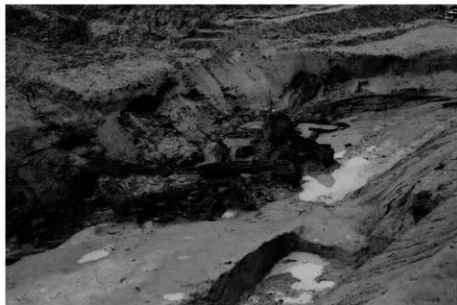


(2) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土
状況(南西から)



(3) L 2 区氾濫流路 N R 42 木材出土
状況(南西から)

下水主遺跡第 8 次



(1) L 2 区氾濫流路NR42木材出土
状況(南東から)



(2) L 2 区氾濫流路NR60木材出土
状況(南西から)



(3) L 2 区氾濫流路NR60木材出土
状況(北西から)

下水主遺跡第8次



(1) M2区西調査区全景(北から)



(2) M2区西調査区全景(南から)



(3) M2区島畑80上層面全景
(北から)

下水主遺跡第 8 次



(1) M2区素掘り溝SD70全景
(北から)



(2) M2区素掘り溝SD52・67全景
(北から)



(3) M2区島畑80北壁土層断面
(南から)

下水主遺跡第 8 次

(1) M 2 区烏畑 80 下層面全景
(南から)



(2) M 2 区烏畑 80 下層面全景
(北から)



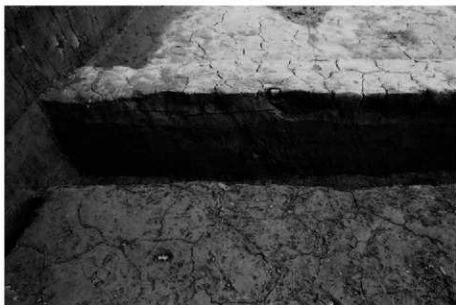
(3) M 2 区素掘り溝 S D71~73
土層断面(北から)



下水主遺跡第 8 次



(1) M 2 区島畑 80 中央断ち割り
状況(北西から)



(2) M 2 区島畑 80 中央断ち割り
東半部土層断面(北から)



(3) M 2 区島畑 80 中央断ち割り
西半部土層断面(北から)

下水主遺跡第 8 次



(1) M 2 区島畑90全景(北から)



(2) M 2 区島畑90全景(南東から)



(3) M 2 区島畑90全景(南から)

下水主遺跡第 8 次



(1) M 2 区島畑73全景(東から)



(2) M 2 区島畑全景(北西から)



(3) M 2 区東調査区下層遺構面全景
(北から)

下水主遺跡第 8 次

(1) M2 区土坑 S K51 遺物出土状況
(最上層、東から)



(2) M2 区土坑 S K51 遺物出土状況
(上層、南から)



(3) M2 区土坑 S K51 遺物出土状況
(中層、南から)



下水主遺跡第 8 次



(1) M2 区土坑 S K51 遺物出土状況
(中層、西から)



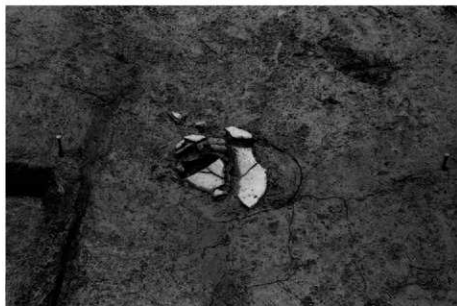
(2) M2 区土坑 S K51 遺物出土状況
(下層、南から)



(3) M2 区土坑 S K51 完掘状況
(南から)

下水主遺跡第 8 次

(1) M2 区ピット S P 75 遺物出土
状況(北から)



(2) M2 区ピット S P 75 完掘状況
(北から)



(3) M2 区ピット S K 79 全景
(東から)



下水主遺跡第8次



(1) M2区土坑SK68・69全景
(南から)



(2) M2区土坑SK68・69全景
(北から)



(3) M2区土坑SK68・69完掘後
全景(北から)

下水主遺跡第 8 次

(1) M2 区土坑 S K68 遺物出土状況
(上層、西から)



(2) M2 区土坑 S K68 土層断面
(南半、西から)



(3) M2 区土坑 S K68 土層断面
(西半、南から)



下水主遺跡第8次



(1) M2区土坑S K68遺物出土状況
(下層、西から)



(2) M2区土坑S K68下層遺物出土
状況(西から)



(3) M2区土坑S K68完掘後全景
(西から)

下水主遺跡第 8 次



(1) M 2 区土坑 S K 69 遺物出土状況
(上層、南から)

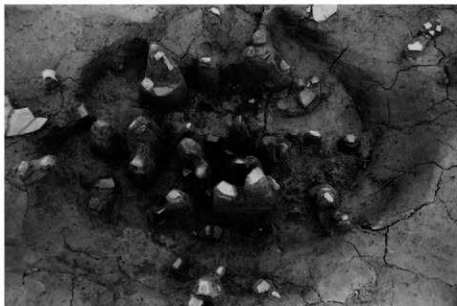


(2) M 2 区土坑 S K 69 遺物出土状況
(上層、西から)



(3) M 2 区土坑 S K 69 土層断面
(南から)

下水主遺跡第 8 次



(1) M2 区土坑 S K69 遺物出土状況
(下層、東から)



(2) M2 区土坑 S K69 全景(北から)



(3) M2 区土坑 S K69 完掘後全景
(南東から)

下水主遺跡第8次

(1) O1区全景(南東から)



(2) O1区全景(北東から)



(3) O1区南壁土層断面(北から)



下水主遺跡第8次



(1) O1区島畑94・溝状遺構SD01
全景(南西から)



(2) O1区島畑91全景
(近世面、北から)



(3) O1区島畑92全景
(近世面、北から)

下水主遺跡第8次



(1) O1区烏畑検出状況(北西から)



(2) O1区烏畑検出状況(東から)



(3) O1区烏畑検出状況
(北半部、南西から)

下水主遺跡第8次



(1) O1区島畑91全景(南から)



(2) O1区溝状遺構SD03全景
(北から)



(3) O1区島畑93全景(北から)

下水主遺跡第 8 次

(1) O 1 区島畑92全景(南から)



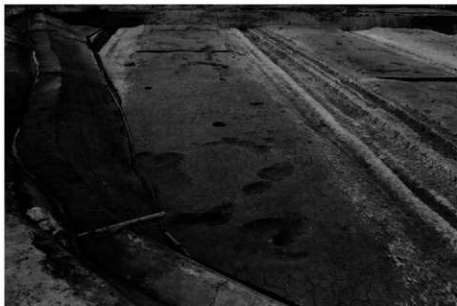
(2) O 1 区溝状遺構 S D04全景
(北から)



(3) O 1 区溝状遺構 S D02全景
(南から)



下水主遺跡第8次



(1) O1区島畑95全景(南から)



(2) O1区島畑95全景(北から)



(3) O1区溝状遺構S N05全景
(北から)

下水主遺跡第8次



(1) O2区烏畑検出状況(南東から)



(2) O2区烏畑検出状況(東から)



(3) O2区烏畑検出状況(北西から)

下水主遺跡第8次



(1) O2区北壁(東半部)土層断面
(南から)



(2) O2区北壁(中央部)土層断面
(南から)



(3) O2区北壁(西半部)土層断面
(南から)

下水主遺跡第 8 次

(1) O 2 区島畑91全景(北から)



(2) O 2 区溝状遺構 S D02全景
(北から)



(3) O 2 区島畑92全景(北から)



下水主遺跡第8次



(1) O2区溝状遺構SD03全景
(南から)



(2) O2区島畑B3全景(南から)



(3) O2区溝状遺構SD04全景
(南から)

下水主遺跡第 8 次



(1) O 2 区島畑96全景(南から)

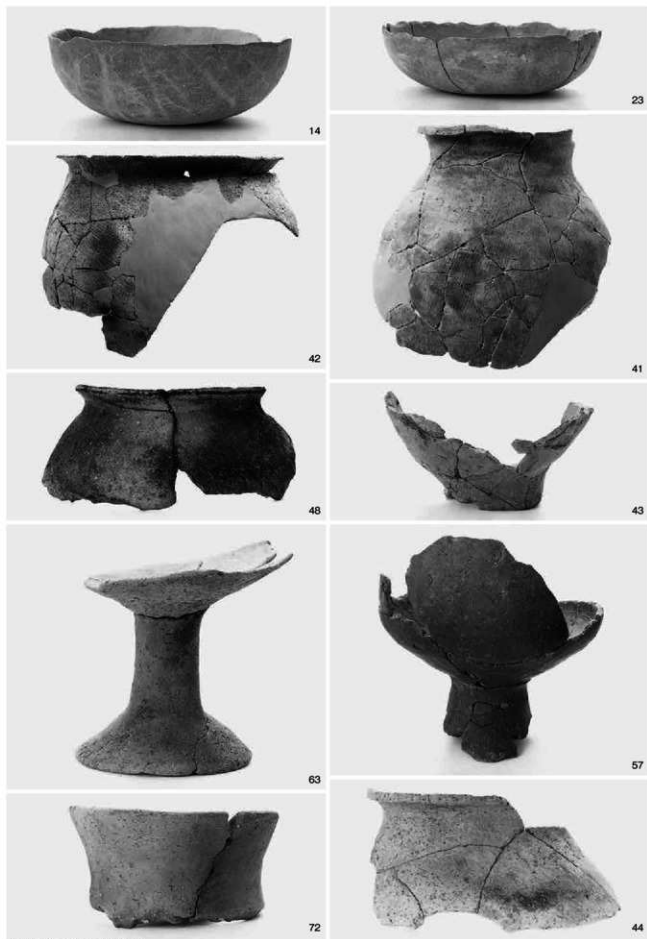


(2) O 2 区溝状遺構 S D04 石鐵出土
状況(南から)



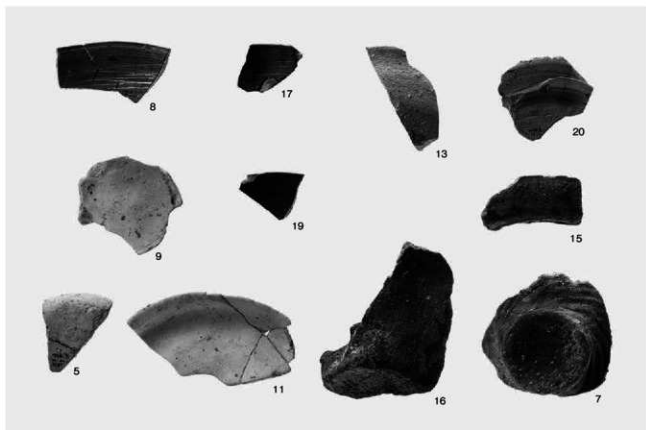
(3) O 2 区土坑 S K 57 石鐵出土状況
(西から)

下水主遺跡第 8 次



出土遺物 1 (M2 区出土)

下水主遺跡第 6 次・8 次

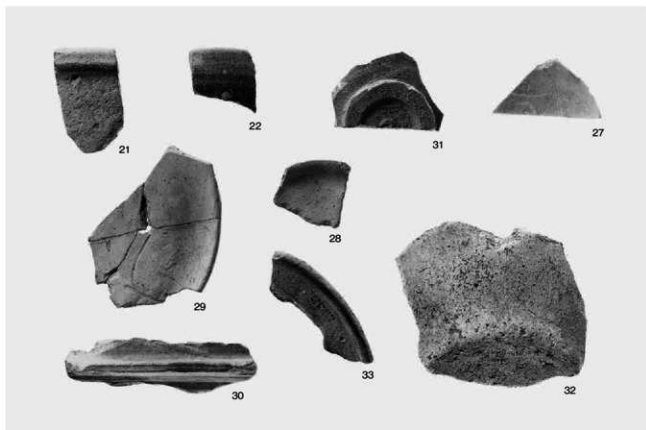


(1) 出土遺物 2 (M1 区出土)

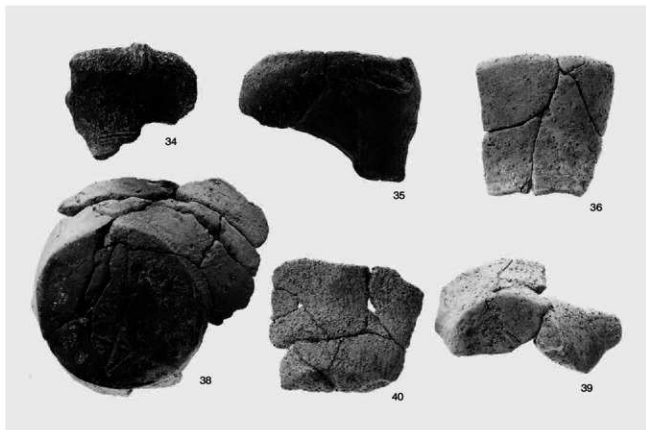


(2) 出土遺物 3 (L2 区出土)

下水主遺跡第 8 次

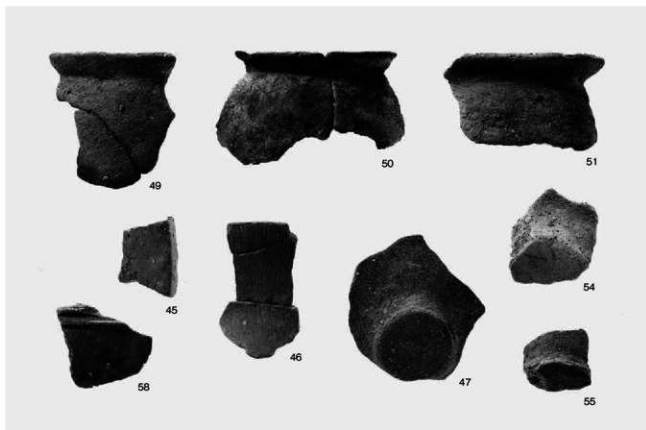


(1) 出土遺物 4 (M2 区出土)

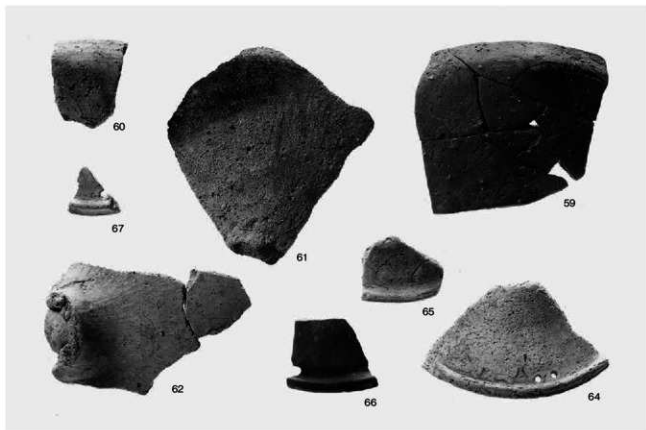


(2) 出土遺物 5 (M2 区土坑 S K51 出土)

下水主遺跡第 8 次

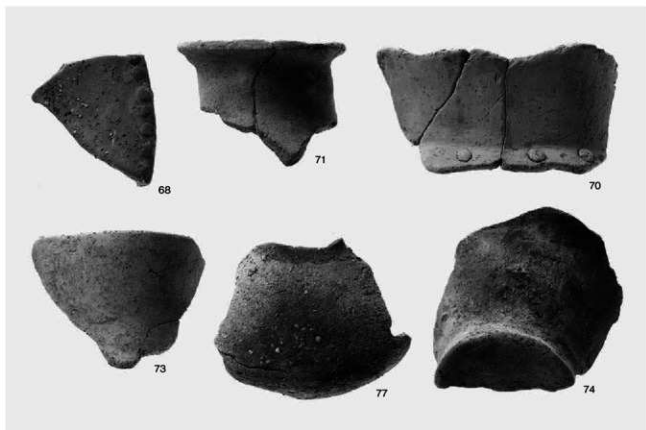


(1) 出土遺物 6 (M2 区土坑 S K68 出土)

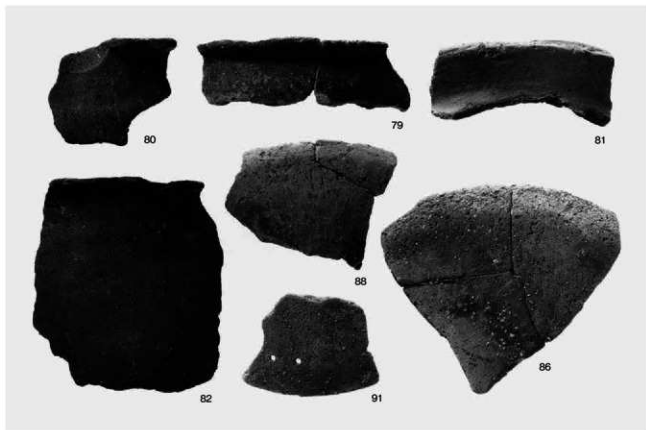


(2) 出土遺物 7 (M2 区土坑 S K68 出土)

下水主遺跡第 8 次

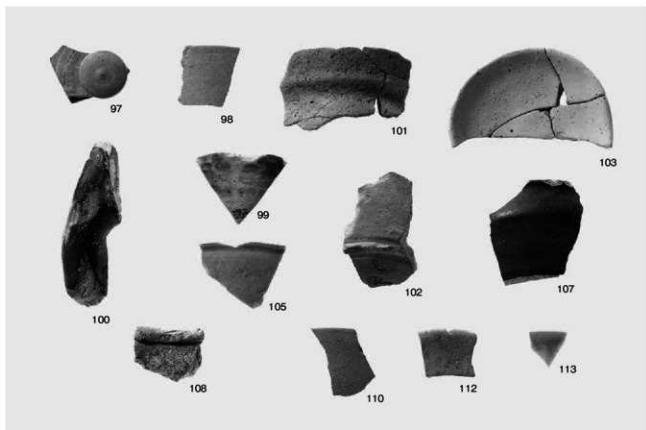


(1) 出土遺物 8 (M2 区土坑 S K69 出土)

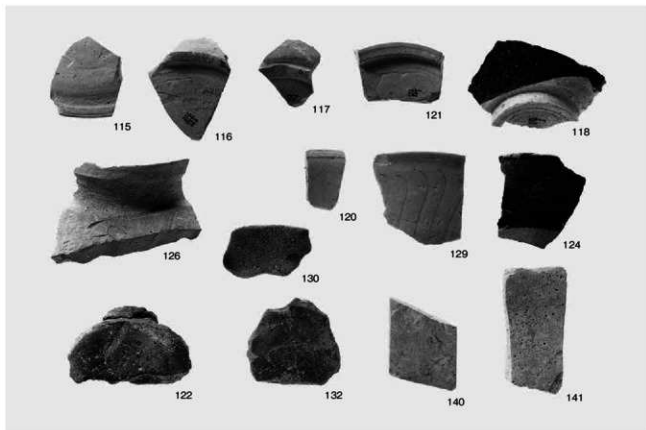


(2) 出土遺物 9 (M2 区土坑 S K69 出土)

下水主遺跡第8次

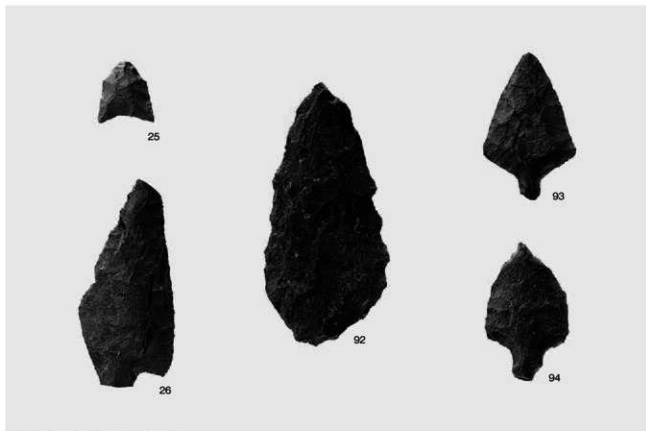


(1)出土遺物10(O地区出土)

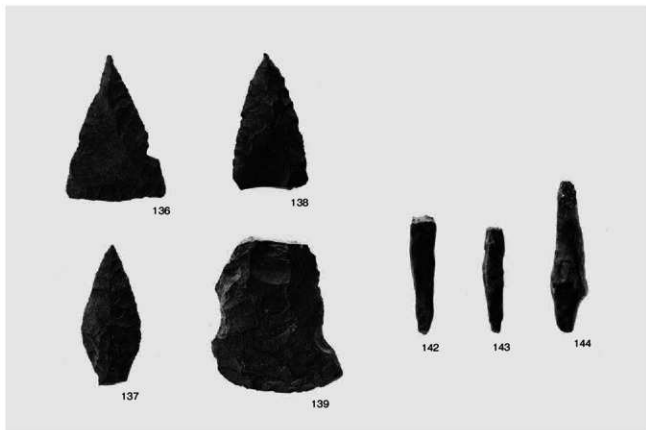


(2)出土遺物11(O地区出土)

下水主遺跡第 8 次



(1) 出土遺物 12 (L 2・M 2 区出土)



(2) 出土遺物 13 (O 地区出土)

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちやうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第170冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第170冊
編著者名	引原茂治・増田孝彦・石井清司・筒井崇史・竹村亮仁・橋本稔・渡邊拓也・田原葉月・伊賀高弘・松井忍
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2017年3月23日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	' ' "	' ' "		m ²	
ながおかきやうあとういごひやくじゅうよじ・でんちやういせき 長岡宮跡第514次・殿長遺跡	きょうとふむこうしてらどちやうきたかきやうち 京都府向日市寺戸町北垣内	26208	33	34° 57' 10"	135° 42' 01"	20160628 ～ 20160704 20161219 ～ 20161221	30	道路建設
ながおかきやうあとうきやうだいせんひやくさんじゅうはちじ・いのうちいせき・いまぎといせき 長岡京跡右京第1138次・井ノ内遺跡・今里遺跡	きょうとふながおかきやうしいまぎと 京都府長岡京市今里5丁目	26209	15	34° 56' 20"	135° 41' 12"	20160823 ～ 20160914	196	道路建設
しもみずいせき 下水主遺跡	きょうとふじやうようしてらだいまばし・みなみかわせ 京都府城陽市寺田今橋・南川瀬	26207	88	34° 51' 06"	135° 45' 41"	20141117 ～ 20150306 20150424 ～ 20151009	1,220 6,000	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡宮跡第514次・殿長遺跡	集落跡	古代～中世	土坑・溝・井戸・ピット	土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦	
長岡京跡右京第1138次・井ノ内遺跡・今里遺跡	集落跡	古墳～中世	掘立柱建物・土坑・井戸・柱穴	土師器・須恵器・瓦質土器・製塩土器・瓦	
下水主遺跡	生産遺跡	縄文晩期～中世	氾濫流路・土坑・溝・鳥畑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・石器	

所収遺跡名	要 約
長岡宮跡第514次・殿長遺跡	今回の調査は、府道西京高槻線の拡幅工事に伴い5か所にトレンチを設けて実施した。長岡京北辺推定地にあたる調査区もあったが、長岡京期の遺構は検出できなかった。中世の集落に関わるとみられる13世紀頃の溝、16世紀頃の石組井戸等を検出し、瓦器、土師器、陶磁器等が出土した。
長岡京跡右京第1138次・井ノ内遺跡・今里遺跡	今回の調査は、府道長法寺向日線拡幅工事に伴い6か所にトレンチを設定し、調査を実施した。長岡京に関する条坊遺構は確認できなかったが、井戸1基を検出した。古墳時代後期と推定される掘立柱建物2棟、中世の集落に関わると考えられる土坑、柱穴を確認した。そのほか、10世紀代の柱穴が検出されており、周辺に当該期の遺構の存在が示唆される。
下水主遺跡	下水主遺跡L2・M・O地区では、平成26・27年度に現地調査を実施した地点で、中世段階に造られた鳥畑14基の様相とL区とM区の境に想定された坪境溝の可能性のある東西方向の溝を検出した。また、鳥畑の造成以前の遺構として弥生時代中・後期の土坑のほか、L1区で検出されていた縄文時代後・晩期の流路の東延長部を確認した。 鳥畑の調査では南北方向の長地型を基調とし、坪境付近では東西方向の鳥畑が存在すること、鳥畑成形に際しても前後関係が存在することを確認した。下層の弥生時代中・後期の遺構が調査地の北東部に点在しており、調査地周辺に堅穴建物を含む集落の中心部が存在する可能性が高まった。また縄文時代後・晩期には木津川の破堤によって形成された流路の存在とともに流路内に堆積した植物遺体によって縄文時代後・晩期の自然環境を明らかにすることができた。

京都府遺跡調査報告集 第170冊

平成29年3月23日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141